

波佐見町文化財調査報告書第4集

波佐見町内古窯跡群調査報告書

1993

長崎県波佐見町教育委員会

波佐見町文化財調査報告書第4集

波佐見町内古窯跡群調査報告書





咽口窑址出土陶磁器

発刊にあたって

波佐見町では17世紀初頭のころから陶磁器の生産が始まられ、今日まで約四百年間焼き続けられてきました。

町内には、その間の歴史を秘めた数多くの貴重な古窯跡が存在していますが、体系的な調査・研究ができていなかったためにその大半は実態や内容が明らかにされていませんでした。

町では、これらの古窯跡群を保護・活用していくための基礎資料を得るために、平成2年度から3カ年計画で、国・県の補助事業により町内古窯跡群の遺跡発掘調査を実施してきました。

平成2年度は、山似田窯跡、木場山窯跡、咽口窯跡。3年度には、中尾上登窯跡、中尾下登窯跡、辺後ノ谷窯跡の調査を実施して多くの成果をあげることができました。今年度は、永尾本登窯跡、三股新登窯跡、百貫西窯跡の調査を行い、新たな事実や多くの貴重な資料を得ることができました。

この3カ年の調査は、長崎県教育委員会文化課関係職員各位の献身的なご指導とご協力によって実施し、大きな成果を挙げることができました。

なお、調査にあたりご指導をいただきました佐賀県立九州陶磁文化館の大橋康二学芸課長はじめ関係各位に深く感謝申しあげます。

平成5年3月31日

波佐見町教育委員会

教育長 渡邊 満

言 例

1. 本書は、平成2年度から平成4年度に国庫補助事業として実施した波佐見町内古窯跡群の調査報告書である。

2. 調査を実施した窯跡は、以下のとおりである。

平成2年度

① 山似田窯跡 (村木郷字山似田)

② 木場山窯跡 (永尾郷字木場山)

③ 喫口窯跡 (三股郷字喫口)

平成3年度

① 中尾上登窯跡 (中尾郷字白岳)

② 中尾下登窯跡 (中尾郷字下中尾)

③ 辺後ノ谷窯跡 (皿山郷字辺後ノ谷)

平成4年度

① 永尾本壹窯跡 (永尾郷字永尾山)

② 三股新壹窯跡 (三股郷字新壹)

③ 百貫西窯跡 (村木郷字百貫)

3. 調査は、波佐見町教育委員会が事業主体となり、県教育委員会が調査を担当した。

4. 調査関係者は以下のとおりである。

波佐見町教育委員会	渡邊 満	教育長
	丸田 稔	社会教育課長（平成2年度）
	一瀬 信雄	社会教育課長
	石峰 実	社会教育係長
	岳邊 忠彦	社会教育主事補
長崎県教育庁文化課	副島 和明	主任文化財保護主事
	宮崎 貴夫	主任文化財保護主事
	村川 逸朗	文化財保護主事
調査指導	大橋 康二	佐賀県立九州陶磁文化館学芸課長
	田川 肇	長崎県教育庁文化課課長補佐
調査協力	オリバー・R・インビー、佐々木達夫、鈴田由紀夫、 野上建紀、村上伸之、前田ひとみ 他に、土地所有者を はじめ地元各位の協力をいただきました	

5. 本書は、宮崎と村川が分担執筆し、文責については本文目次と各項に示した。

6. 本書の編集は、宮崎による。

凡　　例

1. 本書での陶磁器の年代・内容については、大橋氏による現地と整理における指導と以下の同氏主要文献を参考にした。誤謬については浅学な筆者らの責任である。

- ①大橋康二「肥前陶磁の変遷と出土分布」『国内出土の肥前陶磁』 佐賀県立九州陶磁文化館 1984
- ②大橋康二「十七世紀における肥前陶磁の変遷」MUSEUM NO. 415 1985
- ③大橋康二「伊万里磁器研究の現状」考古学ジャーナル NO. 297 ニューサイエンス社 1988
- ④大橋康二「伊万里磁器研究の到達点と課題」考古学ジャーナルNO. 299 ニューサイエンス社 1988
- ⑤大橋康二『西有田の古窯一西有田町史別編』西有田町史編纂委員会 1988
- ⑥大橋康二・尾崎葉子『有田町史 古窯編』有田町史編纂委員会 1988
- ⑦大橋康二「波佐見焼の変遷」「長崎の陶磁」佐賀県立九州陶磁文化館 1988
- ⑧大橋康二・西田宏子『古伊万里』別冊太陽 平凡社 1988
- ⑨大橋康二「肥前陶磁」 ニューサイエンス社 1989
- ⑩大橋康二「肥前の青磁」「日本の青磁」佐賀県立九州陶磁文化館 1989
- ⑪大橋康二「東南アジアに輸出された肥前陶磁」「海を渡った肥前のやきもの展」佐賀県立九州陶磁文化館 1990

2. 陶磁器の器形・文様分類については、以下の文献を参考にした。

- ①大八木嘉司編『四谷三丁目遺跡』別冊「江戸遺跡検出のやきもの分類」東京消防庁 新宿区 四谷三丁目遺跡調査団 1991
- ②三木弘他編『内藤町遺跡第II分冊<遺物編>』東京都建設局新宿区内藤町遺跡調査会 1992
- ③長崎県窯業試験場編「波佐見古窯陶磁文様集」 肥前波佐見焼振興会 1982

3. 窯道具の分類については、大橋氏の文献を参考にした。

- ①大橋康二「肥前古窯の変遷」 九州陶磁文化館研究紀要第1号 佐賀県立九州陶磁文化館 1986

4. 窯跡の主軸方位は磁北によって計測している。

本文目次

頁文責

1.はじめに.....	1	(宮崎)
2.山似田窯跡.....	5	(宮崎)
3.木場山窯跡.....	15	(宮崎)
4.咽口窯跡.....	33	(宮崎)
5.中尾上登窯跡.....	48	(宮崎)
6.中尾下登窯跡.....	69	(宮崎)
7.辺後ノ谷窯跡.....	71	(宮崎・村川)
8.永尾本登窯跡.....	83	(宮崎)
9.三股新登窯跡	103	(宮崎)
10.百貫西窯跡	113	(村川)
11.おわりに	129	(宮崎)

1. はじめに

(1) 地理・歴史的環境

波佐見町は、県本部のほぼ中央に位置し、海に恵まれた長崎県において数少ない海がない町の一つである。佐賀県の有田町、山内町、武雄市、嬉野町、長崎県の佐世保市、川棚町と接し、東西10.5km、南北7km、面積56.01km²の規模をもち、16000人ほどの人口を有する。

地勢的にみると100m～500mの山々によって囲まれた盆地地形をなしており、川棚町を経て大村湾に注ぐ川棚川（波佐見川）とその支流が開拓した谷間がありこみ、中央に沖積平野が形成されている。地質的には、杵島層群とよばれる砂岩の第三紀層が基盤となり、南東部を虚空巖山が噴出した流紋岩（陶石）と凝灰角砾岩が覆って形成されている。特に、三股・中尾・永尾地区に分布する陶石の存在が、町の産業発展に大きな影響を与えることになった。

当地域は、天正年間（1573～1591）ごろに大村領への所属が定まり、江戸時代には波佐見一万石とよばれた大村藩の駿倉地で、佐賀鍋島藩、平戸松浦藩と領界を接していた。町の北西隅には三藩を分ける三輪石があり、それを中心として有田、三川内などの肥前地域を代表する窯業地帯が展開する。

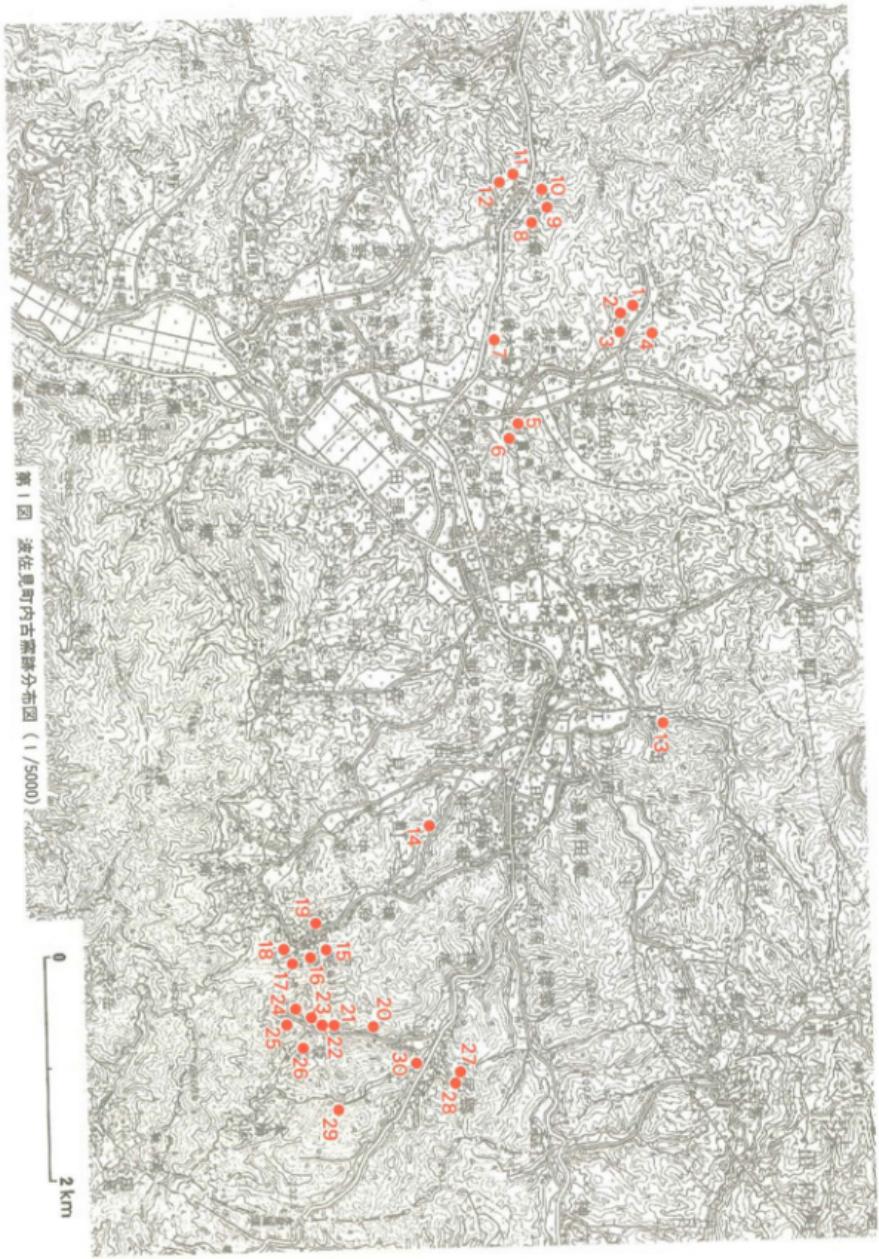
町の産業では、平野を背景とした農業が盛んであるが、町をもっとも特色づけるのは窯業である。町外からの通勤も含めて6000人ほどの従業者をかかえ、基幹産業として町のほとんどの人が窯業に何らかの関わりをもっているといつても過言ではない。県内窯業の中心地であることはいうまでもないが、国内で使用される日用食器の15%が生産され「有田焼」の名で出荷されている。

町内には、17世紀初頭の陶器から磁器創成にかかる窯として著名な烟ノ原窯跡をはじめ、海外輸出向けの「波佐見青磁」や上手物の染付磁器、国内向けに生産された「くらわんか茶碗」などを盛んに焼いた古窯跡が30数箇所存在し、畠地や山林に窯壁や物原を見ることができる。

(2) 調査の経緯

しかし、それらの古窯跡群は二・三を除いてほとんどの窯跡が調査をされておらず、実態や内容が明らかでないものが大半を占めていた。町では、これらの古窯跡群を自然崩壊と開発の波から保護し、文化財の保存を図るために基礎資料を得る目的で、国庫補助事業による古窯跡群の範囲確認調査を平成2年度から3箇年計画で実施することになった。

平成2年度は、山似田窯跡（村木郷）、木場山窯跡（永尾郷）、咽口窯跡（三股郷）を調査対象として、平成2年10月23日～11月15日に81m²を発掘調査し、併せて窯跡周辺の測量を行った。最初の調査で窯に不慣れということもあり、問題意識をもった調査ができなかっただなどの反省点も多いが、山似田窯跡では烟ノ原窯跡と類似した焼成室を検出し、また窯の形状が全く分からなかった木場山窯跡では焼成室の一部が確認され、咽口窯跡では17世紀後半代の主に輸出用



第1図 波佐見町内古墓群分布図 (1/5000) / Map of ancient burial mound distribution in the town of Wada (1/5000 scale).

表1 波佐見町内古窯跡一覧

番号	窑名	所在地	番号	窑名	所在地
1	烟ノ原窯跡	村木郷字烟原	16	中尾上登窯跡	中尾郷字白岳
2	烟ノ原南窯跡	村木郷字烟原	17	白岳窯跡	中尾郷字白岳
3	古皿屋窯跡	村木郷字小ヅヅエ	18	広川原窯跡	中尾郷字広川原
4	山似田窯跡	村木郷字山似田	19	大新窯跡	中尾郷字アカイ倉
5	百貫西窯跡	村木郷字百貫	20	咽口窯跡	三股郷字咽口
6	百貫東窯跡	村木郷字百貫	21	三股青磁窯跡	三股郷字三股
7	下神木場窯跡	神木場郷字堂ノ前	22	三股古窯跡	三股郷字三股
8	辺後ノ谷窯跡	皿山郷字辺後ノ谷	23	三股本登窯跡	三股郷字山ノ神
9	深川内窯跡	皿山郷字深川内	24	鳥居窯跡	三股郷字白木
10	高尾窯跡	皿山郷字高尾	25	三股上登窯跡	三股郷字白木
11	向平窯跡	皿山郷字向平	26	三股新登窯跡	三股郷字新益
12	皿山本登窯跡	皿山郷字塘ノ尾	27	永尾本登窯跡	永尾郷字永尾山
13	鳥越窯跡	湯半田郷字鳥越	28	永尾高顧窯跡	永尾郷字山ノ神
14	長田山窯跡	井石郷字長田山	29	木場山窯跡	永尾郷字木場山
15	中尾下登窯跡	中尾郷字下中尾	30	智恵治窯跡	永尾郷字中原

と考えられる上手物の染付を続いていることが判明するなどの成果がみられた。

平成3年度は、中尾上登窯跡（中尾郷）、中尾下登窯跡（中尾郷）、辺後ノ谷窯跡（皿山郷）の調査を平成3年10月14日～11月25日に行った。中尾上登窯跡と辺後ノ谷窯跡は計108.4m²の発掘と窯跡周辺の測量を、中尾下登窯跡は以前に部分的な発掘調査がなされていたために測量だけを実施した。調査の結果、中尾上登窯跡は江戸後半期において全長160m以上の長さをもち、現在調査されたなかでは世界最大級の規模であり、中尾下登窯跡も全長120mを有する巨大窯であることが確認された。辺後ノ谷窯跡は17世紀後半に10年ほど短期間に営まれ、かなりの高いレベルの製品が焼かれており、有田地域と密接な関係をもつ窯であることなどが明らかになってきた。また今回の調査によって、『郷村記』『大村記』『皿山日記』などの文献に書かれた創業年代や窯の規模などの記述について信頼性が高いことが明らかになったことも成果の一つとしてあげることができよう。

平成4年度は、永尾本登窯跡（永尾郷）、三股新登窯跡（三股郷）、百貫西窯跡（村木郷）の調査を平成4年9月7日～10月23日に実施した。永尾本登窯跡と百貫西窯跡は合わせて120m²の発掘と測量を、三股新登窯跡は測量と物原から資料サンプリングとして若干の製品の表面採集を行った。調査の結果、永尾本登窯跡の全長が155mほどの長さを有し、前回調査の中尾上登窯跡に次ぐ規模をもち、三股新登窯跡も全長100mほどの規模をもつ巨大窯であることが判明した。天保年間（1830～1844）に編纂された大村藩の記録である『郷村記』によれば、釜数（窯室数）が20軒を超える100m以上の規模をもつと思われる窯は8箇所あげられており、波佐見地方が江戸時代後期において日用磁器を日本各地に供給する一大生産センターであったことが明確になりつつある。

しかし、今回これまでに行った調査は、波佐見古窯全体からみるとまだほんの一端を垣間見たにすぎず、磁器創成期における窯跡の変遷の問題や畑ノ原窯跡の位置付けなど、残された課題については今後の調査に期待するところが多い。

なお、調査および整理にあたっては、佐賀県立九州陶磁文化館の大橋康二学芸課長より懇意なる指導と教示をいただいた。ここに記して心から感謝申し上げます。

（宮崎）

参考文献

- 1 「波佐見史上巻」 波佐見町役場・教育委員会 1976
- 2 「波佐見町勢要覧」 波佐見町役場商工企画課 1981
- 3 三上次男・佐々木達大・大橋康二 『波佐見町古窯跡分布調査報告書』 波佐見町文化財調査報告書第2集 波佐見町教育委員会 1982
- 4 佐々木達大『畠ノ原窯跡』 波佐見町文化財調査報告書第3集 1988

2. 山似田窯跡

(1) 調査概要

本窯跡は、町北西隅の村木郷に所在し、村木川が形成した狭い谷底平野をはさんで畠ノ原窯跡・畠ノ原南窯跡・古皿屋窯跡と対峙する南向きの低丘陵に立地している。現状は山林であるが、窯の上方は畠として拓かれていたようでは平坦になっている。

農道に切られた丘陵斜面上に2室以上の窯室が落ち込んだ状況がみられたため、窯尻を確認する目的で第1トレンチを、窯西側の側溝を確認するために第2トレンチを設定し、さらに物原の状態を調べるために第3・4トレンチを設定して計26m²の発掘を行った。第1トレンチでは、第1焼成室の西半部分を精査したところ、製品を取り上げた後に不良品や窯道具類が廃棄された状況がとらえられた。焼成室は、幅2.4m、奥行2.5mを測り、畠ノ原窯跡とほぼ同じ規模をもつ。窯室奥壁の北側は80cmほどが焼けて明黄化褐色土面が赤化していた。第2トレンチは、後世に搅乱を受けているよう側溝等の遺構は確認できなかった。第3・4トレンチでは、表土層の下に黄褐色土層が10cm~40cmの厚さ堆積し、窯で焼かれた製品や窯道具類が包含され窯の西側に物原が存在していたことが分かったが、新しい時期の染付磁器なども混入しており、後世に畠地として利用されていたことなどの要因が考えられる。

地形測量の結果とあわせると、窯はほぼ南北方向を向き22度ほどの勾配をもっていることが計測される。農道と水田との間の崖面には窯床面の焼土面が観察され、第1室から15mほどの長さを測る。奥行平均を2.5mとすると6室以上が存在していたことが算出されるが、基盤整備される以前には段々畠であり、窯壁片などが出ていたという土地所有者の話などを総合すると、窯体は丘陵から水田の方へ10数室以上の規模をもってのびていたことが推測される。

(2) 遺 物

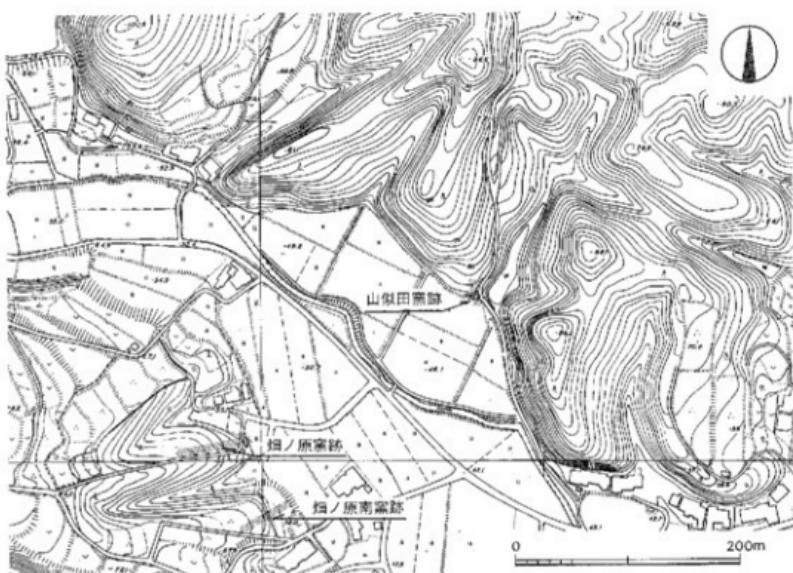
今回の調査では、3531点の遺物が出土している。その内訳は、陶磁器が3094点、窯道具436点、鉄製品1である。陶磁器は、陶器2922点、磁器116点であるが、磁器については窯で焼かれたと認定できる製品は27点ほどにすぎず、後世の混入品が多くみられた。

① 陶 器 (第7図)

窯で焼成されたと考える陶器は碗と皿があり2950点抽出されたが、すべて砂目積みの製品である。物原の第3・4トレンチで1/2以上残存する底部362点について調べた結果、碗219点(60.5%)、皿143点(39.5%)という成績がでている。

碗 (1~9)

器形は、丸形(1~3・7~9)と天目形に近い形状のもの(4~6)がある。施釉は、黒褐色の鉄釉をかける1を除くと他は灰釉をかけるが、高台付近は無釉である。底部は、竹節高台状をなすが、4や6・7のように底部がお厚いつくりものもみられる。1が第6室から出土



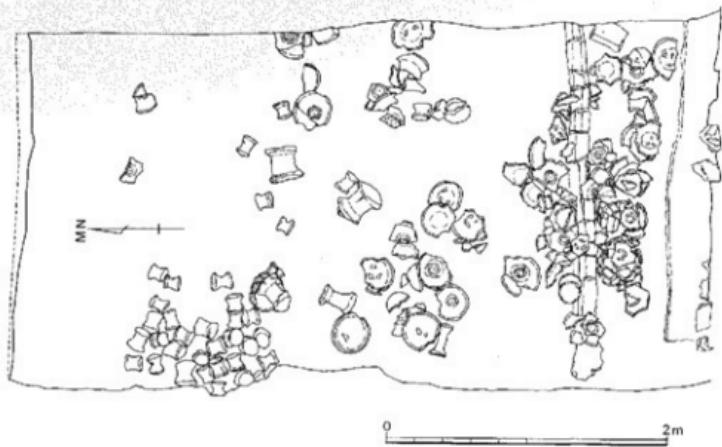
第2図 山似田窯跡周辺図 (1/5000)



第3図 山似田窯跡地形測量図 (1/400)



第4図 トレンチ実測図 (1/60)



第5図 第1室遺物出土状況

している他は第4トレンチ出土である。

皿 (10~20)

器形が明確なものは、折縁皿 (13) と溝縁皿 (14~20) があり、後者が主体を占める。溝縁皿は、ふ厚いつくりで溝が浅く内面の段が明瞭にはいるもの (14・15) と比較的薄いつくりで口縁端部の摘みあげが強く付き内面の段があまり明瞭でないもの (16~20) に細分される。19・20は最終焼成の第1室床面出土品であり、時期的な差異と考えられよう。底部は低い高台をなすが、内面だけ抉ったもの (11・12) や平底 (10) も図示した3点に限りみられた。釉はすべて灰釉で、内面には3~4箇所の砂目跡が付くものが多い。19・20が第1室床面上から出土した他は第3・4トレンチの物原出土品である。

② 磁器 (第8図)

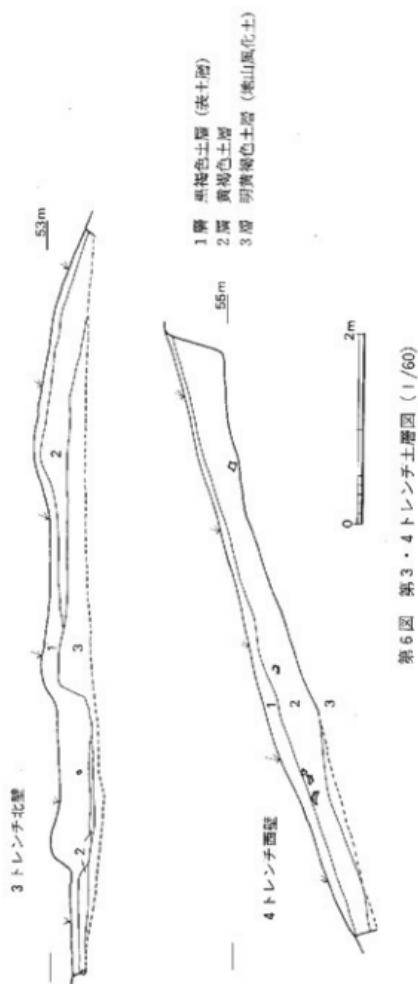
磁器として抽出したものは27点あり、その内訳は青磁6点、白磁10点、染付10点、半磁器1点で、陶器に比べて1%にも満たず非常に少ないので特徴として指摘できる。

半磁器 (21)

体部に鉄絵の匁線を2条施す小形の碗である。光沢をもつ透明釉がかかり、薄い灰褐色を呈する。第4トレンチ出土。

青磁 (22~24)

22は呉器形の碗で、体部は丸くたちあがり、高台はややふんばりをもつ。浅緑色のガラス質



いる。32が第4レンチ出土の他は、第3レンチから出土している。

③ 窯道具（第9・10）

窯道具類は436点出土しており、種類別にみるとトチン170点、ハマ39点、サヤ226点、チャシ1点に分けられる。しかしチャシについては後世の混入品と考えられる。

釉が高台畳付を除いて全体にかかる。第3・4レンチ出土の4点が接合して同一個体として認められたにすぎない。23は輪花の折縁皿で、花弁などを型押ししている。白っぽい緑色の不透明釉が、丸く削り出した高台畳付を除いて施釉されている。全体に歪みが著しい。第3レンチ出土。24は大形の皿あるいは鉢の体下半部である。青緑色のガラス質釉が高台畳付を除いて全体に厚くかかる。ねっとりした感の灰白色の生地である。表面採集品である。

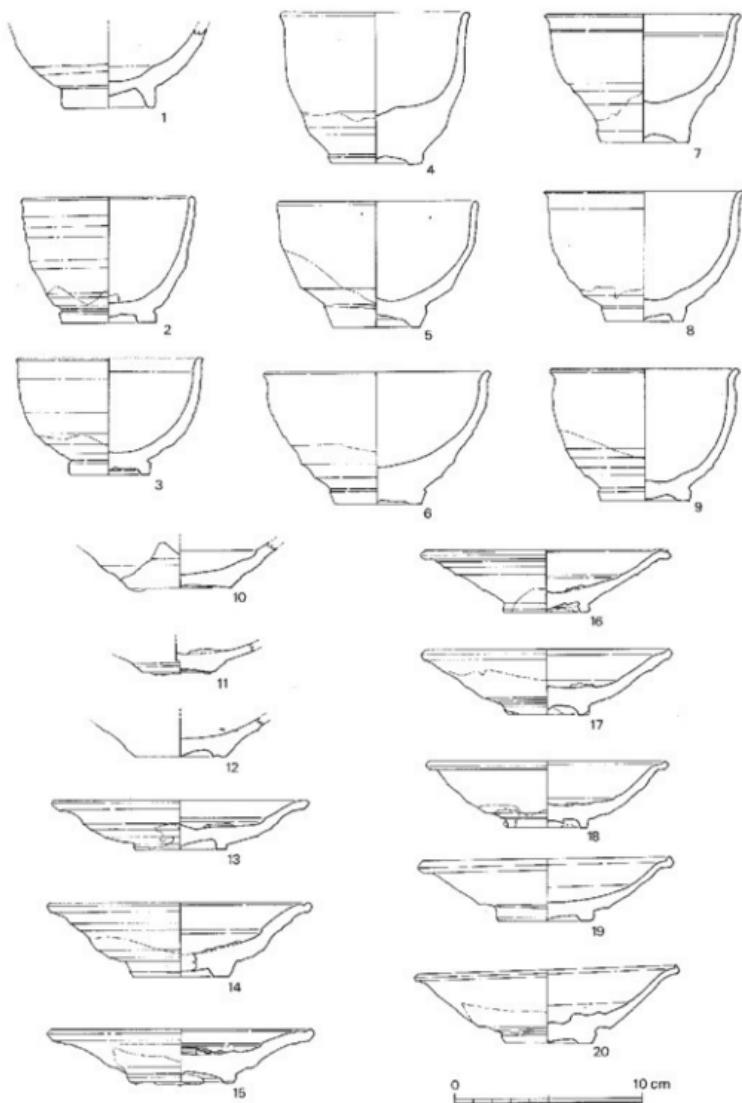
白磁（25～28）

25・26は碗の体下半部である。淡灰色のガラス質釉が高台畳付を除いてかかる。26は見込み中央を円く削っており、25もやや凹んでいる。25は第4レンチ、25は第3レンチ出土。27は折縁皿の口縁部である。小片であるため染付の可能性もある。不透明な白色釉がかかる。

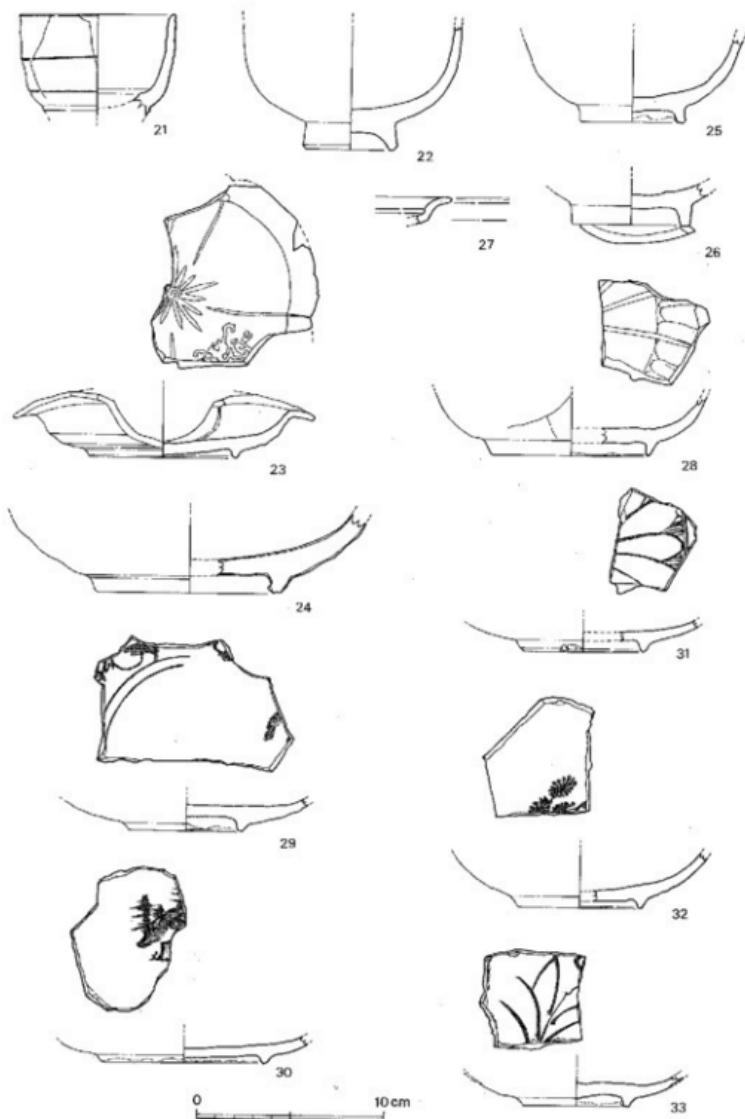
第4レンチ出土。28は型押しの丸形皿である。文様は扇であろう。小さく削り出した高台畳付を除いてアイボリー色に近い灰白色の釉がかかる。第3レンチ出土。

染付（29～33）

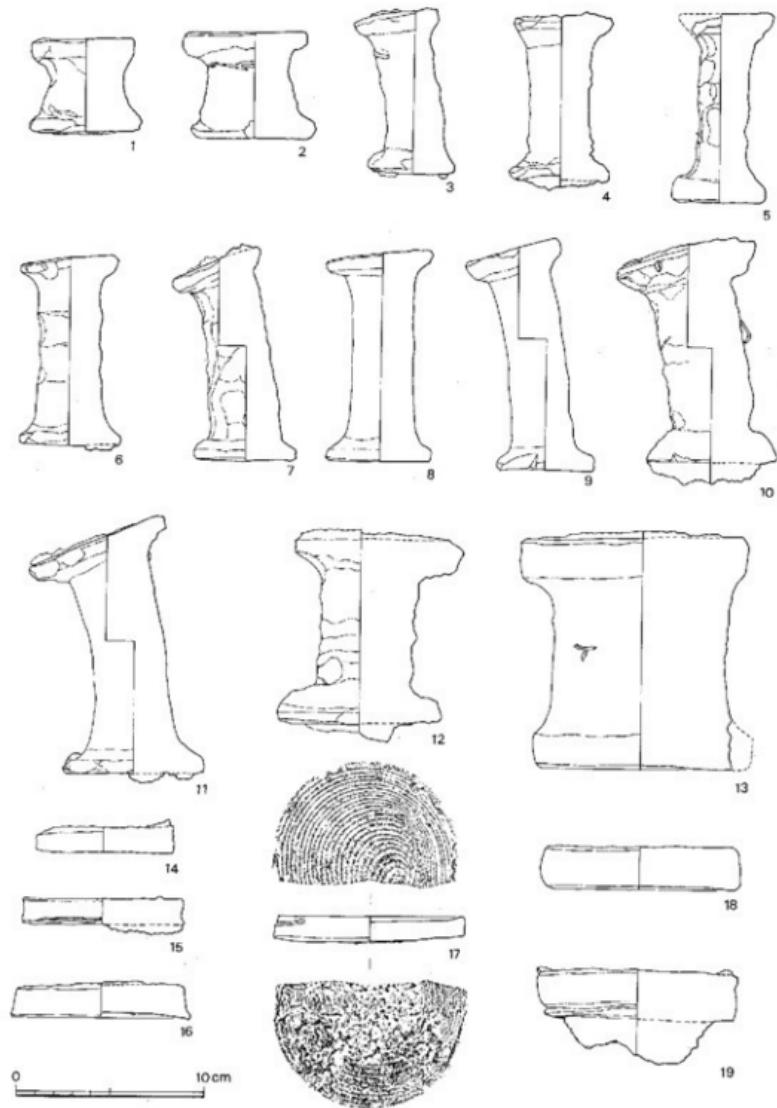
染付の丸形皿であるが、29は唐草文、30は山水文、31は菊文、32は松文、33は草花文を内面に描く。29と33は高台畳付を平坦に面取りし、他は丸く削りだして



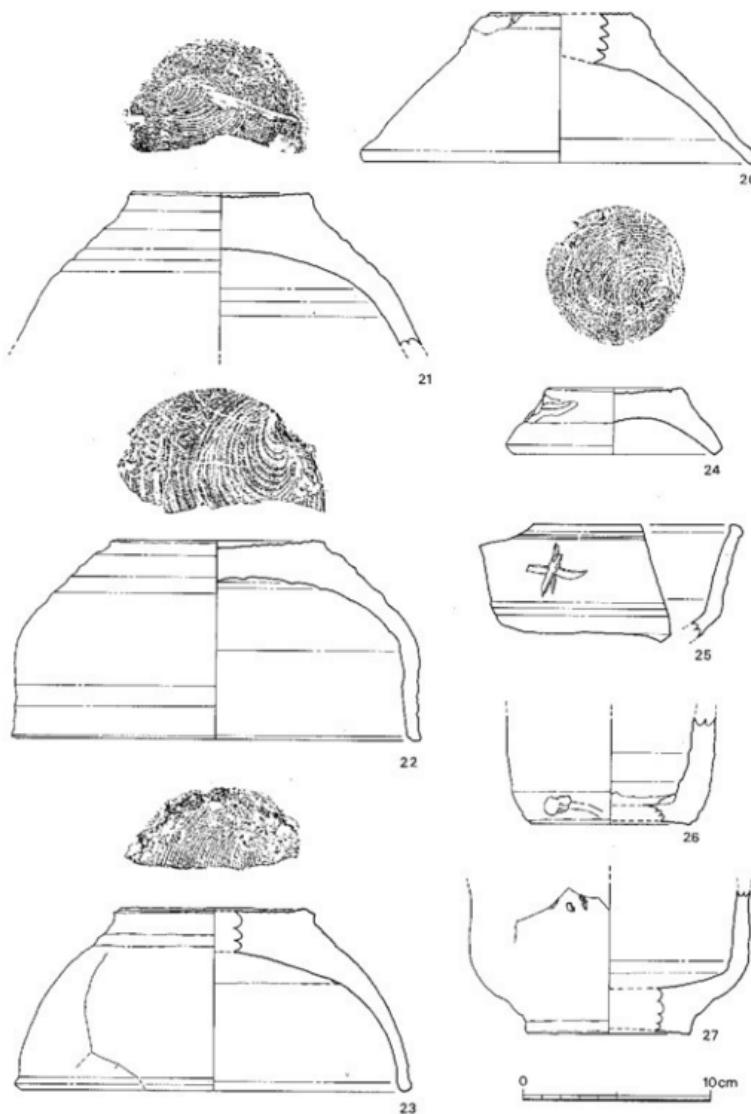
第7図 山似田窯跡出土陶磁器① (1/3)



第8図 山似田窯跡出土陶磁器② (1 / 3)



第9図 山似田跡出土石道具① (1/3)



第10図 山似田窯跡出土窯道具② (1/3)

トチン（1～13）

「I」字形のトチンで、すべて陶質である。大別すれば、高さに対して端部径・胴部径の小さいもの（3～11）と端部径および胴部径がわりに大きく寸詰りのもの（1・2・12・13）に分けられる。後者はさらに胴部が直線的なもの（30・31）と下方に広がるもの（1・2）に細分されるようである。整形は、胴部を平滑に仕上げるもの（4・8・9・11）もあるが手づくねの痕跡を残すものが多い。1・2・5・8は無釉だが、他は胴部に鉄釉が掛かる。1と13は第1室の床面から出土した資料で、13の胴部には「T」字形のヘラによると思われる傷がみられる。

ハマ（14～19）

陶質の円板形のハマである。14～17は、上面あるいは上下面に糸切り離し痕が付くもので、18・19は糸切り痕が付かず円板形に手づくね整形したしたものであろう。

サヤ（20～27）

20～24が蓋、25～27が身であり、すべて陶質である。蓋の天井部、身の底部は糸切り痕を残している。23は縁に三角形と考えられる切り込みが認められる。25は蓋の可能性もあるが、胴部に「十」字形のヘラによる刻みがみられる。27には、型押しによると思われる記号が観察される。青磁や白磁片が付着したものがあり、匣鉢として使用されたことが分かる。

④ 鉄製品（第11図）

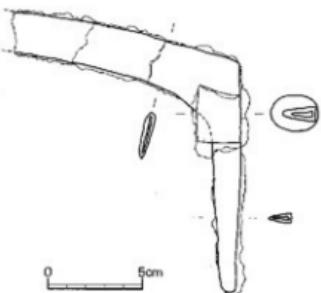
第4トレント第2層から出土した鉄鎌である。刃部は柄に対して鈍角に開く形状をなしている。茎部分には若干木質が残っている。

（3）まとめ

本窯跡は、最初の調査であったということもあり反省点が多い。第1焼成室を窯尻として判断していたが、調査後に懸念されたのは、後世に畑を拓くなどの搅乱によって第1室北側に存在した床面が削平されてしまっていたのではないかという疑問点である。第1トレントの内では、窯の遺構は第1室までしか確認されなかったが、今後機会があればその点に留意した調査をすべきと考える。

今回の調査の結果、本窯跡は焼成室の規模や出土遺物において畠ノ原窯跡の内容と非常に類似し、全体の規模はやや小形ながらもほぼ同一段階に営まれた窯であったことが判明した。本窯は、遺物の特徴から1600年～1630年代に位置付けられると考えられ、陶器から磁器への転換期に畠ノ原窯跡を形成した工人たちと同一系統の集団によって経営された可能性が強い窯と考えることができよう。

（宮崎）



第11図 山似田窯跡出土鉄製品

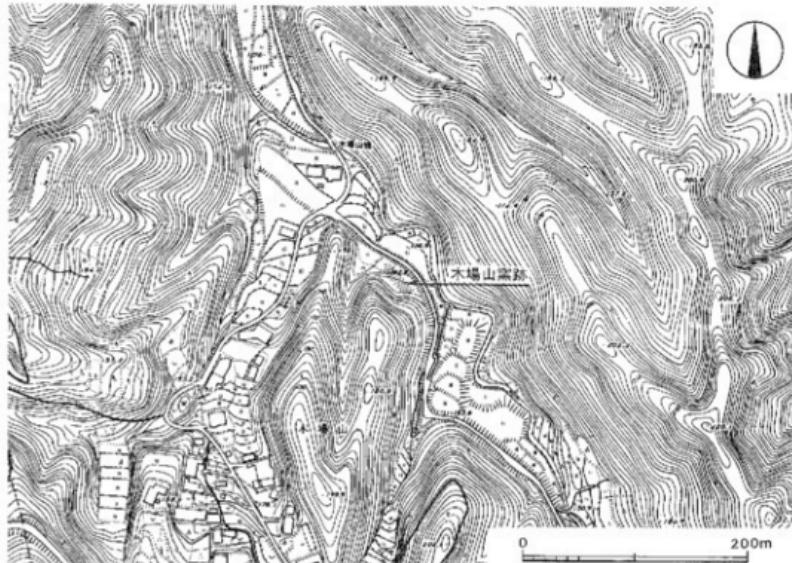
3. 木場山窯跡

(1) 調査概要

本窯跡は、木場山川が開折した狭い谷を永尾の集落から南東に900mほど遡り、木場山川に面した北向きの山麓斜面に立地する。もとは畠として開かれていたが、現状は荒地になっている。農道釜谷線の拡幅工事の際に大量の遺物が出土し、青磁を盛んに焼いた窯であることが知られていたが、窯の存在が予想される傾斜面に窯体の痕跡はまったく明らかでなかった。

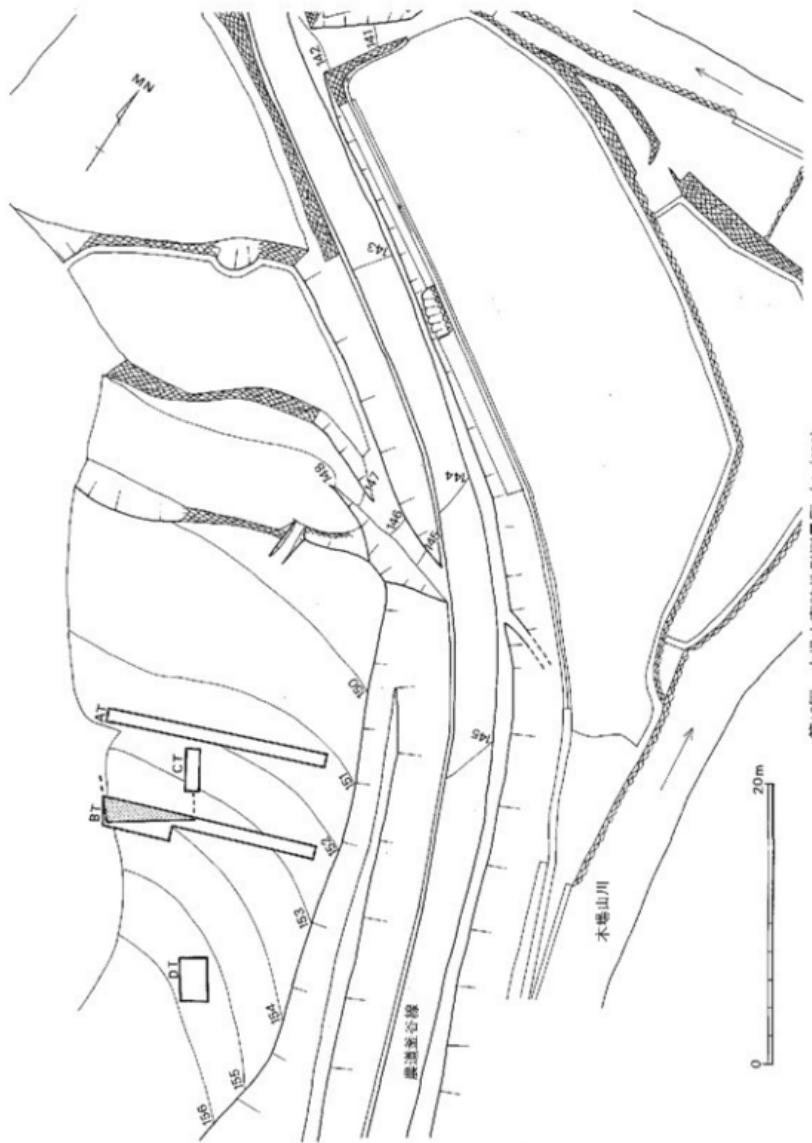
したがって、今回調査は窯体の確認が主眼であり、A・B・C・Dの4箇所のトレンチを設定し45m²を発掘し、Bトレンチにおいて焼成室を検出した。

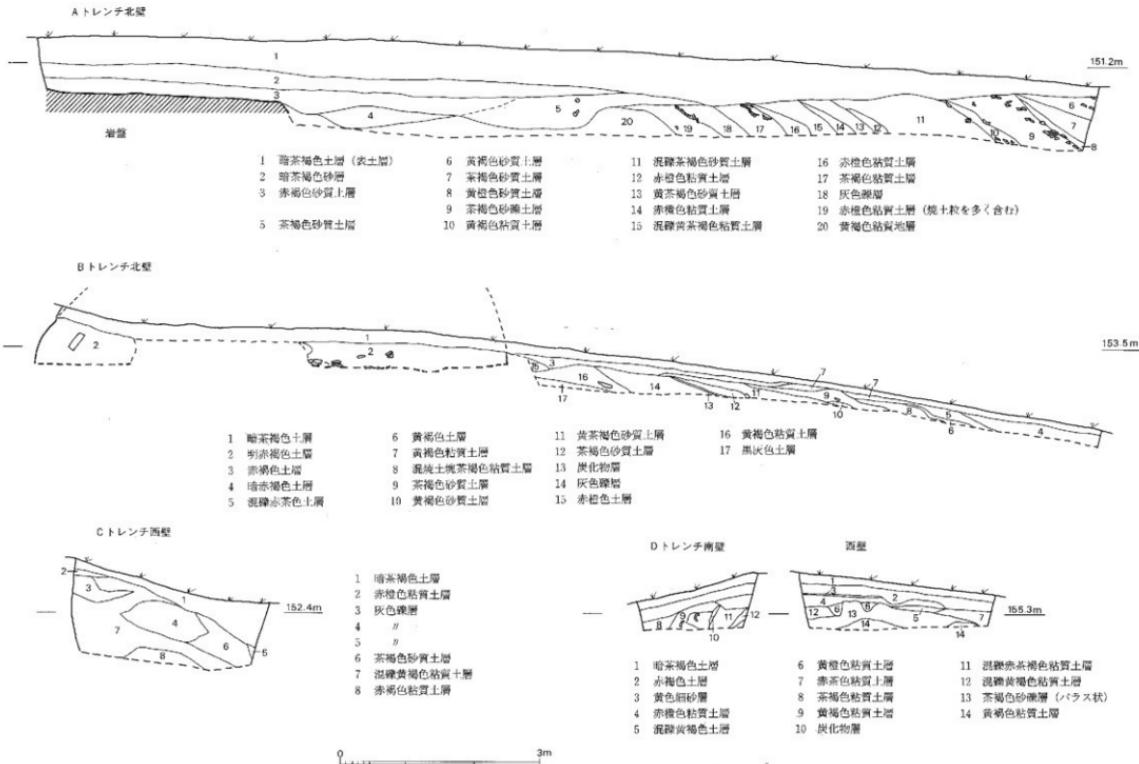
Aトレンチは北端に位置し、東西に長い調査壙を設定して1.3mほど掘り下げた。基本的上層は、後世の搅乱が及ぶI層（1～5層）、物原の堆積層であるII層（6～19層）、窯の整地層と考えられるIII層（20層）、岩盤のIV層に大別できる。岩盤は3.8mほどがトレンチ西端にかかり、直上まで搅乱を受けているが、上面が平坦でもとは焼成室の床面がのっていた可能性が強い。物原の土層は、20度から40度の傾斜で東側に落ち込んだ状況を示し、青磁や窯道具を主体とした遺物が出土した。Bトレンチは、Aトレンチと平行して東西に長く調査壙を設定し、西端に



第12図 木場山窯跡周辺図 (1/5000)

第13図 木場山麓地形測量図 (1/400)





第14図 木場山窓跡土層図 (1/60)

焼成室の奥壁部分を確認することができた。したがって、奥行きは不明だが、奥壁での幅は6.6mを測る。土層は、基本的に△トレンチと同じで、表土および複数層のⅠ層（1・3層）、物原堆積層のⅡ層（4～13層）、整地層のⅢ層（14～17層）に区分できる。Cトレンチは、南西端に床面の痕跡と推定される土層（2層）が一部かかり、その下は整地層と考えられた。Dトレンチは南端に位置する試掘場で、西壁に薄く焼成室の床面の痕跡と考えられる土層（3層）がかかり、4～7・9～14層は整地層、8層は物原の堆積層と思われる。

測量の結果も併せると、窯体は一部が確認されたに過ぎないが、幅6.6mの比較的大形の窯で、山際に沿って北西から南東方向（N-34°W）にのびていることが分かった。

（2）遺物

今回調査で出土した遺物は1660点あり、そのうち陶磁器が726点、窯道具が934点である。陶磁器の破片点数は、青磁425点、青磁染付7点、白磁28点、染付241点、陶器25点に分けられ、全体での割合は、青磁58.5%、青磁染付1%、白磁3.9%、染付33.2%、陶器3.4%である。このうち陶器は本窯で焼かれたものでなく、工人たちが使用していたものと考えられる。

以下、磁器と陶器に分けて説明を行いたい。

① 磁器（第15～23図）

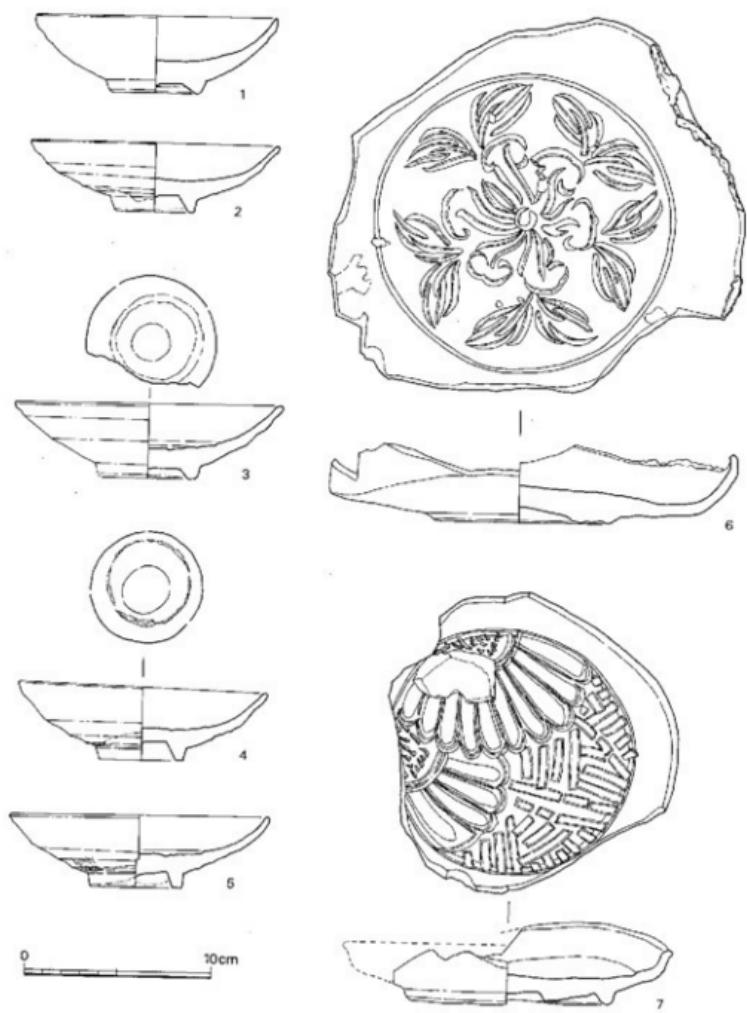
青磁（1～22）

青磁のうちで、7割以上を占め中心をなすのは皿・鉢の比較的大形の製品で、次に小形皿が84点（19.8%）が続き、少量の香炉・瓶・小壺が伴うが、他の窯でよくみられる碗は出土しておらず特異な事象として注目される。

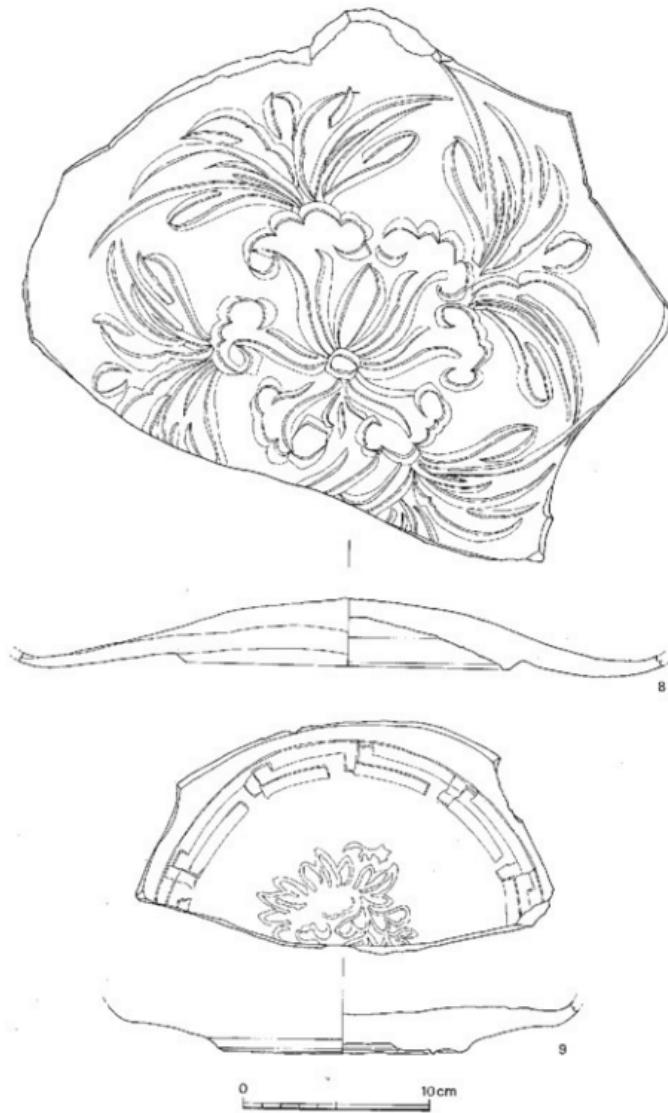
1～5は、小形の丸形皿である。見込みの釉を蛇ノ目状に剥ぐもの（3～5）と剥がないものの（1・2）があるが、後者は数少ない。前者は、形態的に部体が直線的に開き平形に近いもの（3）と内湾ぎみに丸いもの（4・5）に細分できる。釉は、高台から体下部に掛からないものが多いが、1と2は高台疊付を除いて釉が掛かり古い様相をもつ。

6～12、18・19は、陰刻文を施す中形・大形の皿である。6・7は、体中位で屈曲し直立ぎみにのびる盤形の皿である。6は牡丹文を、7は菊文を見込みにヘラ彫りし、高台内の釉を蛇ノ目状に剥いでいる。8は、見込みに牡丹文をヘラ彫りするかなり大形の皿である。9・10は鉢縁形の皿である。見込みに算木文をヘラ彫りし、9は中央に花文を壓押ししている。9の高台は蛇ノ目に釉が剥がれ、半分ほどに鉄錆が塗られている。11・12は体中位で屈曲する平形の皿であるが、細部の形状に差異がみられる。11は見込みを蛇ノ目に釉を剥ぎ、高台は輪状で疊付は無釉である。12は高台内を蛇ノ目状に釉剥ぎしている。11は葉文、12は花文をヘラ彫りしている。18・19は三足をもつ皿で、18は口縁が小さく外反し、19は折縁形をなす。高台は輪状で疊付は無釉である。19は、見込みに花文をヘラ彫りしている。

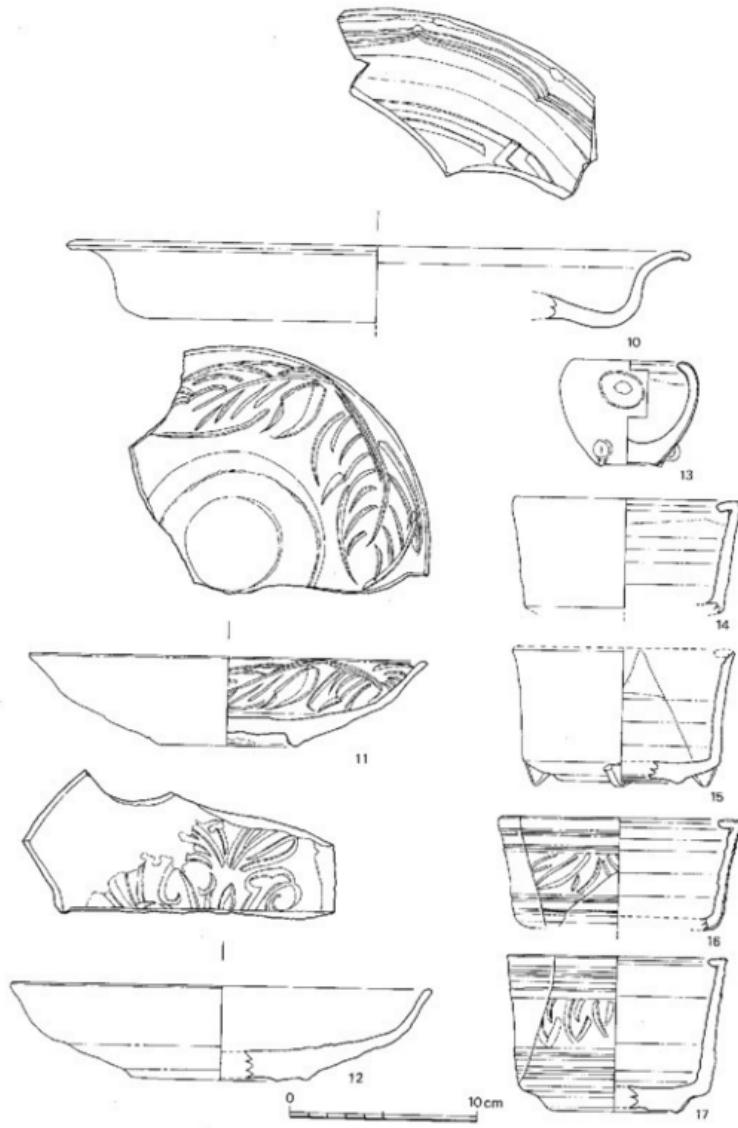
20～22は鉢で、20・21は碗状の丸形、22は折縁形をなし、高台内を蛇ノ目状に釉を剥ぐ。20・



第15図 木場山窯跡出土陶磁器① (1/3)



第16図 木場山窯跡出土陶器② (1/3)



第17図 木場山窯跡出土陶磁器③ (1/3)



第18図 木場山窯跡出土陶磁器④ (1/3)

21は草花文を、22は放射状に直線的な文様と見込みなどに曲線的な文様をヘラ彫りしている。

13~17は、香炉である。13は、三足の内湾形をなす。14~17は半筒形で、14・15が三足で、16・17は足が付かず体部に蓮弁状の文様をヘラ彫りしている。また15・17は、高台内を蛇ノ目状に釉を剥ぐ。

以上の青磁は、形態的特徴から時期別にいくつかのグループに分けることができる。高台疊付が無釉の小皿（1・3）、輪状高台の中皿（11・18・19）、内湾形香炉（13）は17世紀後半代に位置付けられる。体下半部無釉の丸形の小皿（2・4・5）は、17世紀後半～18世紀前半代、蛇ノ目釉剥ぎ高台の中・大皿（6～10・12）、鉢（20～22）、半筒形の香炉（14～17）は18世紀前半代に位置付けられよう。

白磁（34・35）

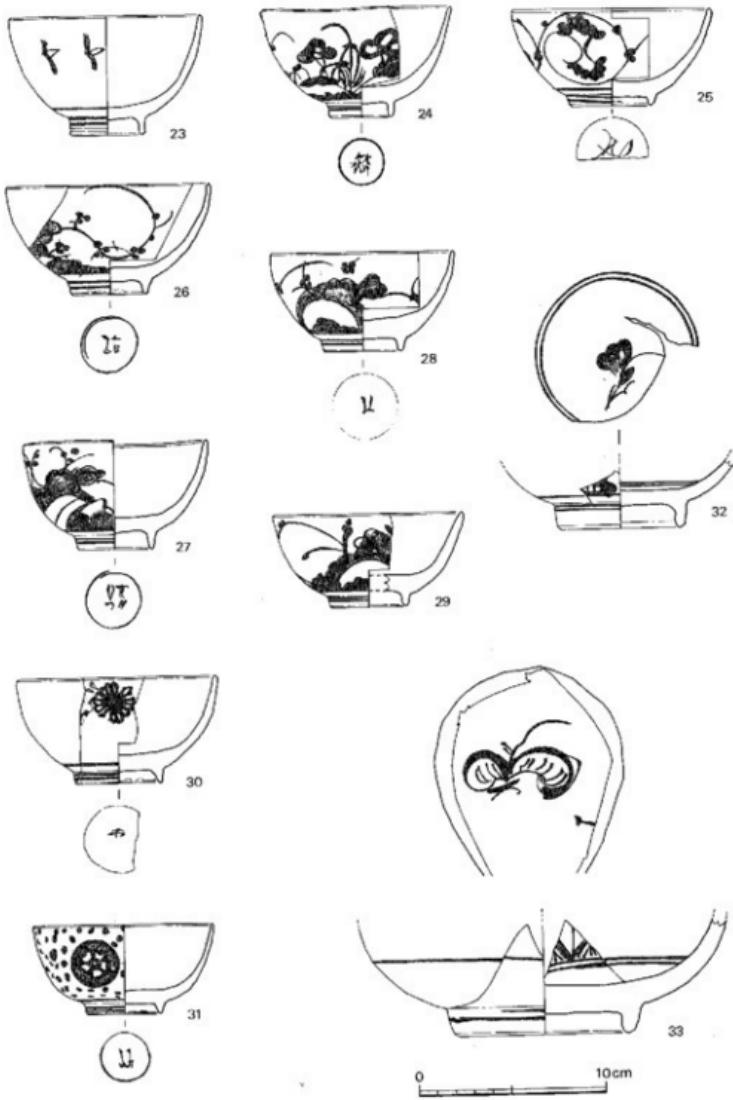
白磁は、碗12点、皿5点、計28点あるが、小皿と紅皿を図示した。34は、見込みを蛇ノ目釉剥ぎする丸形の小皿である。高台疊付から高台内には釉が剥がらない。35は、菊花形を型押した紅皿である。18世紀前半代の資料であろう。

染付（23～33、36～51）

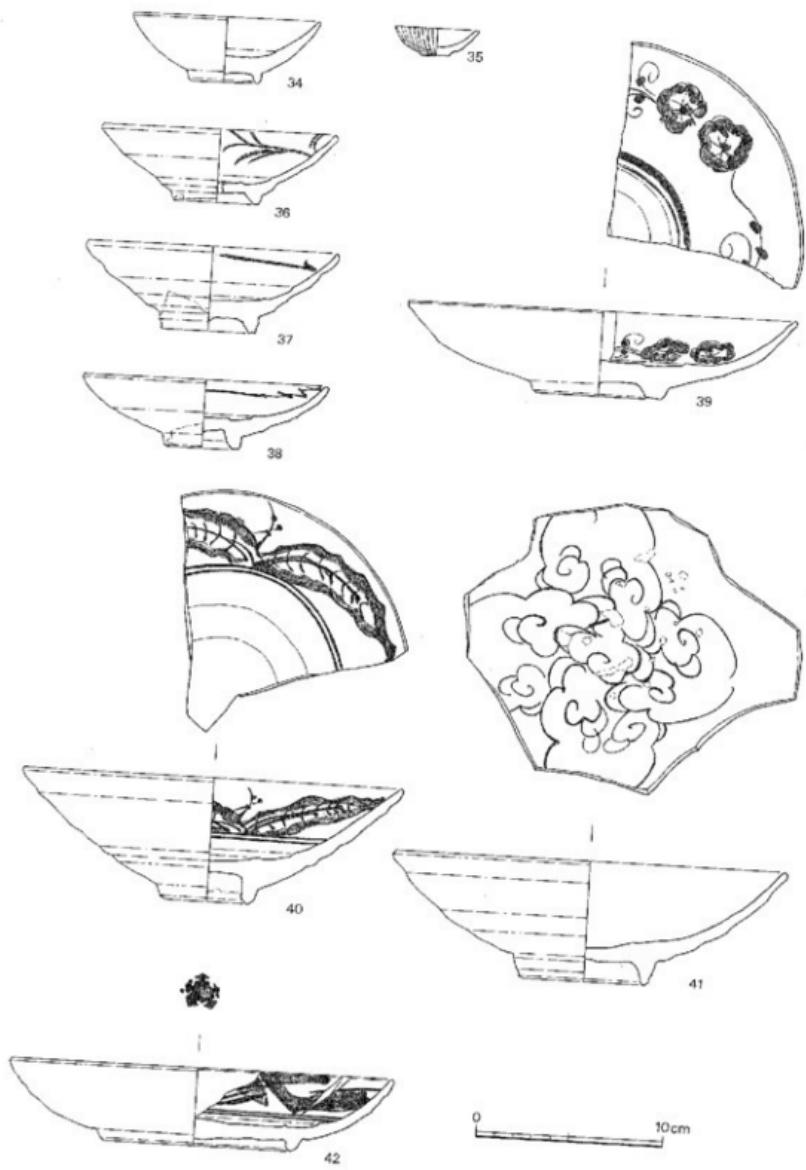
染付は、碗121点、皿101点、鉢3点、瓶15点、火入1点の計241点であり、そのうち27点を図示した。23～31は、丸形の中碗である。22は、薄手つくりで鳥を描く。他に比べ口径に対して器高がやや高い。24は草花文、25は連続唐草文、26～29は梅樹文を描いている。30・31はコンニャク判を施すもので、30は菊を、31は丸に花弁文とさらに点描を描いている。32は大碗で、



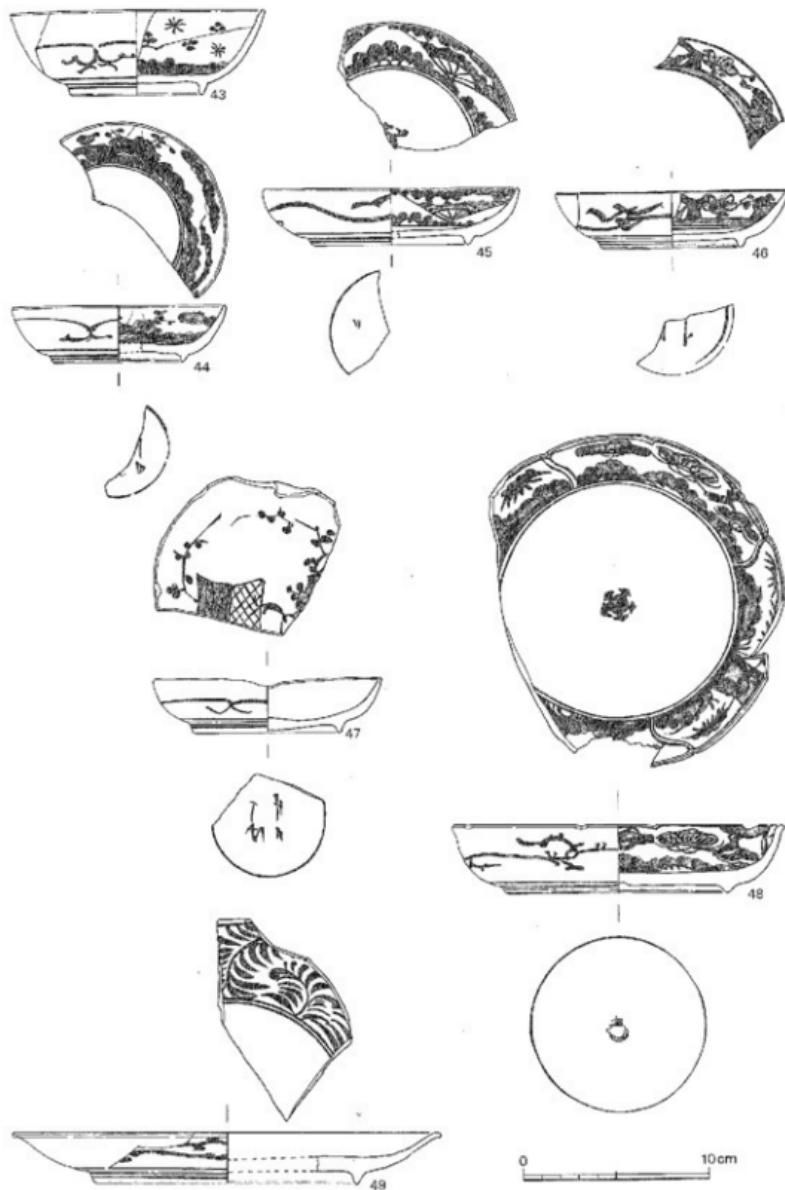
第19図 木場山窯跡出土陶磁器⑤（1/3）



第20図 木場山窯跡出土陶磁器⑥ (1 / 3)



第21図 木場山窯跡出土陶磁器⑦ (1/3)



第22図 木場山窯跡出土陶磁器⑧ (1/3)

見込みに折枝文を描いている。大碗には、小片であるため図示しなかつたが、雲龍見込み荒磯文碗が21点みられた。23と32は17世紀後半代、他は18世紀前半代に位置付けられよう。

33は碗形の鉢で、見込みに折枝文を描く。17世紀後半代の製品であろう。50は内湾形の小鉢である。細かい筆致で洞部に松樹文などを描く。18世紀前半代の資料であろう。

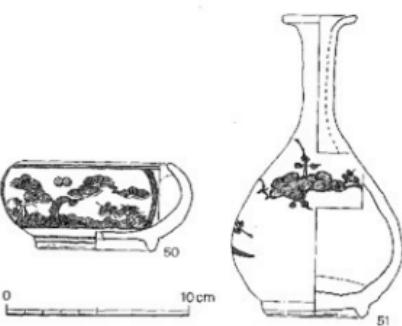
36～38は丸形で見込みを蛇ノ目刷ぎとする小皿であるが、36・37は体部が直線にのび、38は内湾ぎみにのびる。前者は17世紀後半代、後者は18世紀前半代の製品であろう。草や松葉に似た文様を粗放に描いている。39～42は丸形の中皿で、39・40・42は見込みを蛇ノ目刷ぎしており、高台疊付は削られ無釉である。39は花弁と唐草を描き、蛇ノ目刷ぎ部分に鉄錆を塗っている。40は芭蕉葉を、41は花弁を線文様で、42は菖蒲と思われる文様を太い筆致で描き、さらに、42は見込み中央に五弁花をコンニャク判で施文している。形態的には、40と41は体部が直線的に開き、39・42に比べて器高が高い。39と42は浅い身の形状であるが、42は底部径が広く新しい様相をもち18世紀前半代に位置付けられる。他は17世紀後半代の資料であろう。

43～49は、前述したものに比べて唐草の裏文様をもつ上手の皿である。43～47は丸形の小皿で、43は身が深い皿の形状をもち、他は底径が広く身の浅い器形で、46は口唇に鉄錆を塗る。43・44・46は内側面に梅樹文を、45は扇文を描く。47は垣根に梅樹文を描いている。43は高台内に圓線を、他は高台圓線内に底裏鉢を施す。形態的にみると、43は古い様相をもち17世紀後半代に、他は18世紀前半代に位置付けられよう。48と49は端反形の中皿である。48はやや身が深い形状で輪花状をなし、内面側面に松や竹など、見込み中央にコンニャク判五弁花を施す。49は浅い皿で、内面側面に菖蒲状の草葉文を施している。18世紀前半代の製品であろう。この他に、図示していないが染付白抜き文を施す小皿が2点ある。18世紀前半代の資料であろう。

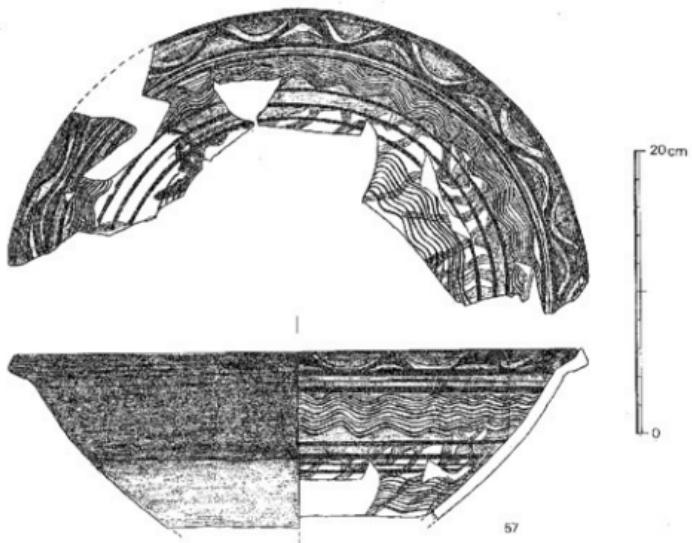
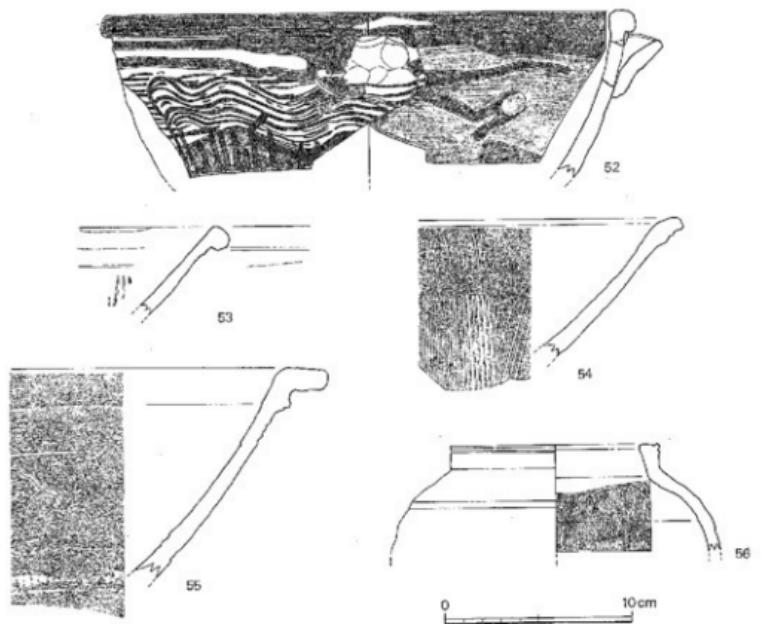
51は細頸の瓶である。口縁は鋸形で、下脇の玉ねぎ形の胴部をもつ。高台疊付を除いて光沢をもつ灰白色釉が掛かる。胴部には梅樹文を描く。18世紀前半代に位置付けられよう。

② 陶器（第24図）

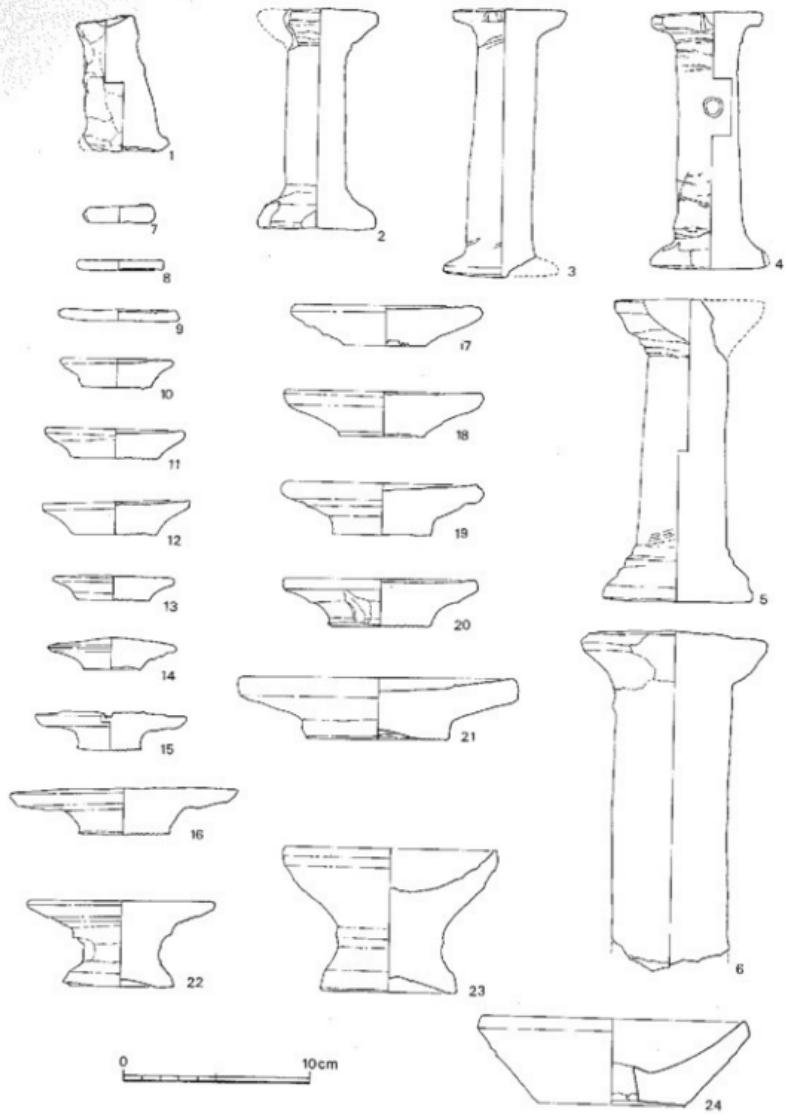
52～57は唐津系の陶器である。52と57は二彩唐津の櫛刷毛目文鉢で、52は片口が付き、57は大形の捏鉢である。53・54は擂鉢である。53は玉縁口縁をなし、体上部だけに鉄錆が掛かる。54は短く外反する口縁下に突帯が付き、密に筋目がはいる。55は逆「L」字形口縁の捏鉢であ



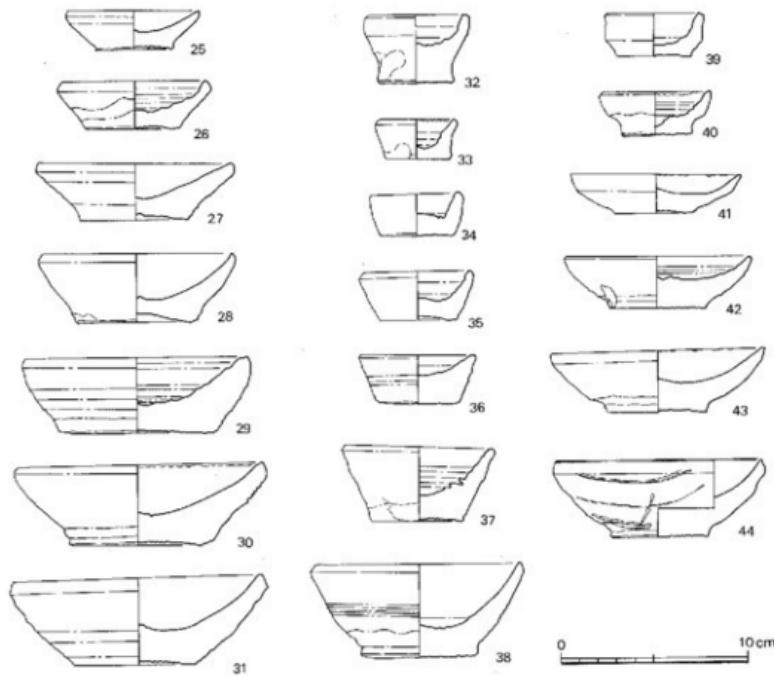
第23図 木場山窯跡出土陶磁器⑤（1/3）



第24図 木場山遺跡出土陶磁器⑩ (1/3)



第25図 木場山窯跡出土土器① (1/3)



第26図 木場山窯跡出土窯道具② (1/3)

る。56は直口壺で、体内面に黒褐色釉が掛かり、口内面から外面にはアメ釉が掛かる。これらの陶器類は本窯で焼成されたものではなく、工人たちが使用したもので、53が17世紀後半、52・55・57は17世紀後半から18世紀前半代、54・56は18世紀に位置付けることができる。

③ 窯道具 (第25・26)

2~6は「I」字形のトチンである。すべて陶質で胴部に赤褐色系の釉が掛かる。4の胴部には円形の押圧文がみられる。7~21はハマで、18・19・21が陶質の他は磁質である。形態的には、円板形ハマ(7~9)と逆台形ハマ(10~21)に分けられ、後者が主体を占める。逆台形ハマは底部を糸切り離しするものがほとんどであるが、21はさらにヘラで抉っている。1・22・23は磁質のシノである。1は手づくねづくりでトチンに形態的に類似し、22・23はトチンと逆台形ハマの中間的な形態をもつ。図示した以外に数点しか出土していない。24~44はチャツである。28~30・35・38・39・42・44が陶質で、他は磁質である。形態的には、底部が広く体部

が直線的に開くもの（25～31）、体部が内湾ぎみにのびる皿形のもの（41～44）、口径に対して身の深いもの（32～38）、体中位で屈曲し段が付くもの（39・40）などに細分される。底部は糸切り離しするものが多いが、27・33・36は糸切り痕をナデ消し、28は削っている。24は底部に径2.8 cmの穿孔がみられる。44は体部に鋭いヘラによる傷がはいる。なお、サヤについては確認されていない。

（3）まとめ

本窯跡については、二つの古文書による記録がある。正徳6年（1716）ごろの状況を伝える『皿山旧記』^(註1)には、寛文6年（1667）に東島（本島）久兵衛によって開窯されたと記されている。また元禄4～5年（1692～1693）ごろには編纂されていたといわれる『大村記』^(註2)には、蓋数（窯室）が5軒あって一ヶ年に9回焼き、年間の生産量は2740俵であったなどの記述がみられる。

出土製品の内容は、青磁を主体とし染付も併せて焼成しているが、青磁は中・大形の皿や鉢が中心で、他の窯では一般的な碗が無いのが注目される。製品の年代は17世紀後半～18世紀前半代に包括され、窯の創始については、染付雲龍見込み荒磯文碗の存在や青磁製品の内容から文献による1667年創業の年代については信頼性が高いことが推察される。廃窯の時期については、一説には長与窯への職人の移動がいわれているが、『皿山旧記』によると1716年ごろまでは存続していたことが考えられ、大橋康二氏によれば18世紀の第1四半期頃であろうとの教示を得た。

窯体の規模については、調査ではBトレーンで焼成室の幅が6.6mであることの他にデータがないが、大橋康二氏の窯構造の変遷によれば第5グループに属し、焼成室の幅と奥行との関係はほぼ1:0.7になっているところから、本窯の焼成室奥行は4.62mとなり、窑室の5軒をかけると23.1mという全長がでてくるが、あくまで推測の域を出ず今後の調査に期待したい。また、物原は窯体と農道並谷線にはさまれた長さ50mほどにわたって広がることが予想されるが、今後の残された課題として物原の土層を厳密に分けて遺物の変遷を検証する層位論的な調査を実施する必要があると思われる。

（宮崎）

註1 太田新三郎「波佐見地方陶祖の探求」 波佐見町教育委員会 1962 所収

2 『大村記』 波佐見町教育委員会 1986

3 大橋康二 「肥前古窯の変遷」『九州陶磁文化館研究紀要第1号』 九州陶磁文化館 1986

4. 咽口窯跡

(1) 調査概要

三股川が開削した狭い谷には谷間に沿って三股の集落が形成されている。付近一帯は陶石産地の中心地であり、豊富な原石を基盤として本格的な磁器焼成を開始したと思われる三股古窯跡・三股青磁窯跡の初期段階の窯をはじめ、江戸後期の三股上登窯跡・三股本登窯跡・三股新登窯跡の巨大窯跡など7箇所の古窯跡群が存在する。また三股の入口付近には大村藩の皿山役所が寛文5年(1665)ごろには設けられ代官(押役)が指導監督にあたっているが、永尾から当地区付近が波佐見窯業の要としての認識があったためであろう。

咽口窯跡は、永尾分校前の分岐点から700mほどはいった三股集落の入口の西側山麓に立地する。現在の窯場の裏山にあたり、現状は山林と畑である。北西から南東方向の小さな谷に4室の窯体の窯壁が残り、南側は近代の窯である咽口新窯跡の窯檻が残っている。調査は、第1～4室の規模をおさえるために清掃を行い、また窯が東にのびているのを確認するためにイ、トレントンチ設定し、窯の南側は山裾でたちあがっているため北側の狭い平地に存在が予想される物原の状況を確認するためにロ、トレントンチを設定し、10m²を発掘した。

イ、トレントンチでは、ほぼ中央に窯壁がかかり、焼成室の数が6室はあったことが明確になったが、それ以上何室あるのかは確認できなかった。物原にあたったロ、トレントンチでは、陶磁器3096点と窯道具421点の計3517点の遺物が出土した。2層からは陶磁器2630点、窯道具367点の計2937点の大量の遺物が出土し、3層(3点)と4層(13点)からはわずかの製品が出土したにすぎない。しかし、3層と4層の製品には染付牡丹文鉢や青磁蛇ノ目刺ぎ小皿などがみられ、2層の製品とほぼ同じ内容をもつことが考えられる。

調査の結果、窯体は北西から南東方向(N-52°W)にのび、6室が確認されて水平全長24mほどを測るが、さらに西側にある咽口新窯の下部へのびていることが推測される。焼成室の規模は、奥壁平均幅3.79m、奥行4.08mである。窯の勾配は、第1～4室の地表の等高線をたどると15°ほどの傾きをもつ。

(2) 遺物

今回の調査では、物原部分のロ、トレントンチを中心としてコンテナ15箱分の遺物が出土した。ここでは出土遺物のほとんどを占め、本窯の典型的な内容を示すと思われるロ、トレントンチの遺物をとりあげて説明を行いたい。ロ、トレントンチでは、陶磁器3096点、窯道具421点の計3517点が出土している。以下、陶磁器からみていく。

① 陶磁器(第30～38図)

陶磁器は、出土破片点数を調べた結果、染付2276点(73.5%)、青磁712点(23.0%)、白磁108点(3.5%)に分けられ、染付を主要製品として焼成していた窯であることが分かる。



第27図 三股周辺の古窯跡 (1/5000)

青磁（1～10）

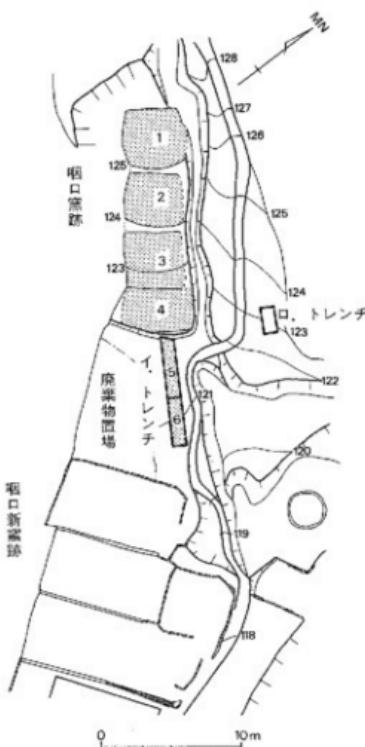
青磁は712点出土しており、その内2点は青磁染付である。青磁染付を除いた710点を器種別にみると、小皿664点（93.5%）、碗19点（2.7%）、鉢等27点（3.8%）に分けられ。青磁では見込みを蛇ノ目剥ぎする小皿が主体的に焼かれていたことが分かる。

1は、比較的薄手つくりの丸形碗である。体下端から高台にかけては露胎で、他には淡青緑色のガラス質釉が掛かる。2層出土。

2～7は、見込みを蛇ノ目剥ぎする小皿である。体下端から高台を除いて淡い青磁釉が掛かる。2は、口縁が小さく外反する端反皿で数少ない資料である。2層出土。3～7は丸皿である。6は1層、3～5は2層、7は4層出土である。

10は折縁の中皿で、見込みに花弁状の文様を描く青磁染付である。蛇ノ目高台の脛付は釉を削られ無釉。表面採集品。他2点の青磁染付も中皿あるいは鉢のようである。

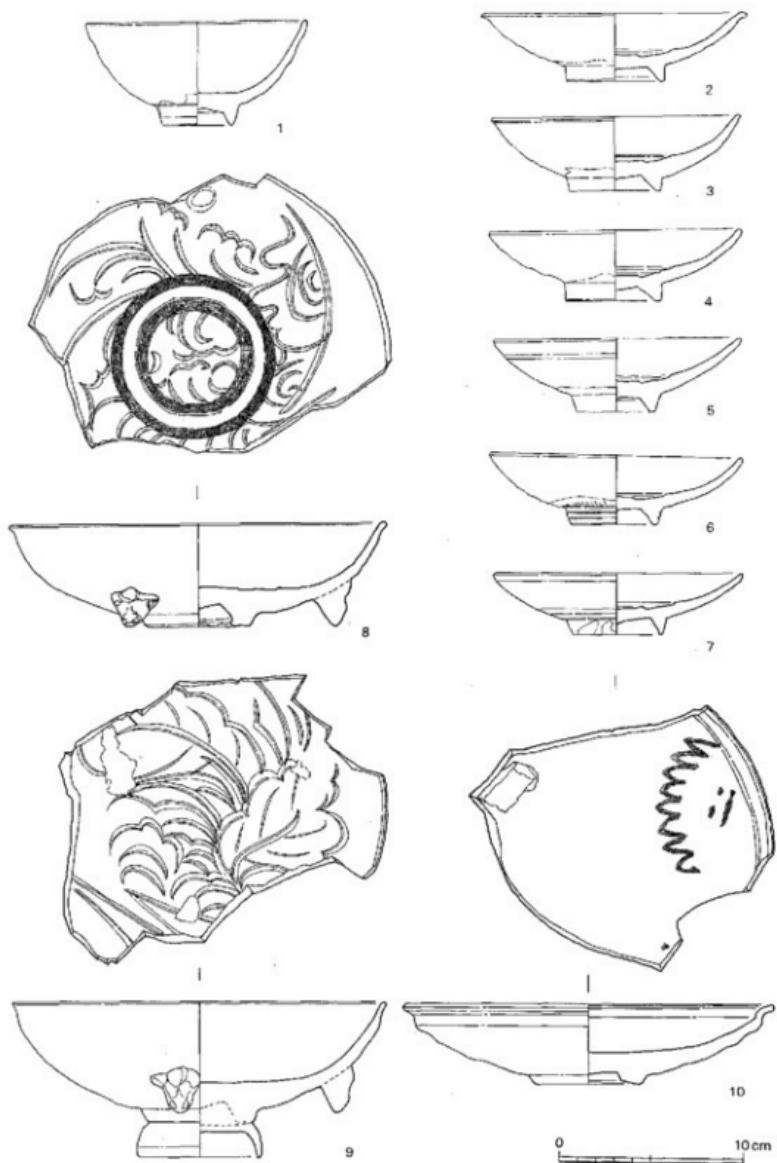
8・9は三足の中鉢である。内面にはヘラによる片切り彫りで、8は曲線的な文様を、9は葉文を描いている。8は見込みを蛇ノ目状に剥ぎ、鉄錆を二重に塗り、蛇ノ目高台の脛付部分



第28図 窯口窯跡地形測量図（1/400）



第29図 口, トレンチ上層図（1/40）

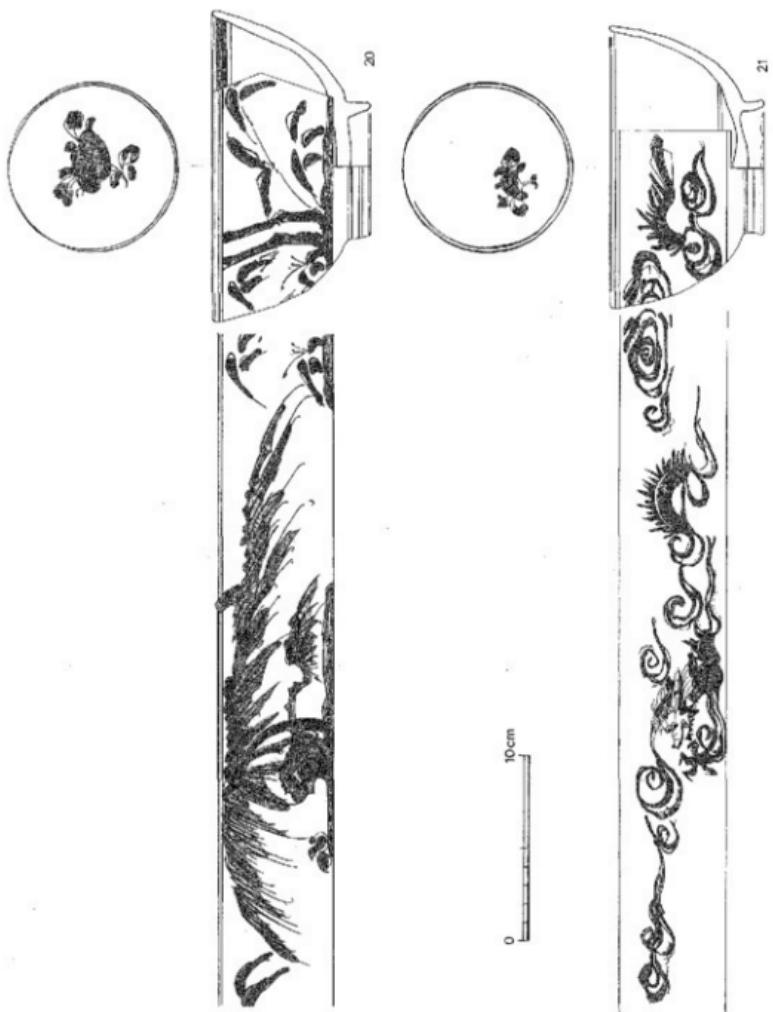


第30図 咽口窯跡出土陶磁器① (1/3)

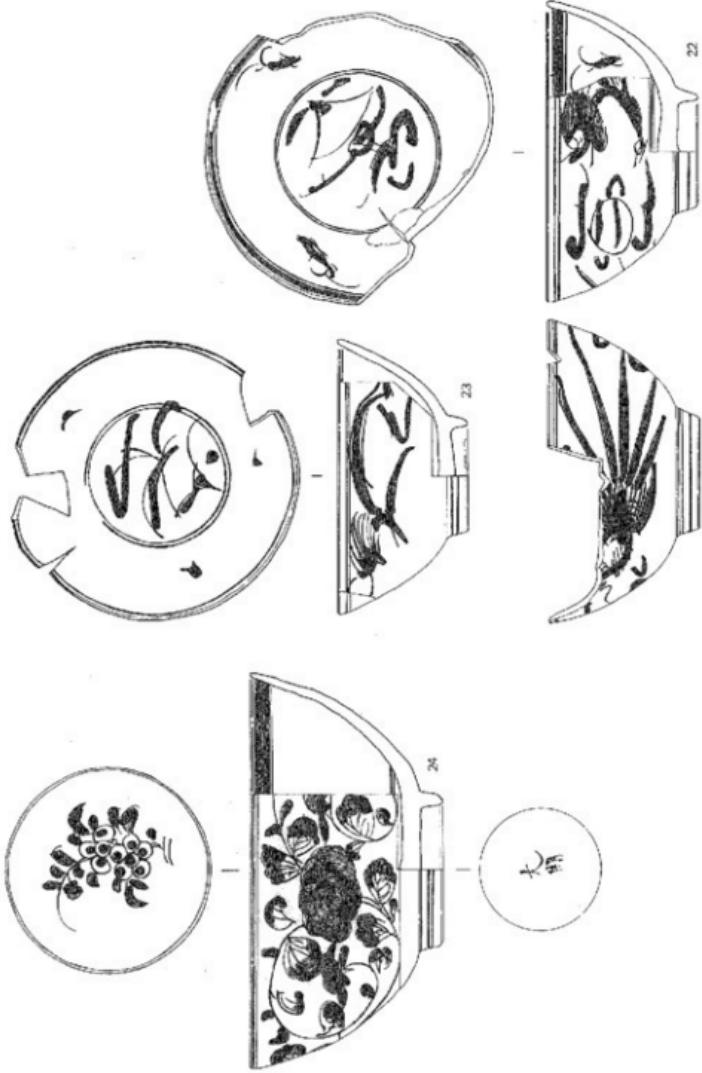


第31図 噴口窯跡出土陶磁器② (1/3)

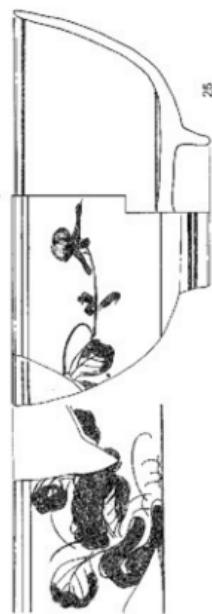
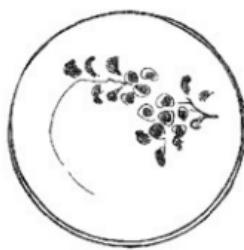
第32図 吸口黑釉出土脚磁器③（1/3）



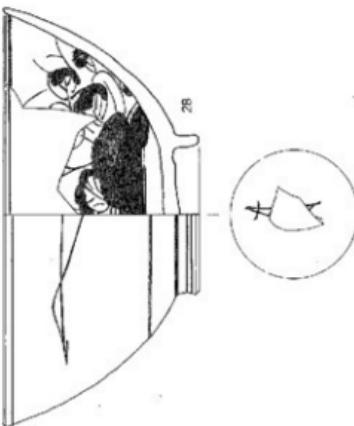
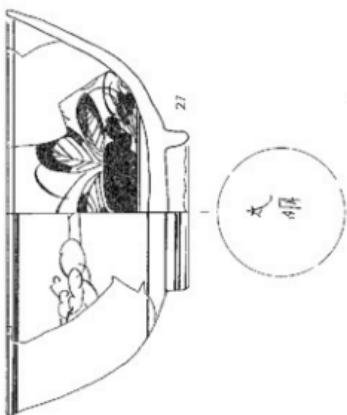
第33圖 吻口黑胎出土陶磁器④ (1 / 3)

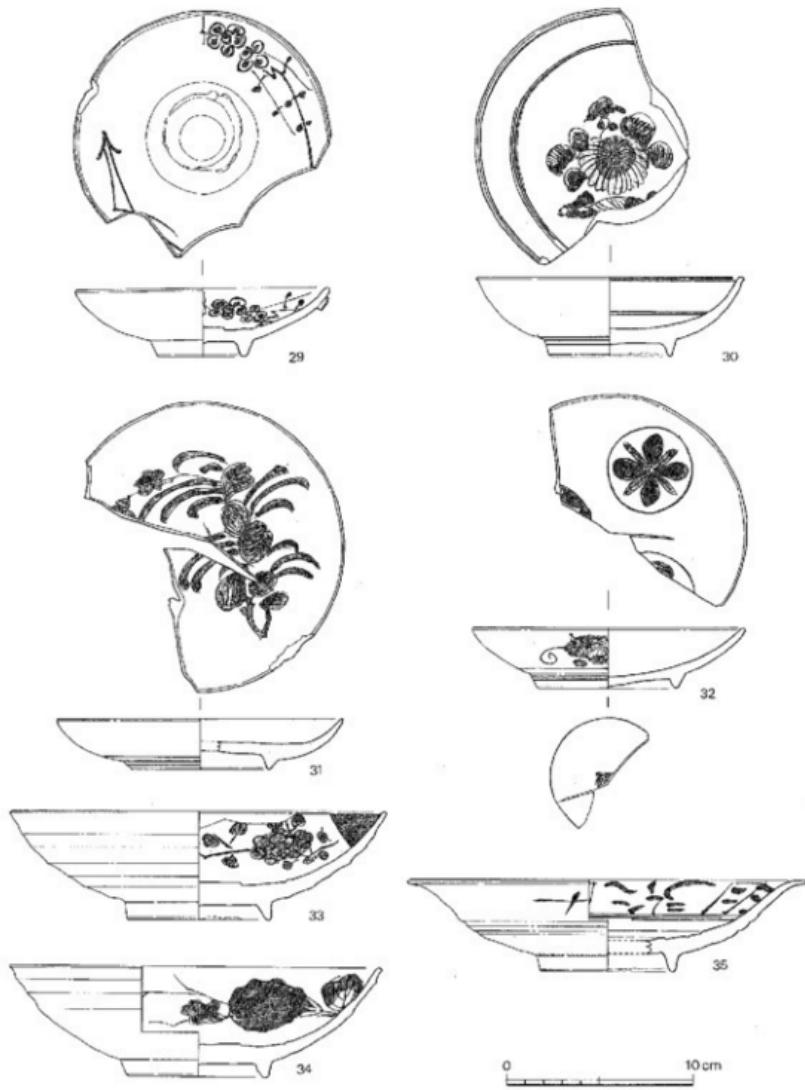


第34图 脊口尊群出土陶磁器⑤ (1/3)

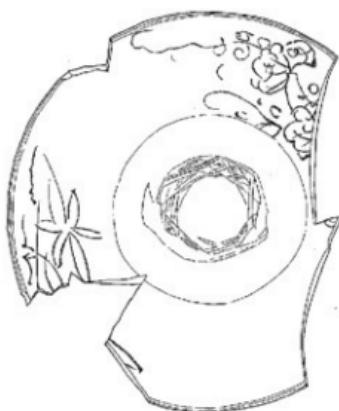
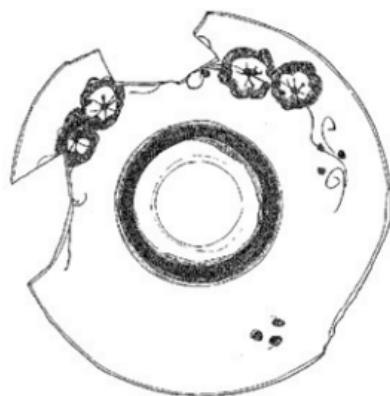
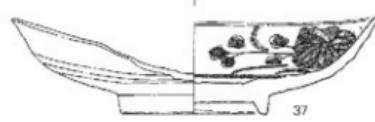
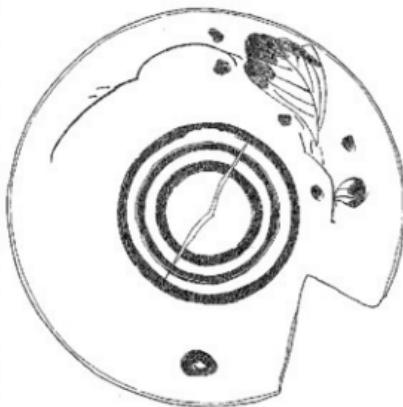


第35圖 烟口系附出土勾鑿器⑤ (1/3)





第36図 咽口窑跡出土陶磁器⑦ (1 / 3)



0 10 cm

第37図 咽口窯跡出土陶磁器⑧ (1/3)

の釉を剥ぎとっている。9も同様の底部と思われるが、チャツが逆さまに使用され溶着している。両者ともに2層出土。

白磁

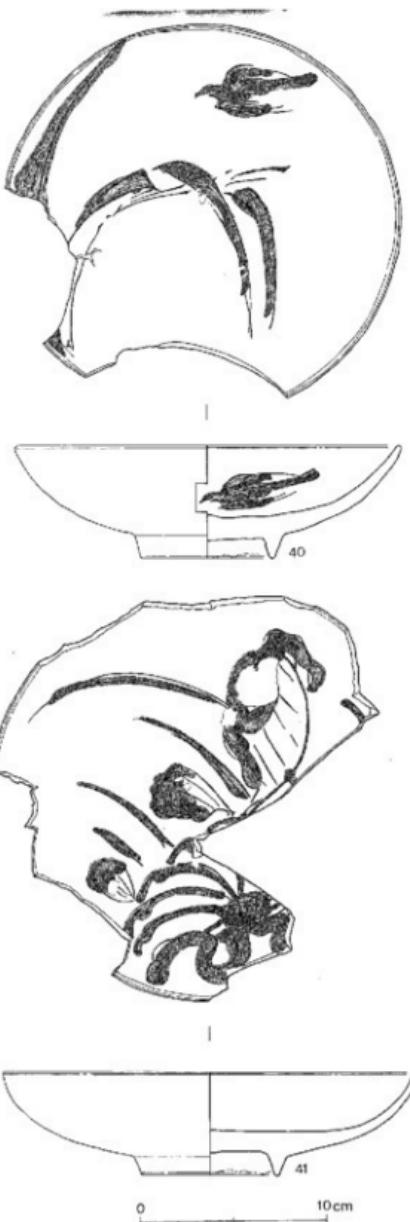
白磁は、図示しなかったが108点出土し、製品に占める割合は3.5%と非常に少ない。器種別には、小皿が106点、瓶1点、不明1点と丸形の小皿がほとんどを占める。見込みを蛇ノ目釉剥ぎする小皿の上に釉剥ぎない丸皿が溶着している資料もみられた。

染付 (11~41)

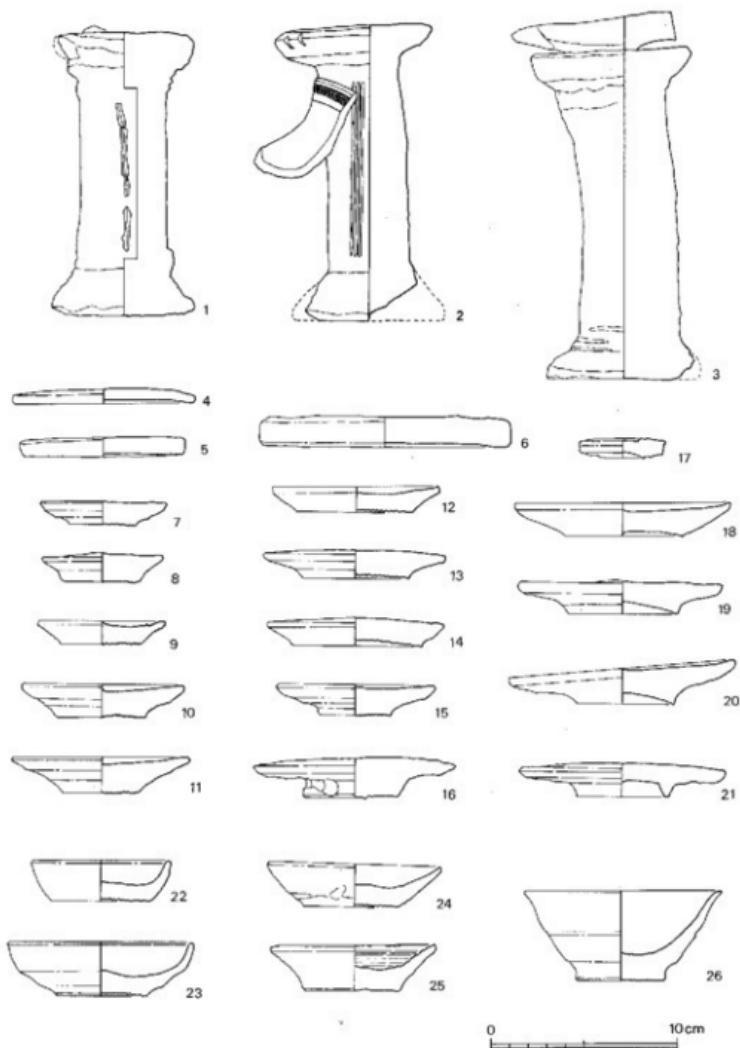
染付は2276点出土し、本窯で主要に焼かれた製品であるが、大碗と鉢、中皿の大ぶりの陶磁器が主体をなしている。ここに図示した資料はいずれもロ、トレンチ2層出土である。

11~15は中皿である。11は刷目文、12は花弁と松葉、13は草花文、14は瓢箪、15は岩?を外面に描いている。見込みには、13と15は折枝文、14は瓢箪を描く。また、14は「大明」、15は「太明」の底裏銘が書かれている。いずれも高台疊付は削られて無釉。

16~23は大碗である。16は外面に牡丹と花弁文、見込みには折枝の椿を描いている。17は見込みと高台内に花文を描く珍しい資料である。18・19・22・23



第38図 堀口窯跡出土陶磁器⑨ (1/3)



第39図 吸口窯跡出土窯道具 (1 / 3)

は外面に雲龍あるいは龍鳳文、見込みに荒礪文を描くものである。21は外面に雲龍文と見込みに折枝文を精緻な作行きで描く数少ない資料である。20は、外面に柳と竹を、見込みに折枝花文を丁寧な筆致で描いている。

24～28は丸形の中皿である。24は外面に牡丹唐草文、見込みに折枝文、高台内に「大明」の底裏銘を描く。25は外面に岩牡丹文、見込みに突がついた折枝文を描く。26は外面と見込みに折枝の牡丹文を描くが、内面には團線はみられない。27・28は繊細な描線で岩牡丹文・蝶々などを配し、見込みに草花文、高台内に「太明」の底裏銘を描く。

29～32は丸形の小皿である。29は見込みを蛇ノ目釉剥ぎする皿で、内面に梅の折枝文と松葉を描く。30は菊、31は折枝文、32は丸に十字花文を内面に配し、さらに32は外面に蔓と葉、高台内に「福」の字の裏銘を描いている。

35・36は端反の中皿で、見込みを蛇ノ目釉剥ぎしている。35は簡略な文様の芙蓉手皿で、36は折枝文を内面に描き蛇ノ目釉剥ぎ部分に鉄錆を塗る。

33・34、37～39は、見込みを蛇ノ目釉剥ぎする丸形の中皿である。33・34・37・38は蛇ノ目釉剥ぎ部分に鉄錆を塗り、39は削って線状痕がはいる。33は梅の折枝文、34は茄子？、37は菊折枝文、38は花弁と唐草、39は折枝文を内面に描くが、39は線描でダミの部分がみられない。この種の丸皿と25の鉢との熔着資料がみられる。なお、38の文様と同一の意匠をもつ中皿が木場山窯跡から出土している。

40・41は丸形の中皿である。40は軽妙な運筆で飛翔する鳥と笪？を描いている熟練度の高い作品である。41は菊を力強いタッチで描いている。見込みを蛇ノ目釉剥ぎしないこの種の皿は上手物であるが、見込みを蛇ノ目釉剥ぎする皿が数量的に多い。

この他に図示しなかったが、口縁が直立する盤形の中皿で流水文と楓文を描いたものがロ、トレンチ1層から出土している。

② 窯道具（第39図）

窯道具は427点出土し、そのうちロ、トレンチ1層から54点、2層から367点の計421点出土している。ここに図示した資料はすべてロ、トレンチ2層出土品である。

1～3は陶質のトチンである。胴部には鉄釉が掛かり、1には1条、2には3条の沈線がはいる。

4～21はハマである。4～6は円板形ハマで、4は磁質、5・6は陶質である。7～21は逆台形ハマで、すべて磁質である。形態的には底を糸切り離しするもの（7～16）と底を削るもの（18～20）、高台がつくもの（21）に区別され、さらに7～16は底部が広い形状のものと円盤状の高台になるものなどに細分されるようである。

22～26はチャツで、すべて磁質である。底部は糸切り離しするものがほとんどであるが、25は削られている。形態的には、体部が内湾ぎみのもの（22・23）、直線的にのびるもの（24・25）、身が深いもの（26）に分けられる。

(3) まとめ

管見するところ、本窯跡について具体的に名があげられた古文書による記録はみられない。三股皿山は『皿山田記』^(註1)のなかに慶長10年(1605)ころに開始されたとあり、豊富な陶石の発見によって村木地区などで創成されていた磁器の本格的な操業をするために三股地区へ移動が行われたことが考えられる。その初段階の窯は、これまでの採集資料などから三股古窯と三股青磁窯があげられるが、本窯はその次の段階に位置付けられよう。元禄5年(1693)ごろには編纂されていたと思われる『大村記』^(註2)には、窯の名はあげられていないが三股皿山では益数28軒(室)あり、年間に9828俵の生産があることを記録している。他の窯の窯室数をみると5~13軒が一窯単位の規模のようであり、この時点においては三股皿山では2箇所以上の窯が存在していた可能性が高いことが推察され、そのなかの一つが本窯と考えられる。

今回の調査によって、発掘した範囲では焼成室が6室確認されて24mほど長さをもつことが分かったが、焚口が検出されたわけではないので、窯体はさらに西側にのびて咽口新窯の下部にもぐりこんでいることが予想される。また本窯の焼成室の平均的な規模は、奥壁幅3.79m、奥行4.08mで、大橋康二氏の窯構造の変遷によると、1650~1680年代の第4グループに相当する規模をもつことが分かる。

出土した製品は、染付の大碗・鉢・中皿を主体として、青磁とわずかに白磁が焼成していたことが明らかになった。染付で年代の指標となる製品として、雲龍見込荒磯文碗、牡丹唐草文鉢、網目文中碗などがみられるが、「日」字あるいは「寿」字の鳳凰文皿は出土していない。これらは1660~1690年代に包括される年代に位置付けられる製品である。

陶磁器の年代観と窯構造の変遷から本窯は1660~1690年代ごろに営まれ、内容的には海外輸出向けの上手物の製品を中心として焼成していた窯であったことが考えられるが、見込みを蛇ノ目釉刻ぎする小皿や中皿も製品の一定量を占めるので併せて量産を念頭においた操業が行われていたことが指摘でき、その後の大量生産体制の端緒をうかがうことができるであろう。

(宮崎)

註1 太田新三郎「波佐見地方陶祖の探究」 波佐見町教育委員会 1962 所収

2 「大村記」 波佐見町教育委員会 1986

3 大橋康二「肥前古窯の変遷」『九州陶磁文化館研究紀要第1号』 九州陶磁器文化館 1986

5. 中尾上登窯跡

(1) 調査概要

本窯跡は、町南東部の中尾郷に所在する。この中尾集落は、現在も窯業関係に従事する人が多く、谷間を埋める家々の間を縫って煙突が立ち並び窯場の雰囲気を今に残している。当地区の東側には陶石原産地の白岳山があり、本窯をはじめ広川原窯跡、白岳窯跡、中尾下窯跡、大新窯跡の5箇所の古窯跡が知られている。本窯跡の現状は、中尾の集落を見下ろす東側の山麓に細長く連なる段々畑になってしまっており、一部が杉と松の植林地や宅地として利用され、畑の石垣には12箇所ほど窯壁が残存している。

調査は、窯を含めた周辺の測量と発掘による窯の遺構の確認を主な目的とするが、併せて台風17号などの災害によって露出した物原A・B・C地点の遺物採取を行った。

試掘場は、A～Eトレンチの5箇所を設定し、75.9m²を発掘した。Aトレンチでは、焚口に近いと推測される焼成室が3室検出され、当方で安光窯と呼ばれる部分に相当する可能性が高い。西から第1室、第2室、第3室と仮にすれば、第2室の奥壁はわずかに残り、第3室は床面が削平されて整地層と思われる混躙の灰褐色粘質土層が露わかれることになる。Cトレンチでは、窯壁を4回以上築き直したことが確認された。土層断面の2層は明治期の型紙摺の製品を包含しており、窯壁や窯道具などを埋め込んで床面を整地した層と考えられ、最終の床面は削られている。Dトレンチでは、最上部の焼成室と側溝が検出され窯尻であることが判明した。Eトレンチでは、中央にトンパイが並んで検出されたが、それを埋め込んで西隅のトンパイに関連する床面が築かれたようである。土層断面では、2層は銅版刷りの大正期の遺物を含んでおり、3層は床面整地層、4層は窯の南端を示す土層、6～9層は物原の土層で9層から本窯で最も古いと考えられる陶磁器群が出土するなどの成果があった。Bトレンチは当初床面と判断していたが、掘り下げが足りなかったようである。

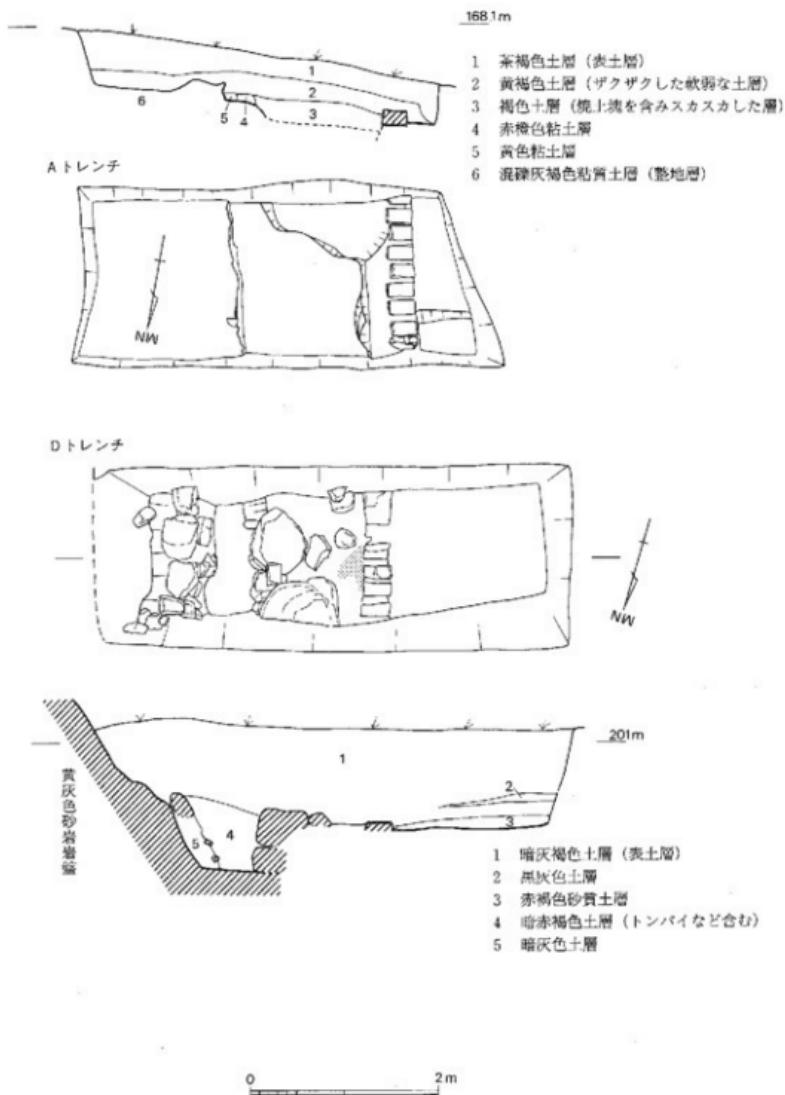
測量の結果、窯体は山際に沿って西南西から北東(N-75°E)に向かってのびており、比高約32m、煙の傾斜から類推すると12°ほどの勾配をもつようである。今回の発掘成果と合わせると、Aトレンチ西側の焚口と推測される地点から窯尻までが水平全長160m以上の規模を有することが明らかとなつた。窯尻付近の物原C地点の遺物の時期から、江戸時代末期には最上端まで達したことが推測され、発掘調査によって確認されたなかでは世界最大規模の窯であったことが判明した。また、窯体の南側に川に沿って広がる物原は、3～5mほどの比高をもって川底へ落ち込んでおり、時期的に長期間にわたって窯が営まれたことを物語っている。

(2) 遺 物

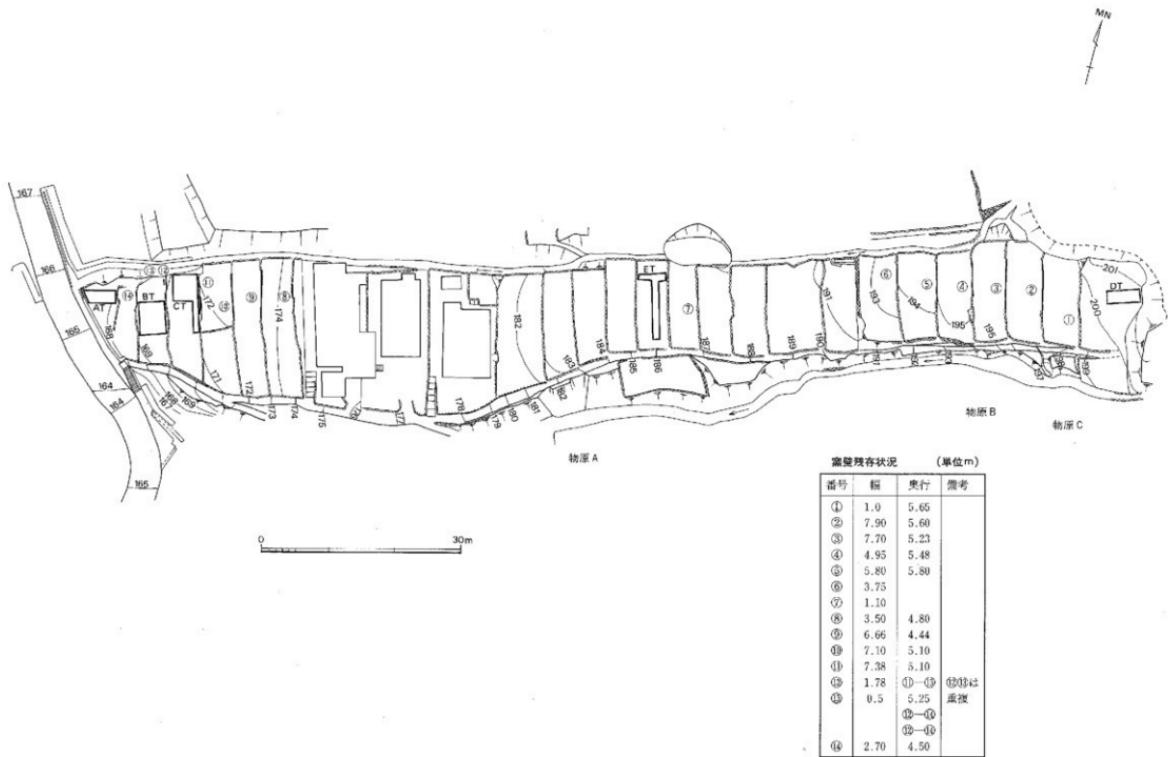
今回の調査では、陶磁器6728点、窯道具2522点の計9340点の遺物が出土した。陶磁器は、種類別に数量処理を行っていないが、染付がそのほとんどを占め、青磁・白磁が伴出する。染付



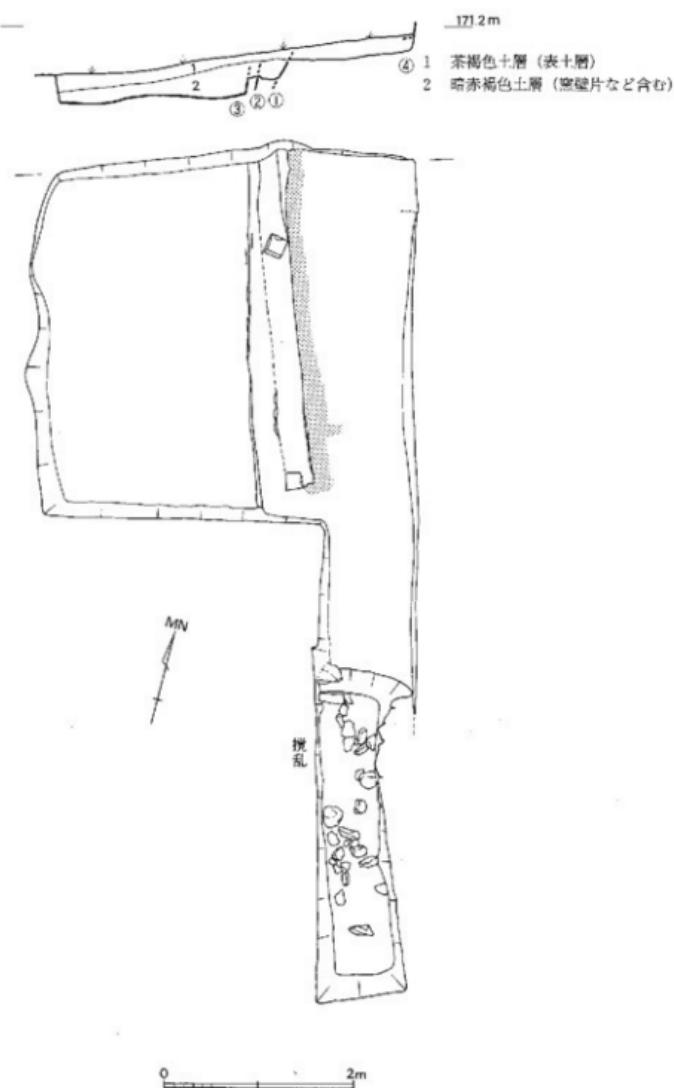
第40図 中尾周辺の古窯跡 (1/5000)



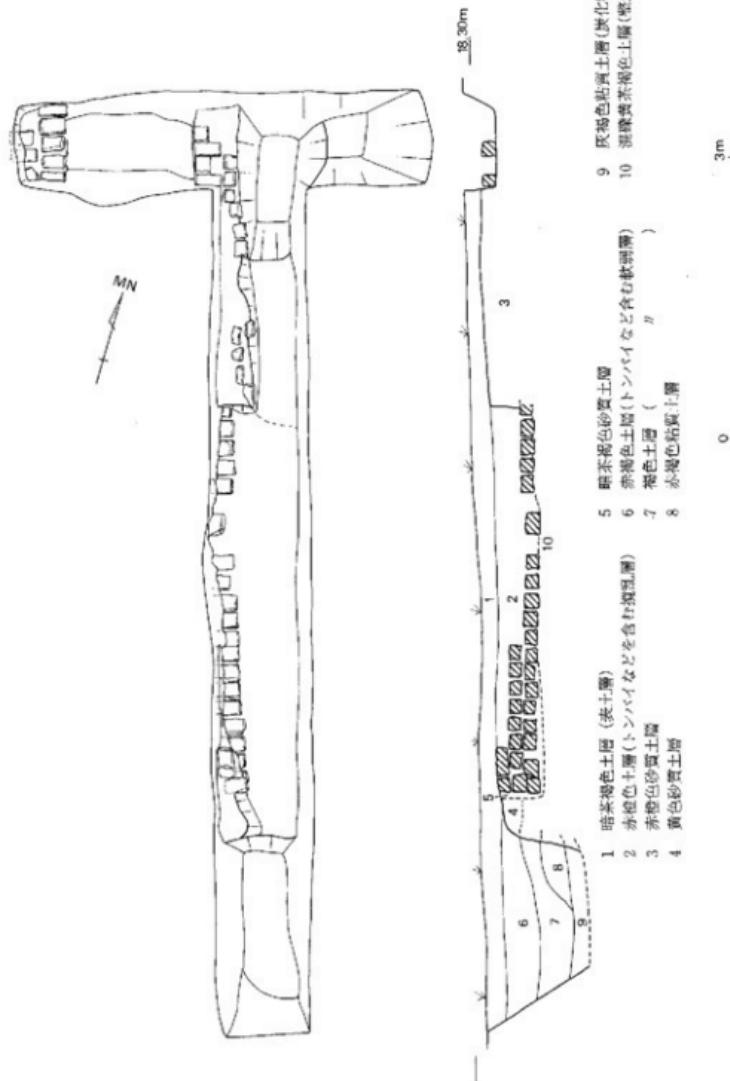
第41図 A レンチ、D レンチ実測図 (1/60)



第42図 中尾上流河床地形測量図 (1/600)



第43図 C トレンチ実測図 (1/60)



第44図 Eトレーンチ実測図 (1/60)

のなかには明治・大正期の製品もみられる。

物原A地点において災害によって崖面に露わされていた遺物を層位別にサンプリングできたので上層の状況を説明し、次に陶磁器についてとりあげる。

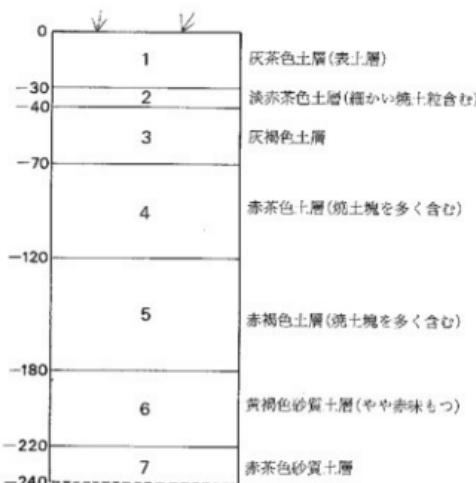
土層は、7層に分けられ、1層は表土層、2層～7層は焼土を含んだ物原堆積層である。遺物は4～5層がもっとも多く、6層は無遺物層である。採集品では7層が最下層の資料ということになるが、7層以下については精査する時間的な余裕がなかった。

① 物原A地点の層位別出土陶磁器（第46図）

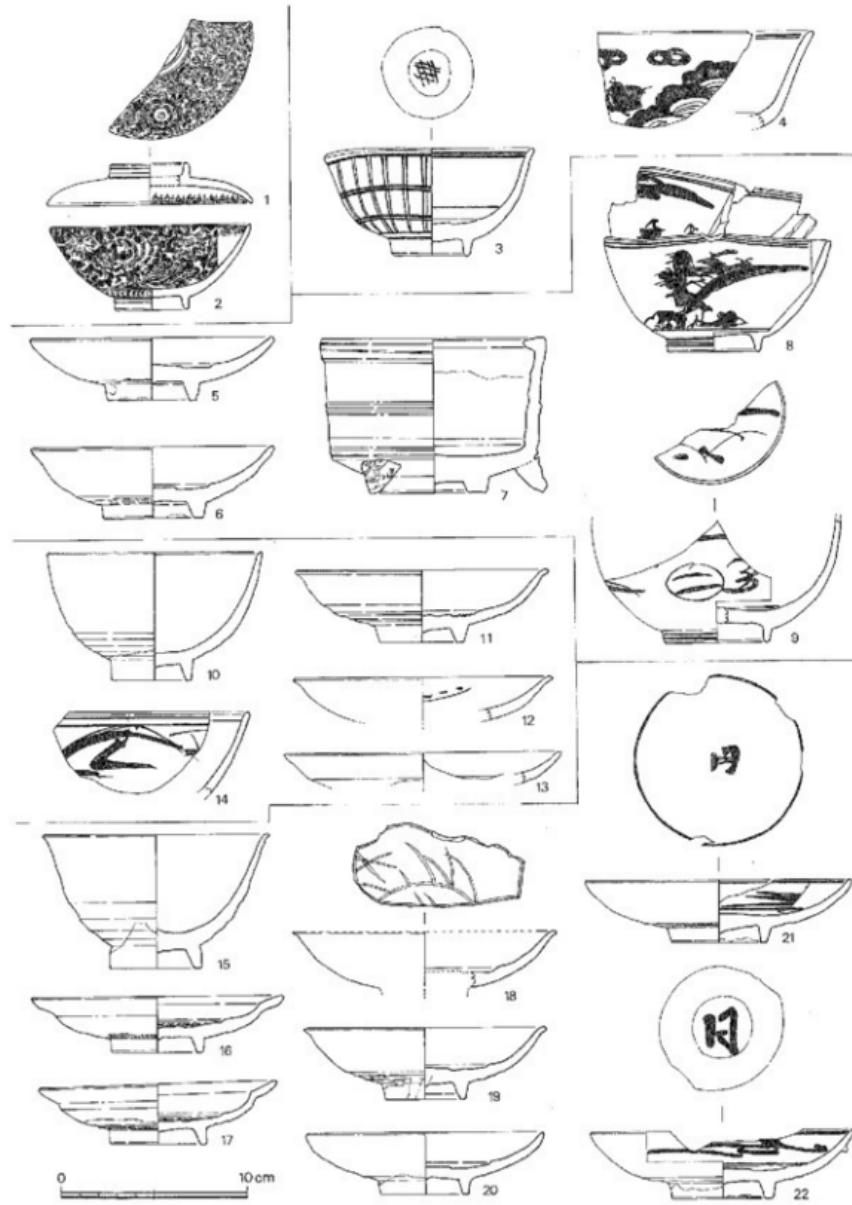
1・2は2層出土の碗と蓋で、洋吳須で花模様を型紙掲りした明治期（19世紀後半）の製品である。3・4は3層出土の染付碗で、3は格子目文の端反碗、4は波に千鳥を描く大碗である。これらは江戸時代末期（19世紀前半）に位置付けられる。

5～9は4層出土の青磁（5～7）と染付（8・9）である。5・6は見込みを蛇ノ目釉剝ぎする丸形の小皿で、体下端から高台内にかけて釉が掛からない。7は輪高台で三足の半尚形香炉である。8は体部に山水文を描く丸形の中碗で、9は雲龍見込み荒磯文大碗である。これらの製品は17世紀後半～18世紀前半に包括できる。

10～14は5層出土の青磁（10・11）、青磁染付（12・13）、染付（14）である。10は丸形の中碗で、体下半部は回転ヘラ削りされている。体下端から高台内にかけては無釉。11は見込みを蛇ノ目釉剝ぎし口縁小さく外反する端反形の小皿である。体下端から高台内には釉が掛からない。12は端反形、13丸形の小皿である。両者ともに体下半部を欠失しているが、見込みを蛇ノ目釉剝ぎする製品であろう。内面に細筆の簡略な文様が描かれる。14は雲龍見込み荒磯文大碗の体部片である。これら5層出土の製品は、4層出土品と基本的な内容は変わらないが、層位



第45図 物原A 土層断面略図 (1/40)

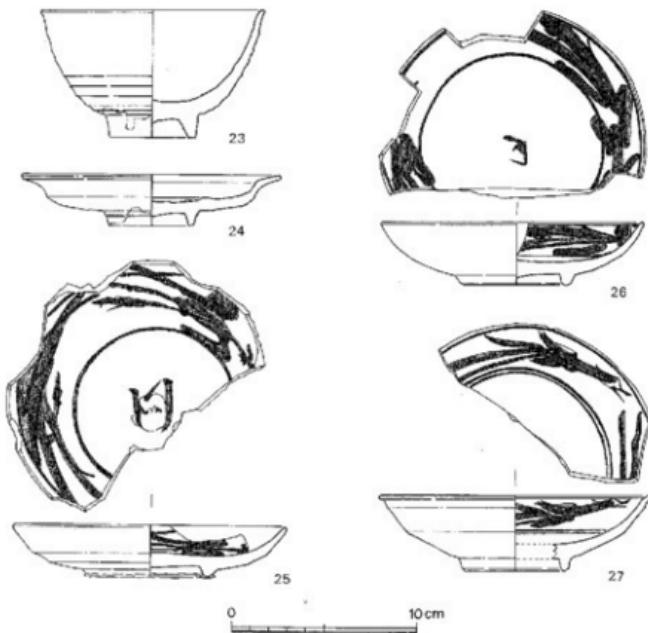


第46図 中尾上登塚跡出土陶磁器(1) (1/3)

的に古い様相をもつことが推察され、17世紀後半に位置付けられる。

15～22は7層出土の青磁（15～20）と染付（21・22）である。15は口縁を小さく外反する中碗である。体中程以下は回転ヘラ削りされる。体下端から高台内にかけては施釉しない。16・17は見込みを蛇ノ目釉剥ぎする折縁形の小皿である。体下端から高台内にかけては施釉せず、体下端には放射状の削り痕が残る。18・19は見込みを蛇ノ目釉剥ぎする蝶反形の小皿である。体下端から高台内には釉が掛からず、18はヘラ先による文様が施されている。20は見込みを蛇ノ目釉剥ぎする丸形の小皿で、体下端から高台内にかけて釉が掛からない。21・22は「日」字鳳凰文の丸形小皿で、鳳凰をスピード感のある筆づかいで簡略に描いている。やや青緑色をおびた釉は体下端から高台内には掛からず、さらに22は見込みを蛇ノ目釉剥ぎしている。これら7層の製品は、17世紀中ごろから後半にかけて位置付けられ、次にとりあげるEトレンチ9層出土資料と関連をもつことが考えられる。

以上の陶磁器は、年代的に17世紀～19世紀代にわたっているが、18世紀後半代の製品が欠落しており、本窯の操業時期と関連をもつことが考えられるが、以下他の陶磁器を見てみたい。



第47図 中尾上登窯跡出土陶磁器② (1/3)

② Eトレント 9層出土陶磁器（第47図）

23・24は青磁で、25～27は染付の資料である。23は口縁をわずかに外反させる中碗で、体下半を回転ヘラ削りし、体下端から高台内にかけては施釉しない。24は見込みを蛇ノ目釉剥ぎする折縁形の小皿で、体下端から高台内にかけては施釉しない。25～27は「日」字鳳凰文の小皿であるが、25・26は丸形、27は口縁が小さく外反する端反皿である。いずれも高台疊付の釉を削り取っている。これらの資料は、青磁小皿が折縁皿だけであること、「日」字鳳凰文皿に蛇ノ目釉剥ぎするものがなく疊付釉剥ぎであることなどから、前記した物原A地点7層の資料に類似しつつも古相の様相をもつようでここでは17世紀中頃段階に位置付けておきたい。

③ その他の陶磁器（第48～53図）

ここでは物原A・B・C地点で表面採集された資料と各トレントで出土した陶磁器を種類別に分けて説明を行う。

青磁（28～37）

28は丸形の中碗である。体下端から高台内には釉が掛からず、体下端には放射状に削り痕が残る。29～33は見込みを蛇ノ目釉剥ぎする小皿で、29は端反形、30～33は丸形である。体下端から高台内にかけては施釉しない。35・36は輪高台で三足の半筒形香炉である。37は折縁形の大鉢で、内面に算木文と花弁状の文様を片彫りしている。この種の中・大形品はほとんど出土していない。34は青磁染付で、蛇ノ目釉剥ぎする端反形の小皿である。線描の文様が染付されるが意匠については明瞭でない。以上の青磁は、28・31がAトレント1層、33がBトレント2層、その他は物原Aから出土したもので、17世紀後半～18世紀前半に包括される。

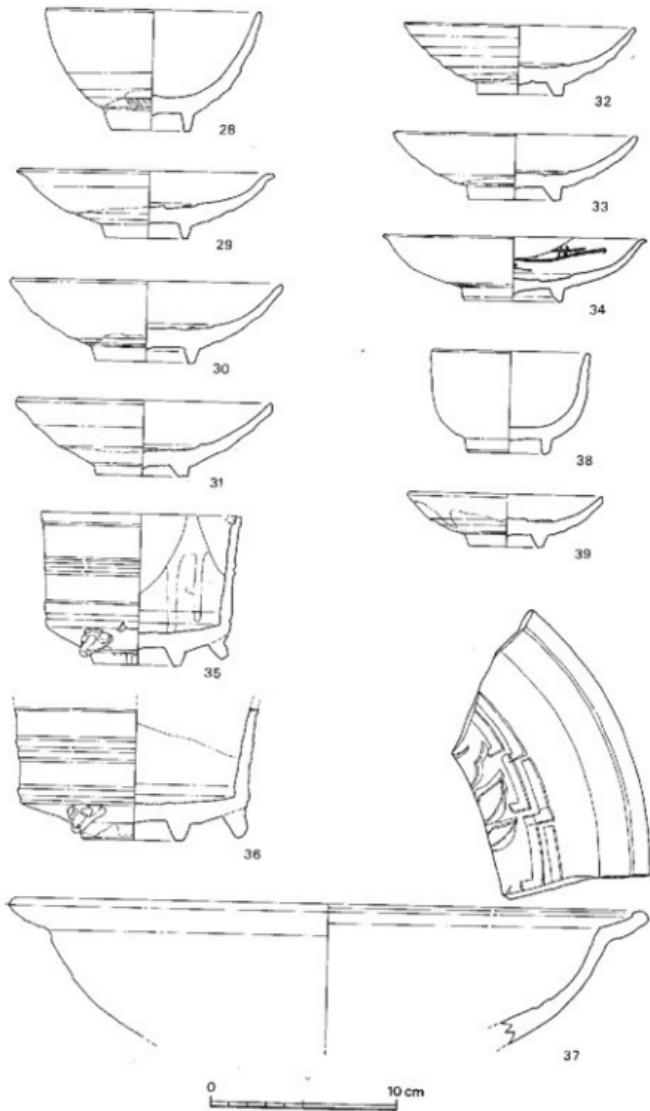
白磁（38・39・84）

38は丸形の小碗である。18世紀後半～19世紀前半代の製品である。物原B地点出土。39は見込みを蛇ノ目釉剥ぎする小皿で、18世紀代の資料であろう。物原A地点出土。81は仏教器で、18世紀代の資料であろう。物原A地点出土。

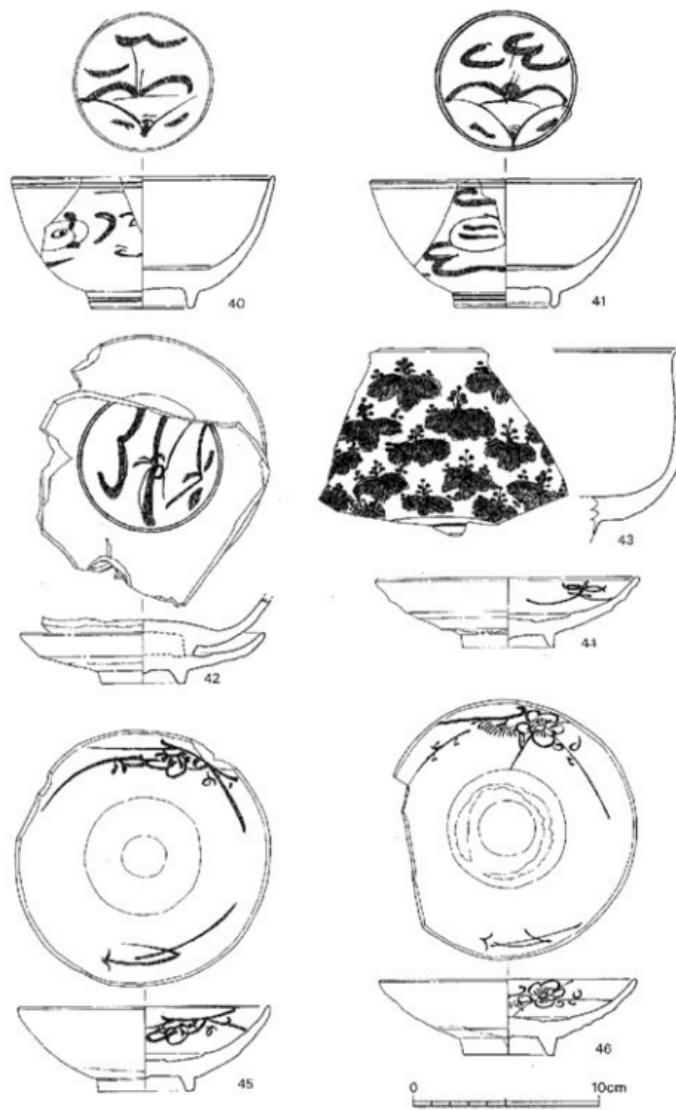
染付（40～73、77～83、85～95）

40・41は雲龍荒磯文大碗である。42は雲龍荒磯文大碗と青磁小皿が溶着したものである。1660年～1680年代の資料である。いずれも物原A地点出土。43は体部に桐を描く鉢で、17世紀後半代の製品である。44～47は見込みを蛇ノ目釉剥ぎする丸形の小皿で、44は蝶、45・46は梅の折枝文と松葉文を描き、47は「日」字鳳凰文皿である。47は疊付を釉剥ぎし、他は体下半から高台内にかけて釉が掛からない。17世紀中ごろから後半にかけての製品であろう。44がCトレント2層出土の他は、物原A地点から出土している。48は、芙蓉手の端反形中皿で、見込みを蛇ノ目釉剥ぎし中央に「日」字を染付する。高台疊付を釉剥ぎしている。1650～1680年代の製品であろう。物原A地点から出土している。

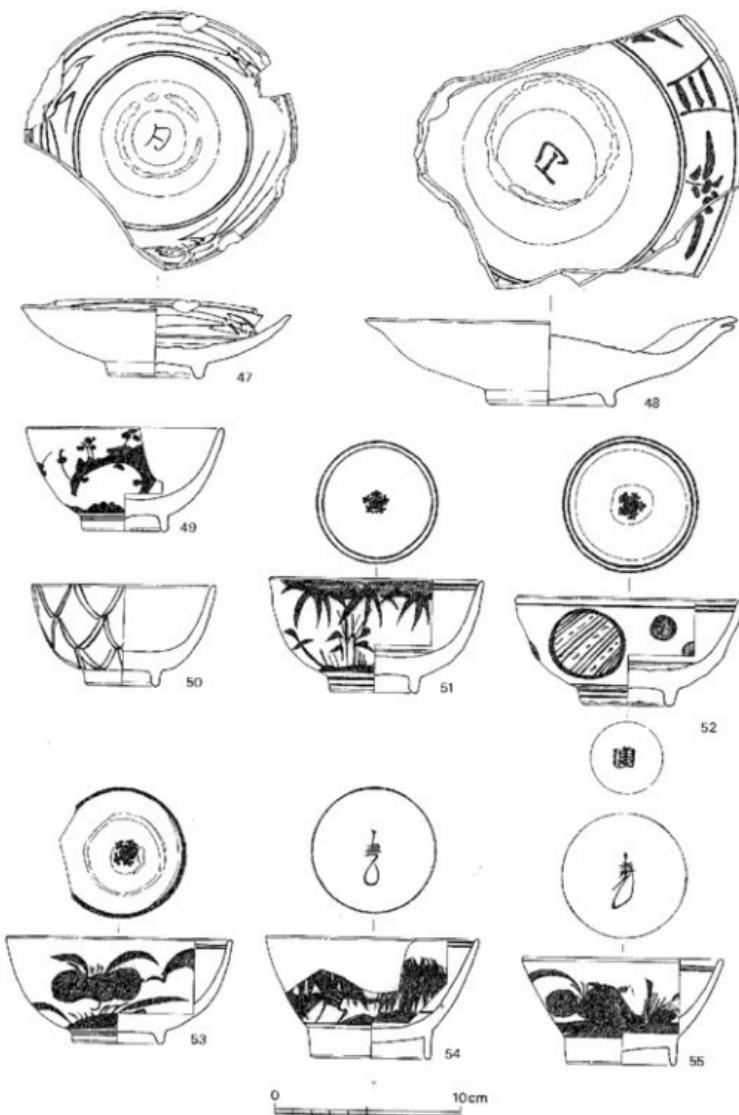
49～53は丸形の中碗で、いわゆる「くらわんか茶碗」と呼ばれているものである。49は梅樹文あるいは草花文を体部に描くポピュラーな製品であるが、本席では数が少ない。50は二重綺



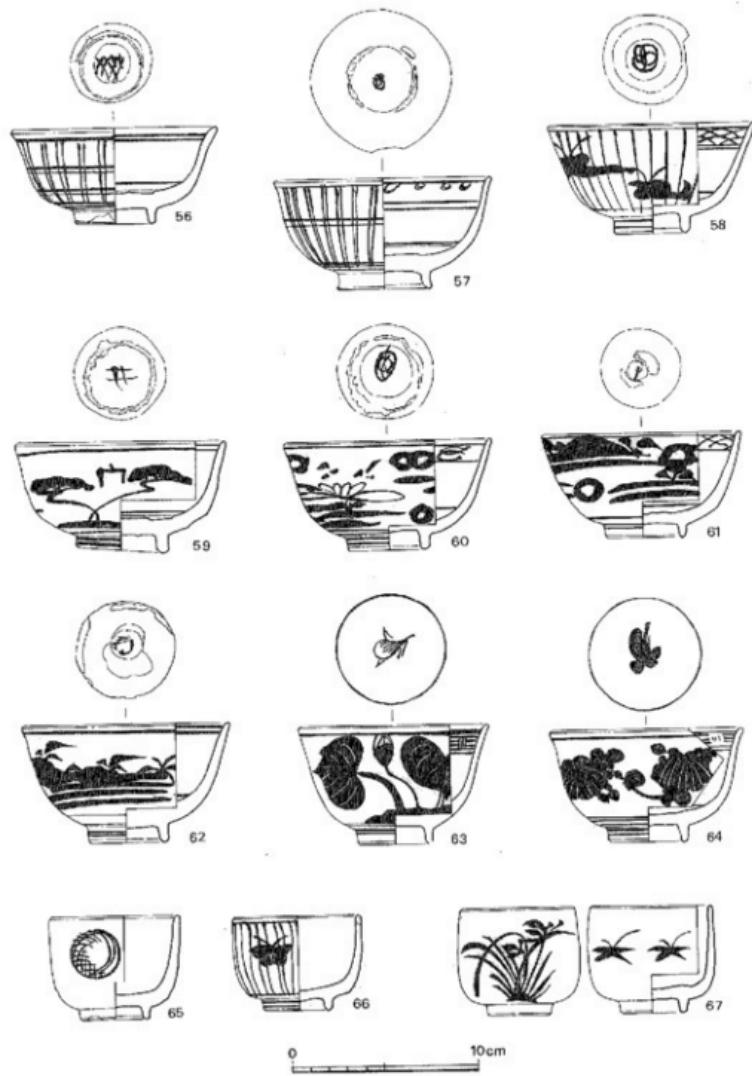
第48図 中尾上登窯跡出土陶磁器③ (1 / 3)



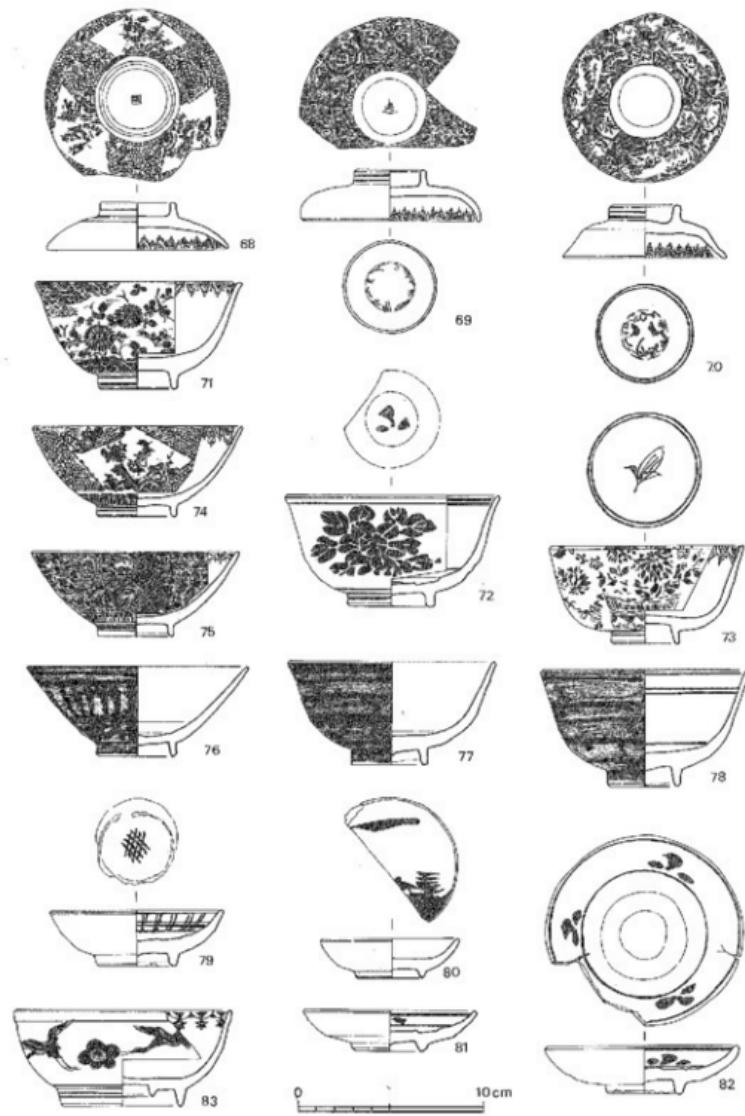
第49図 中尾上塙窯跡出土陶磁器④ (1 / 3)



第50図 中尾上登窯跡出土陶磁器⑤ (1/3)



第51図 中尾上登窯跡出土陶磁器⑥ (1 / 3)



第52圖 中尾上葺窯跡出土陶磁器① (1 / 3)

目文を体部に描く。51は竹文、53は菖蒲文を体部に描き、見込みにコンニャク判五弁花を染付し、53は見込みを蛇ノ目釉剝ぎする。52は体部にコンニャク判の丸文を染付するもので、見込みは蛇ノ目釉剝ぎし中央にコンニャク判五弁花を染付している。高台内には角形の裏銘がはいる。これらは18世紀中ごろから末にかけての製品と考えられる。49・50・53は物原A地点、51と52は物原B地点から出土している。

54と55は高台の広東碗である。54は柳、55は菖蒲？を体部に描き、見込みに「寿」字を染付する。1780～1860年代の製品である。54は物原A地点、55は物原B地点から出土。

56～64は端反彌のグループに包括される製品である。56・57は格子文、58は縦縞に蝶、59は松、60は睡蓮を体部に描く19世紀前半の幕末の製品である。61～64は洋具須で蓮、草花文などを描いているが、64は染付を針で引っ掻き白く抜いている。19世紀後半の明治期の製品である。57・60・63・64は物原A地点、56・59は物原C地点、56・59はCトレンチ2層、62はDトレンチ2層から出土している。

65～67は深めの丸形碗で、65は丸文、66は縦縞に蝶、67は蘭と蝶を体部に描く。1820年～19世紀代の製品であろう。65・67は物原A地点、66はCトレンチ2層出土。

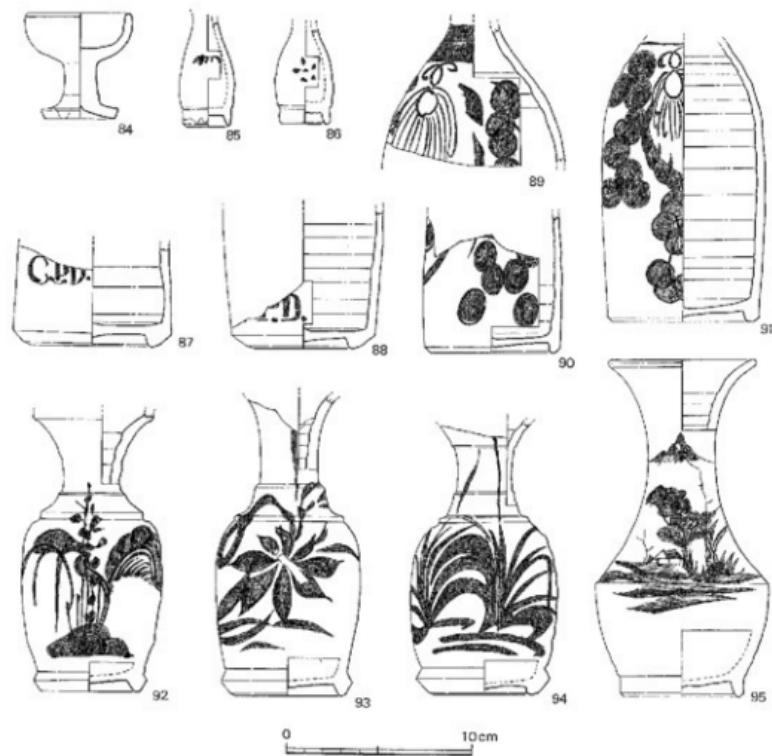
68～75は洋具須の型紙彌の蓋付碗である。碗は形態的に端反彌（71～73）と平彌（74・75）に分けられる。19世紀後半の明治期の製品である。72・73は物原A地点、他はCトレンチ2層出土している。

79は蛇ノ目釉剝ぎする小皿である。内側面に格子文を描く。80は見込みに山水文を描く極小皿である。79・80は1820～1860年代の製品である。81・82は蛇ノ目釉剝ぎする洋具須小皿である。内側面の圓線内に3箇所粗略な草花文を染付する。19世紀後半の明治期の製品。81は外側面に鶴と梅を銅版転写によって施した二重高台の皿で、明治から大正期の製品であろう。81がCトレンチ2層出土、他は物原A地点から出土している。

85・86は7cmほどの小形瓶で、簡略な芭や梅を施す。『波佐見古陶磁文様集』には御神酒德利としている。19世紀前半の幕末の製品であろう。物原C地点出土。87・88はコンプラ瓶である。「C.P.D」を87は手描き、88はプリントしている。87は1820～1860年代、88は1870～1900年代に位置付けられよう。Cトレンチ2層出土。86～88は葡萄を胴部に描く爛徳利である。口頭部には錫釉が掛かる。89は物原B地点、90はDトレンチ2層、91は物原A地点から出土。92～94は盤口形の仏花瓶で、胴部に梅樹や蘭を描く。江戸後期から幕末の製品であろう。95は立鼓形の花瓶で、洋具須を用いて山水画を繊細な運筆で描く。明治～大正期の製品であろう。92～95の瓶は物原A地点から出土した。

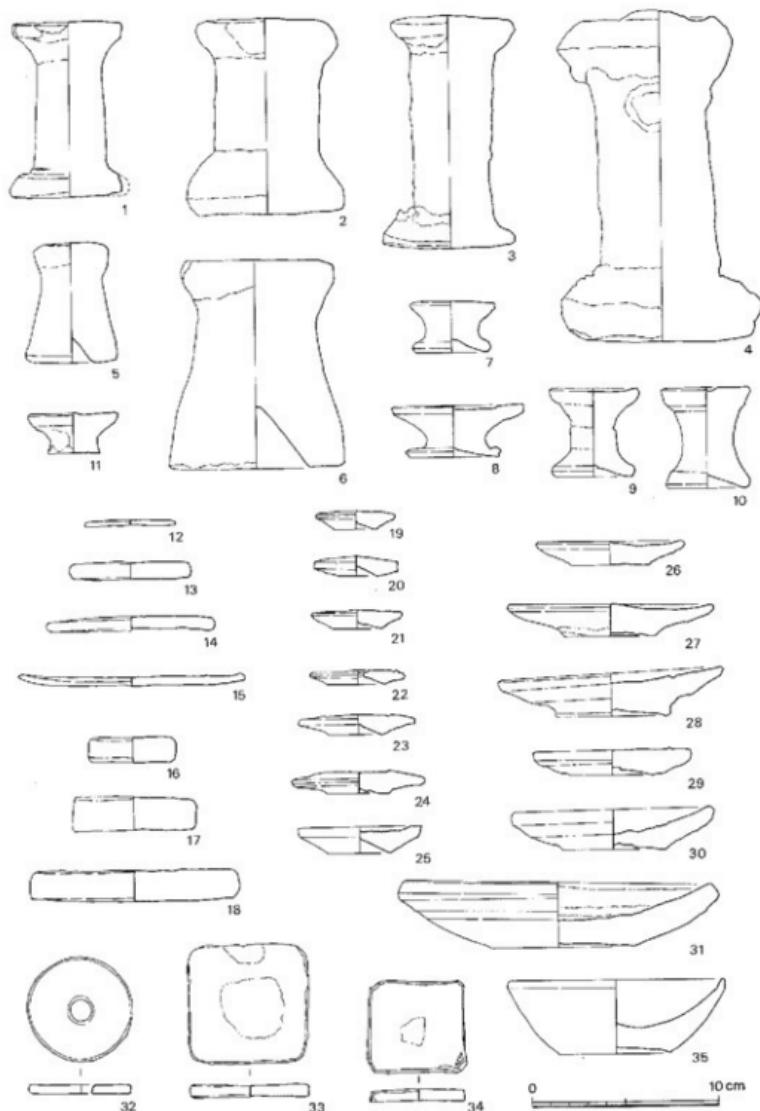
錫釉磁（76～78）

76は平彌、77・78は端反彌の中碗で外面に錫釉を施釉する。76と77は見込みを蛇ノ目釉剝ぎし、78は染付圓線を施す。洋具須の型紙彌碗と熔着したものがあり、明治期の製品と考えられる。いずれもCトレンチ2層から出土している。



第53図 中尾上登窯跡出土陶磁器⑤ (1/3)

以上の出土陶磁器は、17世紀中頃から明治・大正頃の長期にわたる製品がみられる。しかしど物原A地点の層位別出土資料の様相や構成において17世紀後半段階と18世紀末から19世紀代の製品が大半を占め、梅樹文や草花文のくらわんか茶碗が少ないと、見込みコンニャク判五弁花の深皿が見られ無いなどの大柄康二氏編年^(註1)のIV期(1690~1780年代)の製品が減少あるいは欠落していることが指摘できる。したがって、IV期の段階においては操業が一定期間休止されていた可能性が高いことが推測される。だが、次のV期(1780~1860年代)段階になると、廣東碗や端反碗などの特徴的な製品が多くみられるので、幕末には大村藩によって天保15年(1844)頃に編纂されていた『郷村記』に記録されているような大規模な生産が再開されていたことが考えられる。



第54図 中尾上登窯跡出土窯道具① (1 / 3)

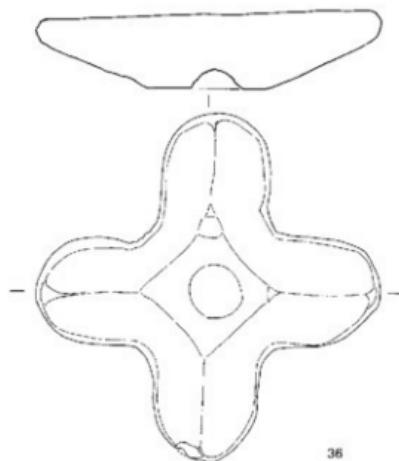
④ 窯道具（第54・55図）

窯道具は2522点ほどの出土があつたが、時間的な余裕がない、ここでは代表的な道具類の紹介にとどめる。

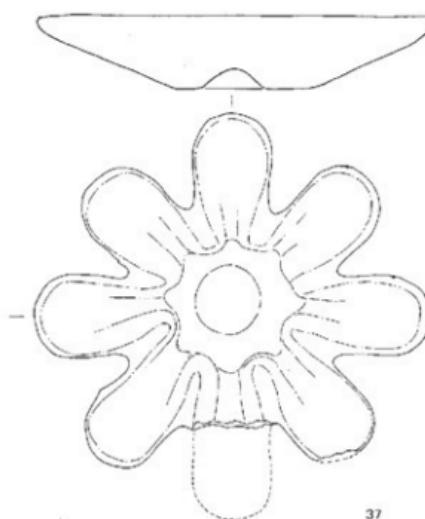
1～4は「I」字形の陶質トチンである。1・2は無釉で、3・4は胸部に赤褐色の鉄軸が掛かる。

6～11は陶質のシノである。6・7・9・10は赤褐色の鉄軸が掛かるが、他は無釉。

12～29・32～34・36・37はハマである。12～15、19・21・23・25～28・32～34は磁質で、他は陶質である。12～15は上面に布痕が付いたタタキハマ、16～18はやや厚みのある円板形ハマ、19～29は逆台形ハマである。26と27の底部は糸切り切り離し痕が付く。22は中央に孔が空く。32は中央が穿孔される円板状ハマ、33・32は方形の変形ハマである。36・37はタコハマである。地元でいう36は四ツ羽根、37は八ツ羽根である。37の凹み部分に布目痕が付く。30・31・35はチャツで、30・31は陶質、35は磁質である。ただ、30・31は内面中程に輪状の付着痕がみられるところから、ハマのような使用がなされたかもしれない。



36



37

0 20cm

第55図 中尾上登窯跡出土窯道具② (1/4)

(3) まとめ

今回の調査によって、17世紀中頃から明治・大正期に至る多量の遺物の出土がみられた。創期には青磁碗・小皿と染付「日」字鳳凰文小皿を焼成し、その後は染付磁器を中心として生産がなされたが、大橋氏編年のIV期（1690～1780年代）の製品が欠落あるいは減少していることが注目される。当段階に窯の操業が一時休止されたか、縮小をよぎなくされた事情があったことが想定され、今後その要因について究明する必要があると思われる。

中尾皿山については、『皿山旧記』と『郷村記』の古文書による記録がみられ、両者ともに正保元年（1644）に開窯されたという点で一致している。Eトレーナー9層出土の陶磁器は17世紀中頃に比定され、本窯が創始に近い年代をもつ窯であることが指摘できる。また本窯は、明治3年（1870）の皿山役所の廃止後には藩のバックアップが無くなり分割して使用されたようで、明治40年（1907）には二つに区分されて二登として使用されていたものが、古老の聞き取りによると昭和4年（1929）頃に最終的に廃窯されたということである。^{註4)}

窯体については、測量の結果水平全長が160m以上の長さを有し、現在調査されたなかでは世界最大規模の窯跡であることが判明した。^{註5)}また、天保15年（1844）頃に編纂されていた『郷村記』には釜数（窯室数）33軒と記述してあるが、測量図によって階段状になった畑を案分していくと、ほぼ33室の焼成室に計算することが可能なことが分かった。

本窯跡の西側丘陵に対峙する大新窯跡は、『郷村記』によれば釜数39軒と記してあり、窯室の規模がほとんど変わらないと考えるならば、江戸末期にはこの大新窯跡が世界最大規模の登窯であったことが推定される。しかし、この窯跡は建物建設等によって部分的に破壊されており、全体を確認することが困難な状況にある。

したがって、今回の調査において焚口付近の焼成室と窯尻が確認され、登窯の旧状を良好に残している本窯跡は非常に価値の高い重要な遺跡として評価ができると思われる。

（宮崎）

註1 大橋康二「肥前陶磁の変遷と出土分布」『国内出土の肥前陶磁』 九州陶磁文化館 1984 他の大橋氏文献による。

2 整理段階における大橋氏の指摘による。それを具体的に検証したにすぎない。

3 藤野保編『大村郷村記』第3巻 国書刊行会 1982

4 太田新三郎『波佐見地方陶祖の探究』 波佐見町教育委員会 1962 所収

5 註4文献。

6 大橋氏らが現地指導の際に世界最大規模の指摘をされた。それまで最大の窯とされていたのは、佐賀県伊万里市大川内山の鍋島藩窯で全長137mであった。

6. 中尾下登窯跡

(1) 調査概要

本窯跡は、中尾上登窯跡から北西に130mほどの位置にある。家屋が建ち並び、上部に畠地が部分的に残っている状況である。

昭和54年（1979）に金沢大学の佐々木達夫氏によって部分的な発掘調査がなされ、昭和57年（1982）にその成果の報告がなされたが、窯跡の全形を知り得る図面が無いので、今回地形測量を実施したものである。

測量の結果、山麓の北側を南西から北東に向かって（N-69°-E）のび、水平全長が約120mを測ることが明らかになった。南端は三角形状の小さな畠地になっており、焚口付近の状況を現していることが考えられる。上端には幅6.7mの窯壁が残り、地表面に焼成室の床面が露出している所もある。登窯の旧状を残した階段状の土地の傾斜は、比高約24mで、12°の勾配をもっている。『郷村記』には釜数26軒としてあり、測量によって幕末には100mを超える巨大窯であったことが判明した。

出土遺物は、報告書によれば19世紀～20世紀初めの青磁・白磁・染付が主体になると記述されているが、実測図をみると染付の雲龍見込荒磯文大碗や「日」字鳳凰文小皿、山水文中碗、見込み蛇ノ目釉刻ぎの小皿・中皿など大橋氏編年のIII期（1650～1690年代）の製品がみられるので、『郷村記』の寛文元年（1661）と『皿山旧記』の寛文5年（1665）の両者の開窯年代に若干開きがあるが1660年代の前半期に創始されたことは間違いないと思われる。また、興味深いことは、IV期（1690～1780年代）に特徴的なコンニャク判を施した染付製品がみられないことで、中尾上登窯跡と同様の様相をもっており、運動した事象としてとらえることができるのではないか。そこには歴史的な事件や災害等の何らかの原因によって生起した現象のように思える。なお、19世紀代の製品としてコンプラ瓶破片を表面採集している。

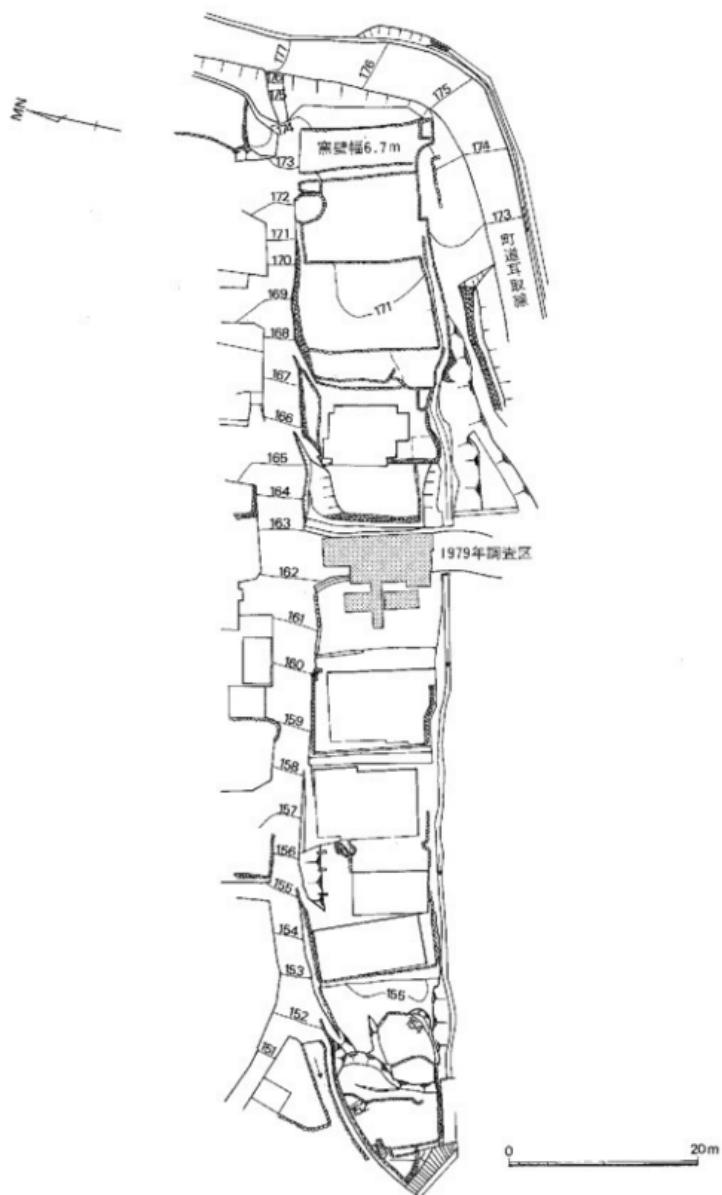
地元の研究者である太田新三郎氏は、昭和13年（1938）に脱稿された『波佐見地方陶磁の探求』のなかで「当初は五十室も続いた窯であったものを、現在は二登に区分し、其の中間と下部は畠地に拓いて各々五・六室の登窯となし、現在も盛んに使用されて居る」と昭和初期の状況を報告している。また、佐々木達夫氏は前掲報告のなかで、窯が最終的に廃窯されたのは地元の聞き取りよりと昭和17年（1942）とされている。

（宮崎）

註1 佐々木達夫「波佐見下登窯跡」「日本海文化第9号」 金沢大学文学部日本海文化研究室 1982
追記で製品は17世紀後半にまで遡ることが可能と修正を行っている。

2 大橋康二「肥前陶磁の変遷と出土分布」「国内出土の肥前陶磁」 九州陶磁文化館 1984 他
大橋氏文献。

3 太田新三郎「波佐見地方陶磁の探求」 波佐見町教育委員会 1962



第56図 中尾下登窓跡地形測量図 (1/600)

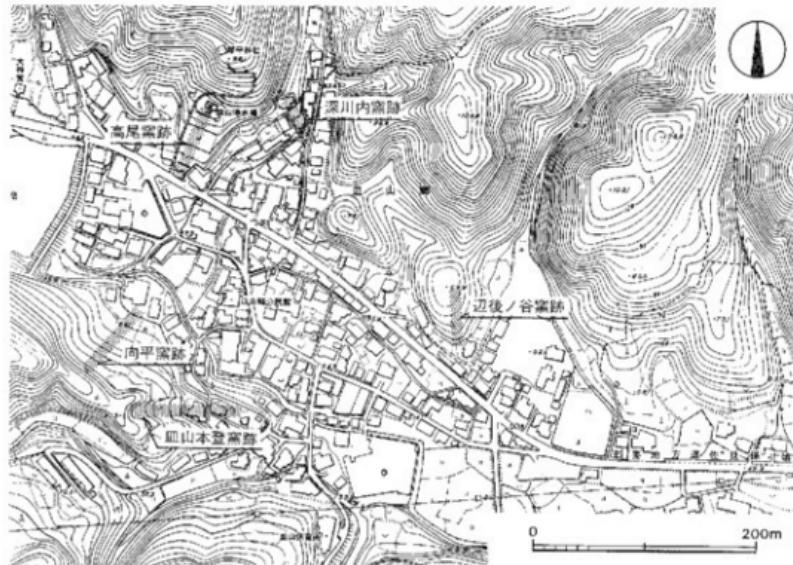
7. 辺後ノ谷窯跡

(1) 調査概要

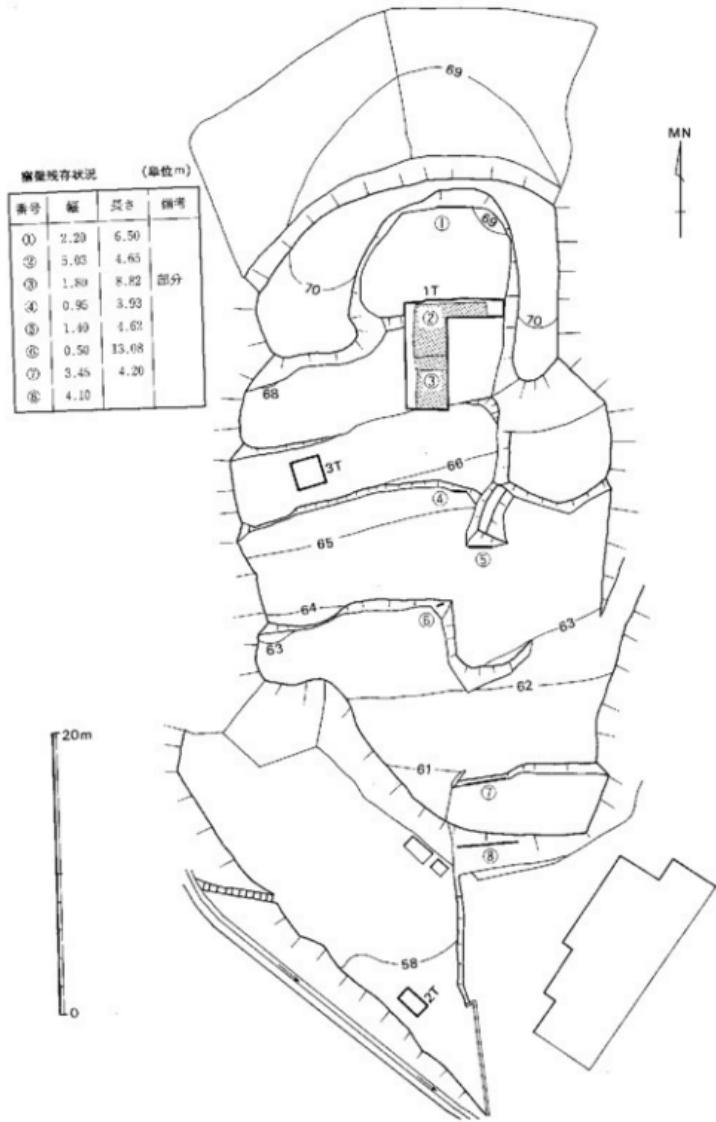
本窯跡は、町西北部の皿山郷に所在し、当地区には本窯跡の他に、向平窯跡、高尾窯跡、皿山本窑跡、深川内窑跡などの古窑跡が存在する。本窑は、主要地方道佐世保・嬉野線の北側にある小高い丘陵南斜面に立地する。付近の現況は、階段状の畠地と栗・杉林になっている。

窑体は、丘陵を造成して中央部に設けられたよう、調査前の現況で7箇所の窑壁が確認され、下端は宅地によって削られている。調査は、周辺の地形測量と3箇所のトレンチを設定して32.5m²の発掘を行った。

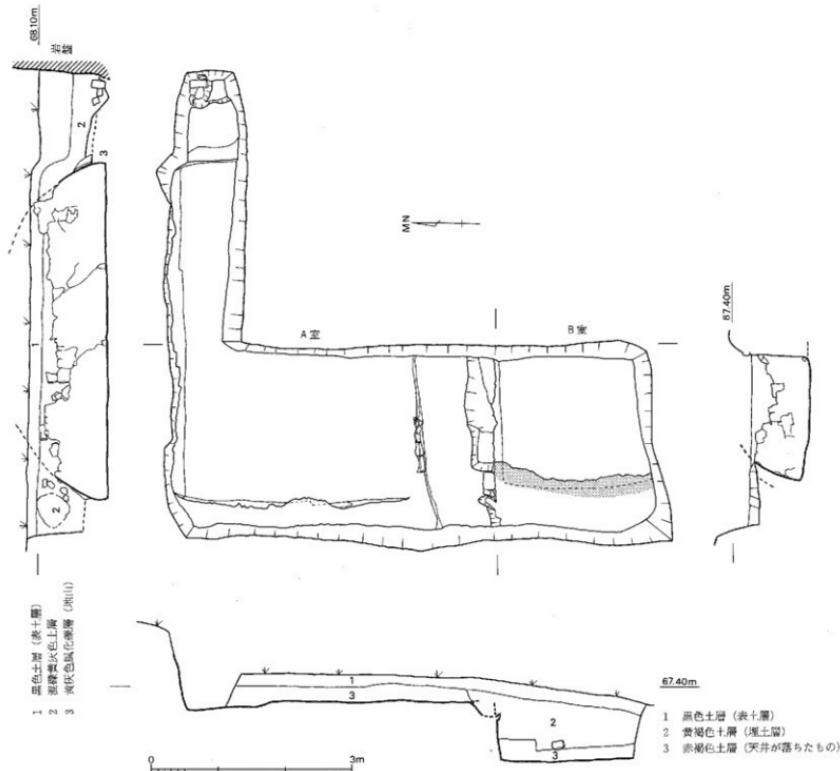
第1トレンチは、上から二番目の窑壁が残っている部分に焼成室の状況を調べるために設定し、二室の焼成室が確認された。北側のA室では火アゼを境として砂床と火床が検出され、南側のB室では砂床と側壁がアーチ状に残存していた。縦断の土層断面では、最下層（3層）に天井が落ちて堆積した状況がとらえられ、壁が15~20cmの厚さをもっていたことが分かった。北東隅では、側溝の一部と考えられる浅い溝が検出された。また、窑室は後世に埋め込まれて畠地として利用されたようだが、この埋土層（2層）から「寛永通宝」が1枚出土した。



第57図 皿山周辺の古窯跡 (1/5000)



第58図 辺後ノ谷窓跡地形測量図 (1/400)



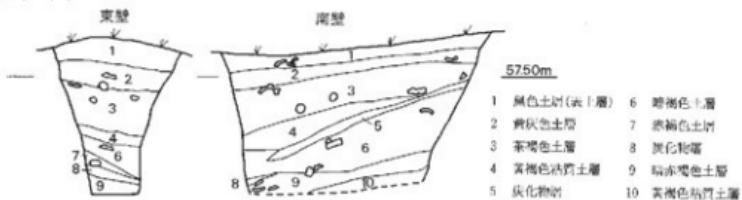
第59図 第I トレンチ実測図 (1/60)

第2トレンチは、物原の状況をみるために設定した。表土下の2~3層に陶磁器などの遺物がわりに出上したが、これは後世に畑を拓く際にできた土層のようである。4層以下は操業時の堆積のようであるがそれほど遺物は多くない。10層は無遺物層で、最下層の9層から遺物がまとまって出土しており、物原の一部がかかった可能性が強い。4層~9層出土の陶磁器の内容については、雲龍見込荒磯文大碗を主体とし差異は認められないようである。

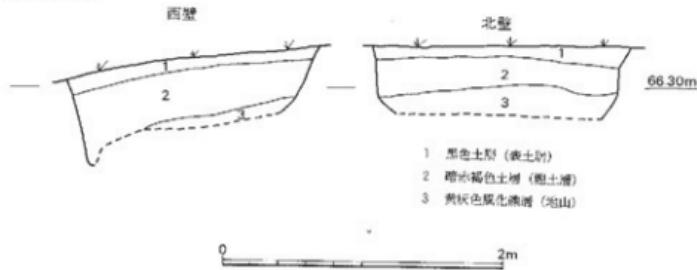
第3トレンチも物原の状況をみるために設定した。しかし、表土下に20~30cmの厚さの暗赤褐色土層（2層）があるだけで地山の黄灰色風化疊層（3層）に至たる単純な土層である。地山を削って畑地を拓き、2層はその際に埋め込まれた土層のようである。この時に物原も削平されたのであろう。

測量の結果、窯体は丘陵中央部を削て築かれており、ほぼ南北軸（N—3°W）を向いている。現況の畑地の傾斜から判断すると、約11°の勾配をもつ。窯壁は、第1トレンチの発掘によって検出されたものも含めると8箇所あり、現存の水平長は45mを測る。この数値を案分すると、焼成室の実行の平均値は4.09mであり、ここに11室あったことが類推される。元禄5年（1692年）頃には編纂されていたといわれる『大村記』には当地区的碑本場皿山は釜数13軒と記されており、これが本窯とするとあと2室と焚口が存在し、下方の宅地へのびて旧状の長さは

第2トレンチ



第3トレンチ



第60図 第2・3トレンチ土層図 (1/40)

55m前後の窯であったということになるが、出土陶磁器の年代では『大村記』が編纂された時点には本窯は操業しておらず、採集されている製品の内容から次の段階に開窯されたと思われる向平窯跡についての記載である可能性も強く、ここでは参考的なデータにとどめたい。焼成室の規模については、第1トレンチA室の奥壁幅が5.03m、奥行の平均値が4.09mで、大橋氏の窯跡構造の変遷によると1650～1680年代の第4グループに所属する。

(宮崎)

(2) 遺物

今回の調査において、陶磁器2592点、素焼片41点、窯道具613点の計3156点の遺物が出土した。第1トレンチ1123点、第2トレンチ951点、第3トレンチ1044点、表探38点と、各トレンチの出土量は同じような点数であるが、窯室に設定した第1トレンチでは窯道具が半数以上の317点が出土している。

① 磁器 (第61～64図)

青磁

今回小片なため図示していないが、第2トレンチ2層から碗1点と小皿1点、表探品として小皿1点の計3点がみられたにすぎない。

白磁 (26)

見込みを蛇ノ目釉剥ぎした、口径14.3cmの碗がある。第3トレンチ2層出土である。

染付 (1～25、27～52)

小碗A (1～6)

口径8～9cm内外のもの。1は口端に鉄錆を塗るいわゆる口紅装飾を施している。1は第3トレンチ2層、2・3・5は第1トレンチ2層、4は第1トレンチ1層出土。6は表探品。

小碗B (7～12)

口径10cm内外のもの。11は見込みに粗雑な文様を描くが、菊であろうか。7、9～12が第1トレンチ2層、8が第3トレンチ2層の出土である。

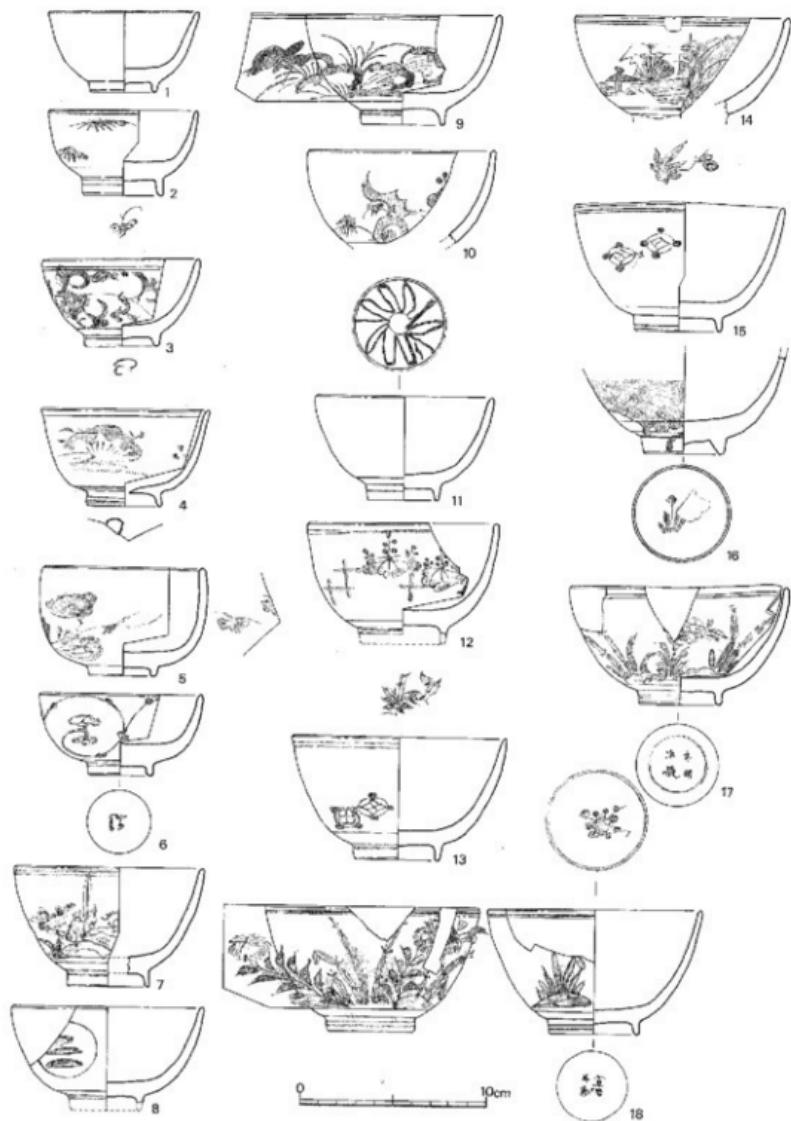
中碗A (13～15、17～21、22～25、30)

口径12cm内外のもの。20は外面に風景を描いているが、なだらかな山の稜線が日本的で親しみを感じさせる。13・15・17、18～20は第3トレンチ1層、21が第1トレンチ2層出土で、14は表探品である。

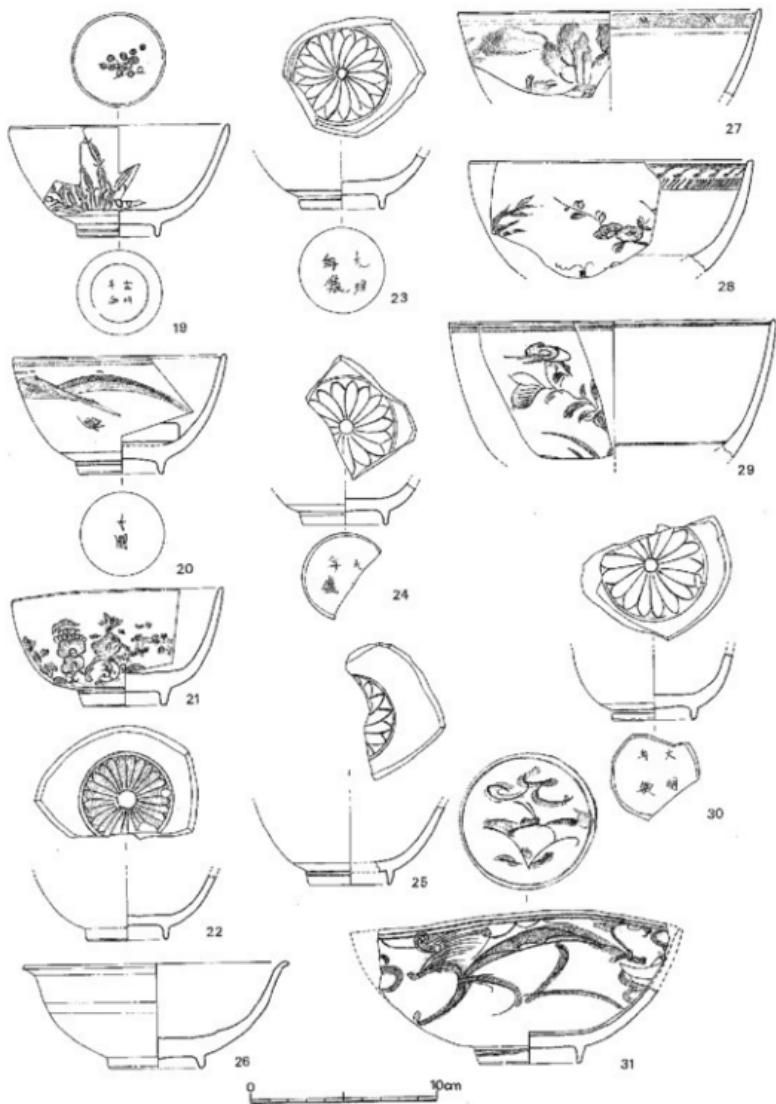
22～25、30は、見込みに菊の文様を描くが、花弁数が多いもの(22)と、少ないもの(23～25、30)に分けられる。出土地点も22は第3トレンチ2層、23～25、30は第1トレンチ2層に分かれれる。

大碗 (27～29、31～33)

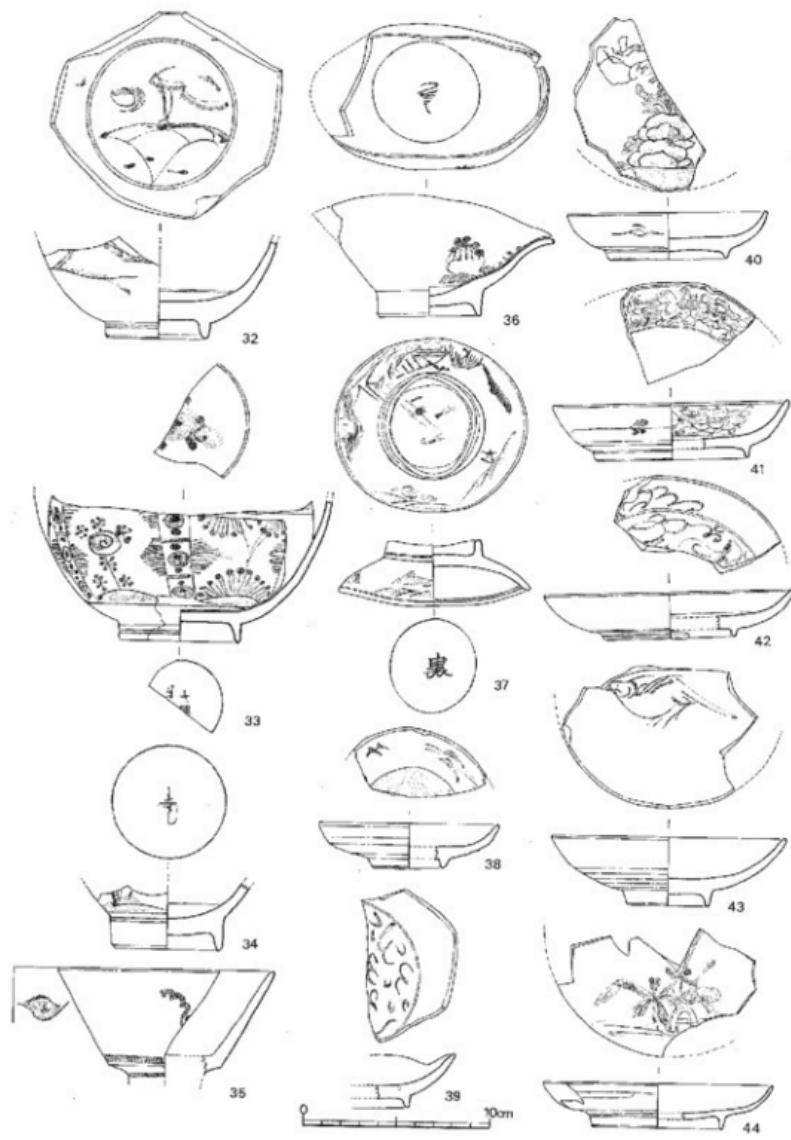
口径が15cm以上のもの。31・32は、雲龍見込荒磯文碗である。いずれも第3トレンチ1層の



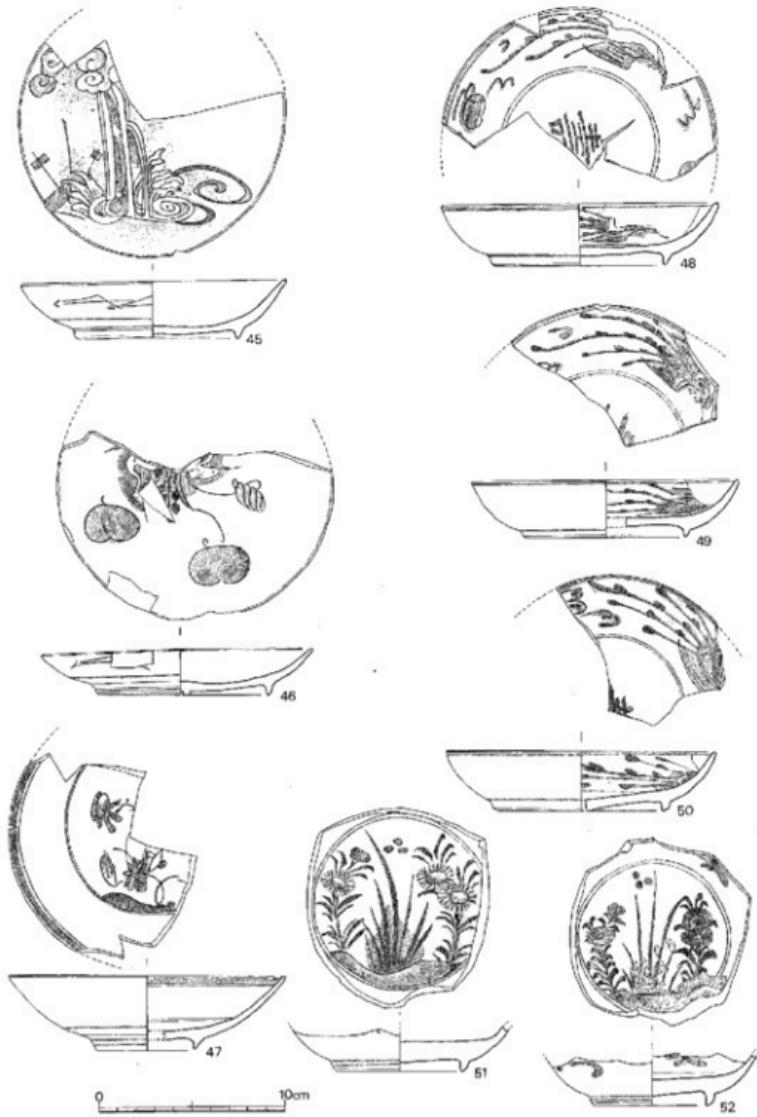
第61図 邊後ノ谷窯跡出土陶磁器① (1/3)



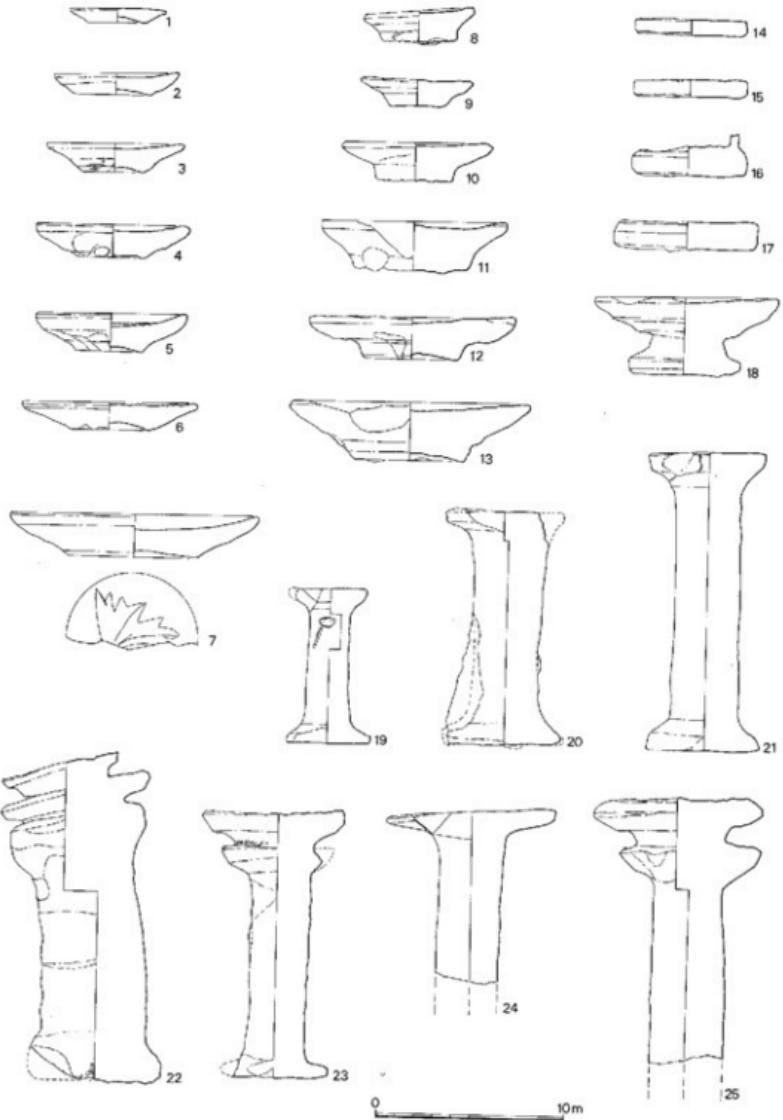
第62図 辺後ノ谷窯跡出土陶磁器② (1/3)



第63図 遺後ノ谷窯跡出土陶磁器③ (1 / 3)



第64図 辺後ノ谷窯跡出土陶磁器④ (1 / 3)



第65図 邊後ノ谷窯跡出土石道具 (1/3)

出土。27・28は第1トレンチ2層、29は第1トレンチ1層の出土。

高高台碗（34～36）

34～36は、高高台碗で、37はその蓋である。いずれも持ち込み品と思われる。

小皿B（38、40）

口径10～11cm内外のもの。38、40がある。38は、見込みに蛇ノ目釉剥ぎを施している。

中皿A（41～44）

口径が12～13cm内外のもの。41は牡丹唐草文、43はうずらの文様を描く。41～43は第1トレンチ2層。44は第3トレンチ2層の出土。

中皿B（45～50）

口径が14～15cm内外のもの。45は欠けている部分に水車があることである。46は水車、48～50は鳳凰文を描き見込みには「寿」の字がある。45～47は第3トレンチ2層、48～50は鳳凰文をもつものは第2トレンチ2層の出土である。51、52は第1トレンチ2層の出土である。

以上の染付碗・皿などの製品は、薄手で白い精良な胎土をもち、その文様をみても鳳凰文や牡丹唐草文等、ある程度鑑賞に堪えるような上手の文様を染付している。例えば有田の柿右衛門窯跡の染付文様との近似性も認められる。

③ 窯道具（第65図）

613点の窯道具の内25点を図示した。1～18はハマで、1～3、5・6の5点は磁質、その他は陶質である。14～17は円板形ハマである。大きさは口径5～13cmである。14・15は第1トレンチ2層、16は第2トレンチ3層、17・18は第3トレンチ4～8層出土。1～13は逆台形ハマである。口径は6～13cm内外である。1・11が第3トレンチ2層出土。2・4・6・8・10・12・13が第3トレンチ4～8層出土。3が第2トレンチ2層出土。9が第1トレンチ2層出土。

19～25はトチンである。高さが8～16cmのものを図示している。19・23・25が第3トレンチ4～8層出土。その他は第1トレンチ2層の出土である。

（3）まとめ

窯室をみてても窯の築き直し等も認められず、物原もそれ程厚い堆積状況を示さない。出土陶磁器の年代も、大橋康二氏より1660～1670年代を中心とする比較的短期間のまとまった良い資料との御教示を得た。染付雲龍見込荒巣文碗の特徴、そして見込五弁花文やコンニャク印版装飾法がみられないこと等が、その根拠であると思われる。

（村川）

註1 「大村記」 波佐見町教育委員会 1986

2 大橋康二「肥前古窯の変遷」「九州陶磁文化館研究紀要第1号」 九州陶磁文化館 1986

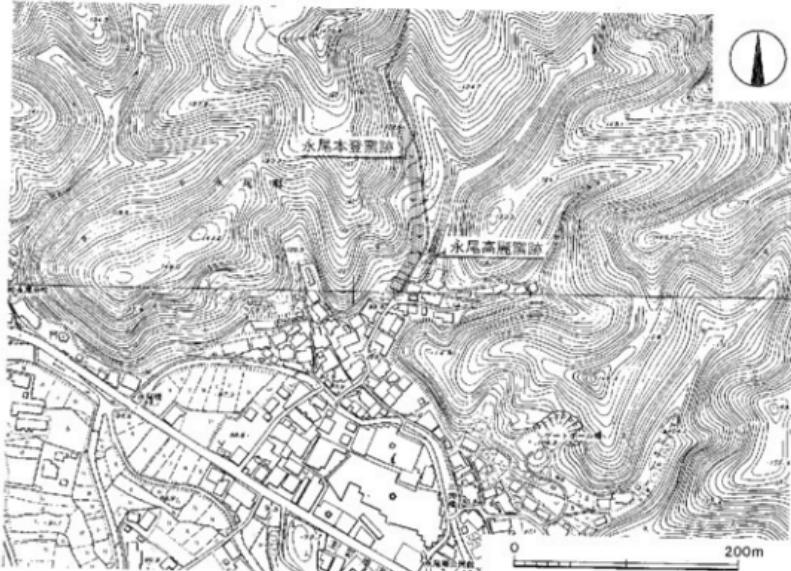
8. 永尾本登窯跡

(1) 調査概要

本窯跡は、町東端部の永尾郷に所在する。窯跡は、山裾を削って窯ノ谷とよばれる狭い谷を埋めて整地して築かれていたようだ。永尾の集落を見下ろす北側山麓の東裾に沿って南から北に湾曲しながらびる細長い階段状の傾斜地に立地する。現況は段々畑と南端が一部宅地として利用されている。畑の石垣には14箇所の窯壁が残っている。谷を挟んで南西側には永尾高麗窯跡があり、杉林のなかに3箇所ほど窯壁が認められる。その東側直上には、玉垣に「当山元建慶長四亥年」刻銘がみられる山神社が鎮座している。

調査は、地形測量によって窯体の規模を把握することと、発掘によって窯の遺構を確認することが主な目的であり、調査塀をA～Eトレンチの5箇所設定し、71m³を発掘した。

Aトレンチは、昭和25年（1950）頃まで存在した最終的な窯の焚口があったといわれている地点に設定したが、焚口とみなされる遺構は発見できなかった。ただ、5層が灰色の粘土質の土層であり、窯関係の何らかの遺構の残存とも考えられないこともないが、それを切った格好で西側に新しい落ち込みが形成されていた。



第66図 永尾本登窯跡周辺図 (1/5000)

Bトレンチは、Aトレンチ直上の宅地庭部分に設定し、焼成室の床面と火床が検出された。火床が二枚重複し、さらにその下に床面があるところから少なくとも三回は焼き直されたことが判明した。

Cトレンチは、段々畠が逆「く」字形に屈曲し、全体からみると中程の地点の状況をみるために設定した。その結果、数度築かれた床面が後世の搅乱によってかなり破壊された状況が確認された。C1トレンチでは、8層が床面で北側のレンガが奥壁で、それを埋め込んで4層の床面整地層が造られて、その火床が3層下の落ち込み部分である。C2トレンチでは、7層と3層が砂床の可能性をもち、6層は天井部の落ち込み層と推測される。3層は昭和期といわれている後世の搅乱によって、ズタズタに切られている。C2の南北断面の最下部に染付雲龍見込荒巻文鏡の破片がみられた。C3トレンチでは、岩盤の上に床面が形成され、東側が搅乱を受けている。3層が整地層、5層は床面の可能性をもつ。

Dトレンチは、窯尻の状況を調べるために最上部の窯壁が残存している地点に設定した。窯壁から6.5mの長さに焼成室が検出され、火床や通焰孔部分も観察された。北端には側溝と考えられる浅い溝が確認された。

Eトレンチは、物原の状況をみるために設定して2mほど発掘を行った。包含状況はまだ続いているが、崩落の危険があるので掘り下げを中止した。土層堆積は10層に細分することができたが、調査中にはI～IV層の大別層で遺物のとりあげを行った。I層（1層）は畠の表土層である。II層（2・3層）はトンバイや焼土を混在した赤橙色土層で、陶磁器を最も多く出土した。III層（4・5層）は炭化物を含むなど暗い褐色系の粘質土層で、この層まで瓦を含んでいた。IV層（6層）は暗褐色の砂質土層である。V層（7～9層）は7層がトンバイや焼土を多く含んだ赤橙色土層で、8・9層はザラザラした砂質の土層である。VI層（10層）は暗褐色の砂質土層である。9層と10層は最下層で狭いため、遺物とりあげが厳密にできなかった。したがってVI層の遺物としてとりあげた資料は実際は9層までを含んだ資料としておきたい。

また地形測量の結果、第1焼成室と推定されるBトレンチから窯尻がとらえられたDトレンチの窯室端まで水平全長155mを測ることが判明した。比高は25m余、14°の勾配をもつ。

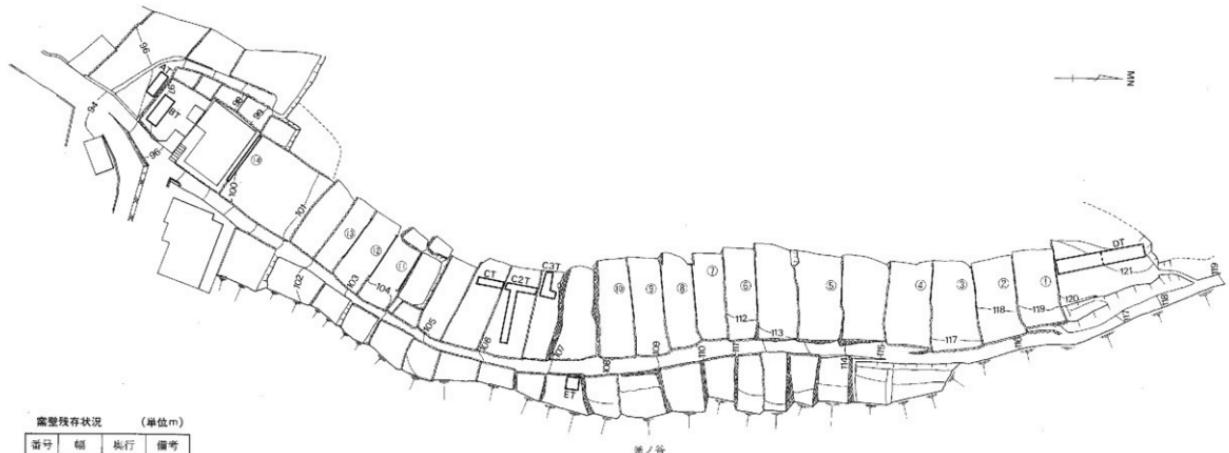
(2) 遺 物

今回調査では、陶磁器2913点、素焼の未製品184点、窯道具789点の計3886点の遺物が出土した。ここでは、陶磁器を先とりあげて次に窯道具の説明を行う。

陶磁器は染付を主体とし、白磁と陶器はわずかみられたにすぎない。調査においてEトレンチから層位別資料が得られたのでこれをとりあげ、次にその他のトレンチ、物原出土資料をみていきたい。

① Eトレンチ出土陶磁器（第71～74図）

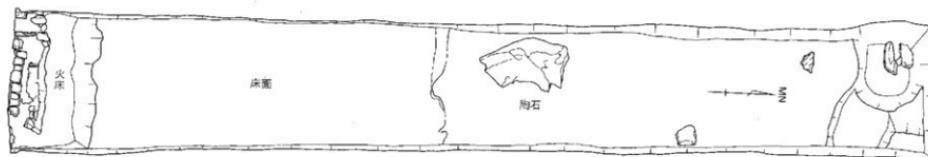
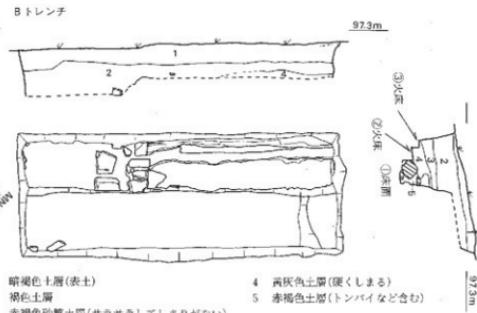
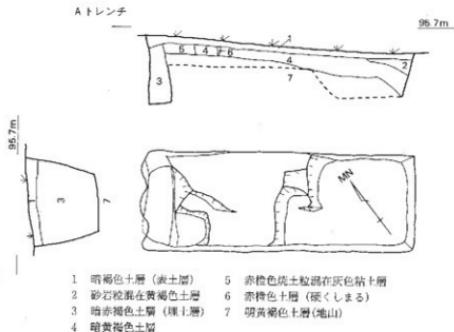
1～26はII層出土の染付（1～24）と白磁（25）および陶器（26）である。



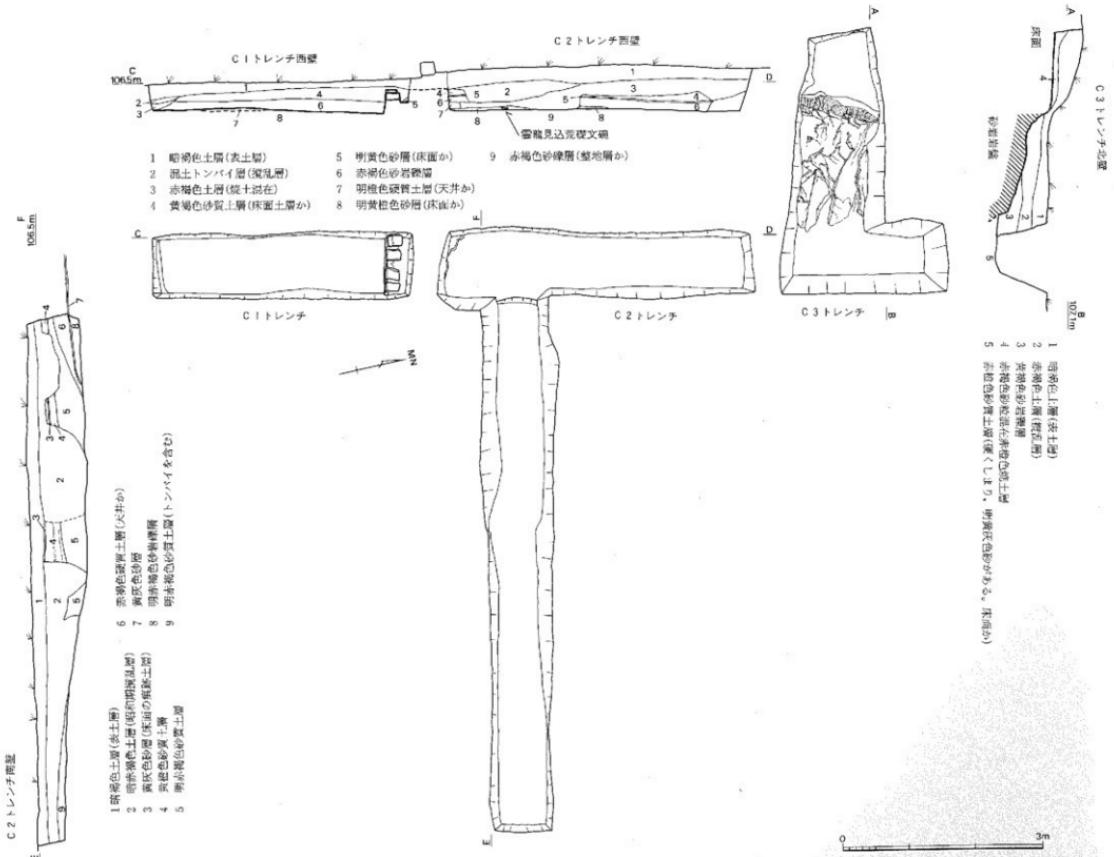
露盤残存状況 (単位m)

番号	幅	奥行	備考
①	6.57	6.45	
②	7.10	6.40	
③	7.30	7.05	
④	5.55		
⑤	5.6		
⑥	8.63	4.80	
⑦	2.90	4.50	
⑧	7.80	4.80	
⑨	8.20	5.00	
⑩	7.90		
⑪	6.83	5.00	
⑫	7.28	4.80	完存か
⑬	6.76		
⑭	8.50		完存

第67図 永尾本登窓跡地形測量図 (1/600)



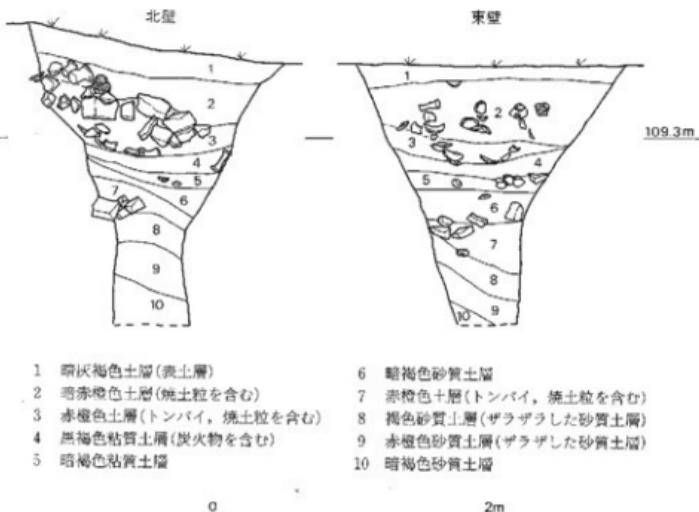
第68図 A・B・D レンチ実測図 (1/60)



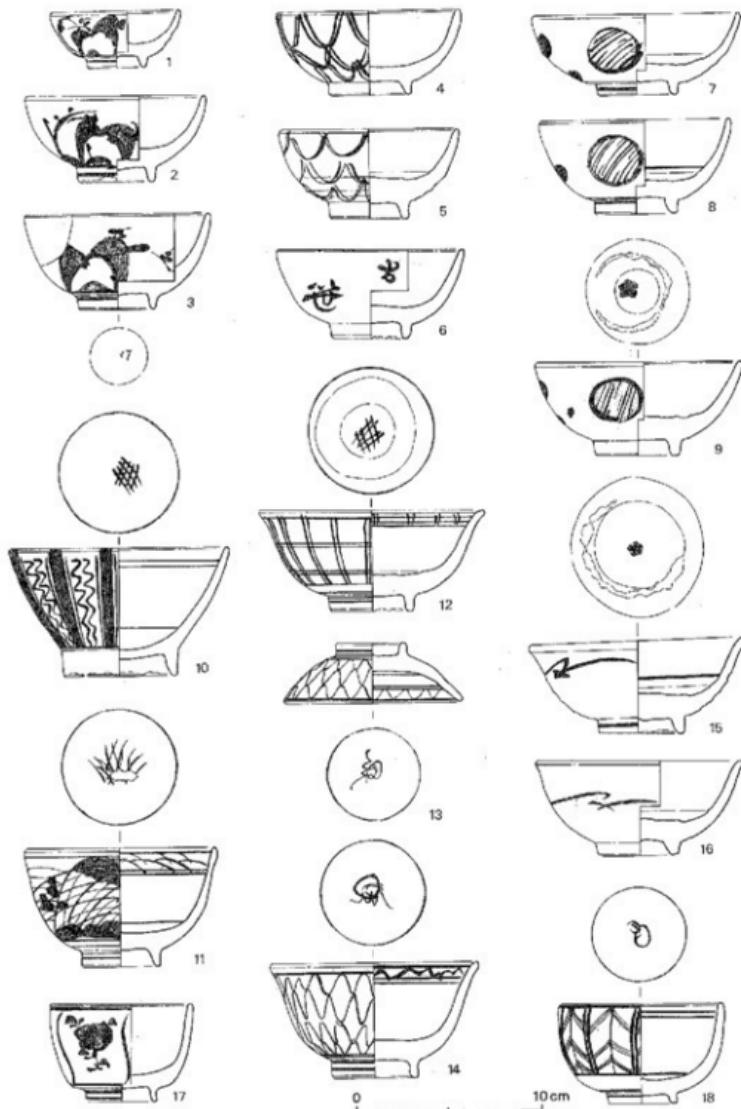
第69図 C レンチ実測図 (1/60)

1は体部に簡略な梅樹文を描く小碗である。丸形で浅い形状である。2～9は丸形の中碗である。2・3は簡略な梅樹文を体部に描くいわゆるくらわんか茶碗とである。3は高台内に意味不明の字文様を染付する。4・5は二重網目文を体部に描くが、5はさらに見込みを蛇ノ目釉剥ぎしている。6は4と同様の形状であるが、体部に「古箆口」と書かれている。7～9は体部に丸文を描く碗で見込みを蛇ノ目釉剥ぎし、9はさらにコンニャク五弁花を施す。10は広東形の中碗である。体部によろけ縞、見込みに菱格子を描く。11・12、14～16は端反形の中碗で、13はその蓋である。体部に、11は草原文、12は格子、14は網目、15・16は松葉を描き、12・15・16は見込みを蛇ノ目釉剥ぎする。見込み中央に、11は茅、12は菱格子、14は昆虫あるいは不明文字？を描き、15が小さなコンニャク版五弁花を施す。13は体部に網目と天井部に14と同じ文様を描き、14と対になる蓋である。17は筒形、18は丸形の小碗で、湯呑碗として使用されたものである。体部に、17は立浦草花文、18は矢羽文が描かれ、さらに18は見込みに文字様の文様を染付する。

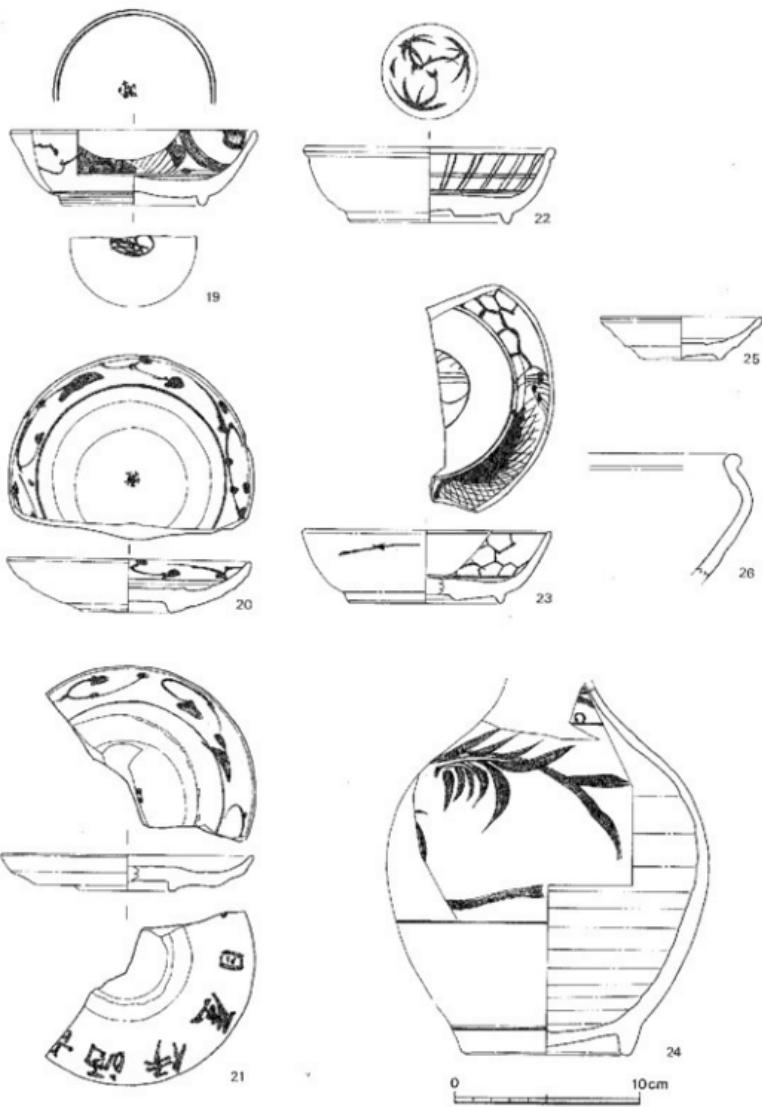
19～23は丸形の小皿である。19は内側面に菊、体部に龍唐草文を描く深皿で、見込みに小さなコンニャク判五弁花、底裏に渦巻の草書体を染付する。20・21は内側面に唐草文、見込み中央に小さなコンニャク判五弁花を染付し、蛇ノ目釉剥ぎを行う低い皿で、21は体部に「□酒伴屏目」を書かれ、底部は碁笥底ざみである。II層の丸皿は五弁花が小さいのが特徴である。



第70図 Eトレントンチ土層図 (1/40)



第71図 永尾本登窯跡出土陶磁器① (1 / 3)



第72図 永尾本登窯跡出土陶磁器② (1 / 3)

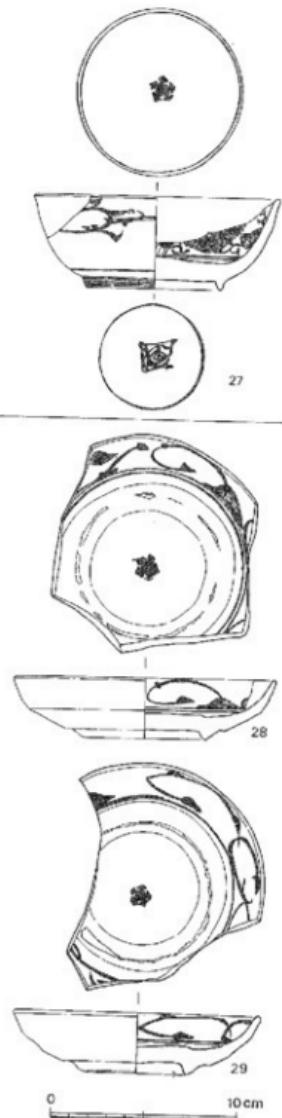
22・23は蛇ノ目凹形高台の深皿で、22は口縁が小さな玉縁をなし、内側面に格子、見込み中央に笹を描く。23は体部に折松葉？、内側面に茅文と亀甲文、見込み中央に山水文を描く。24は輪高台の大瓶で、酒徳利として使用されたものである。胴上部には笹と思われる文様が太い筆致で描かれている。25は見込みを蛇ノ目釉剥ぎする小皿である。26は暗赤褐色の鉄釉が掛かる陶器甕片である。他で生産された搬入品であろう。

27はII層から出土した深皿である。体部に龍唐草文、内側面に菊文、方形枠で「福」のくずし字を高台内に描き、見込み中央にコンニャク判五弁花を染付する。この他に小片であるため図示していないが、梅樹文丸碗、二重御目文丸碗、見込みを蛇ノ目釉剥ぎするコンニャク判丸文丸碗、広東碗、網目文端反碗、内側の口縁帯に四方禪文を染付する染付青磁丸碗、見込みを蛇ノ目釉剥ぎする唐草文小皿、徳利などが出土している。

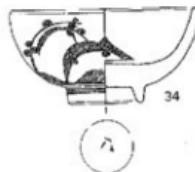
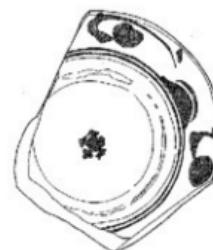
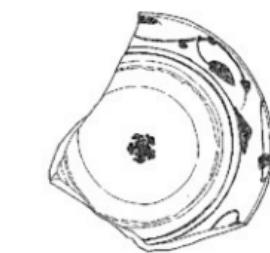
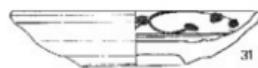
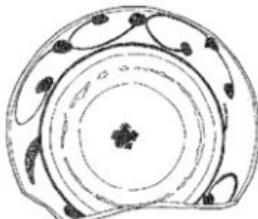
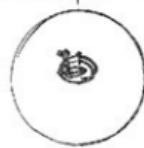
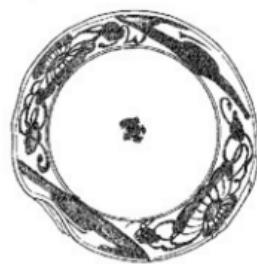
28・29はIV層から出土した丸形の小皿である。簡略な唐草文を内側面に描き、蛇ノ目釉剥ぎした見込み中央にはコンニャク判五弁花を染付している。この他に図示していないが、梅樹文丸碗、コンニャク判丸文丸碗、コンニャク判菊文丸碗、笹文深皿、徳利などが出土している。

30～33はV層出土した皿である。30は体部に龍唐草文、内側面に宝文、高台内に渦文状の字文様を描き、見込み中央にコンニャク判五弁花を染付している。31～33は簡略な唐草文を内側面に描き、蛇ノ目釉剥ぎした見込み中央にはコンニャク判五弁花を染付する。低い高台で、31は甚筋底ぎみである。この他に図示していないが、梅樹文丸碗、見込みを蛇ノ目釉剥ぎするコンニャク判丸文丸碗、網目文端反碗、笹文の蛇ノ目凹形高台深皿、徳利などが出土している。

34～37はVI層から出土した丸形の中碗と丸形の小皿である。34・35は簡略な梅樹文を体部に描くいわゆる「くらわんか茶碗」である。34は高台内に判読できな



第73図 水尾本登塚跡出土陶器③(1/3)



0 10 cm

第74図 永尾本澄窯跡出土陶磁器④ (1/3)

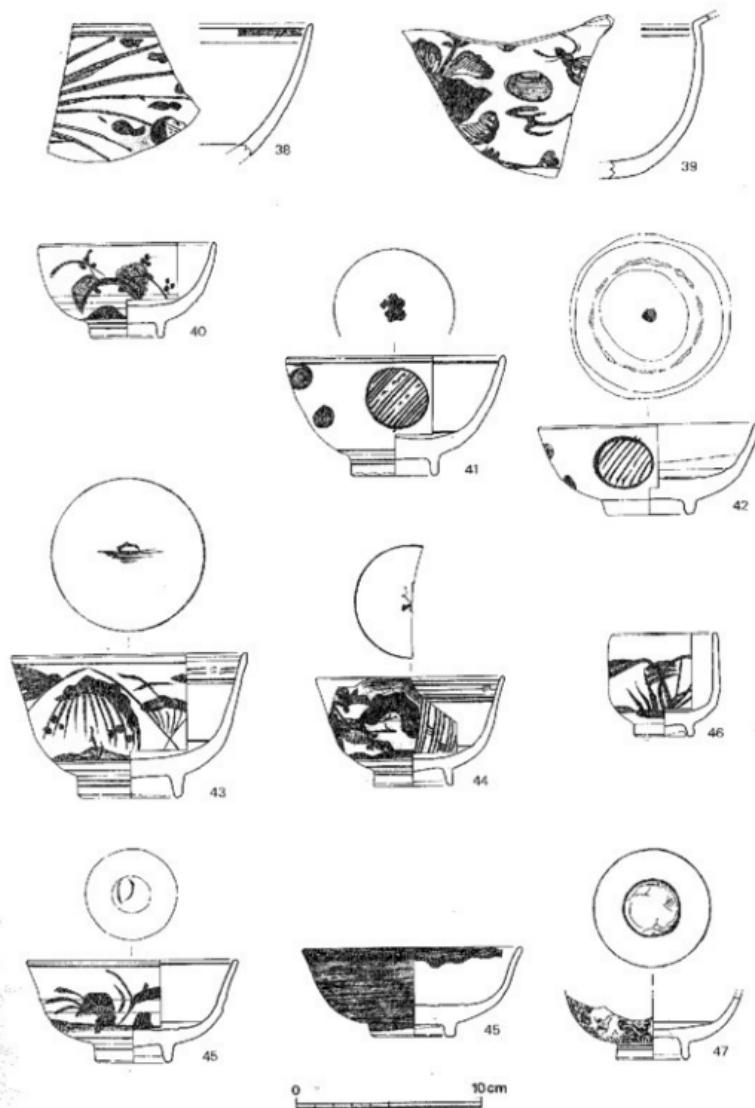
い字文様を染付している。36はやや小ぶりの小皿で、体部に龍唐草文、内側面に唐草文を描く。37は見込みを蛇ノ目釉刺ぎして内側面に唐草文を描く小皿片である。この他に図示していないが、徳利片が出土している。

以上のEトレント出土資料は、層位別にかかわらず基本的にほとんど差異のない内容をもっており、江戸後期～幕末（1750～1860年代）に包括される製品と考えられる。VI層が数量的に乏しく難点があるが、各器種の出現過程を層位別にみていくと、梅樹文丸碗はVI層～II層、コンニャク判丸文丸碗はV層～III層、網目文端反碗はV層～III層～II層、コンニャク判菊文丸碗はIV層、二重網目文丸碗はIII層～II層、広東碗はIII層～II層、染付青磁丸碗はIII層、手描き丸文丸碗と格子あるいは折松葉文端反碗はII層、蛇ノ目凹形高台皿と深皿はV層からという流れがとらえられる。このなかでV層から小片が1点出土している網目文端反碗を調査中の混入と解釈すれば、陶磁器の器種構成からII層～III層が大槀氏編年の中期（1780～1860年代）、IV層～VI層がIV期後半（1740～1780年代）頃に位置付けられ、II層は1820～1860年代、III層は1780～1820年代に細分できよう。II層出土資料は、量的に豊富で幕末の最盛期段階の製品と考えられる。また、II層出土の熔着資料には、二重網目文丸碗と広東碗、折松葉文端反碗と広東碗、手描き丸文丸碗と網目文端反碗などの碗と碗の組み合わせ、梅樹文丸碗と小さな見込みコンニャク五弁花の深皿、梅樹文丸碗と玉縁口縁の蛇ノ目凹形高台皿、広東碗と折松葉文端反碗と小さな見込みコンニャク五弁花の深皿と蛇ノ目釉刺ぎの唐草文丸皿などの碗と皿あるいは皿と皿の組み合わせがみられ、II層出土資料と熔着資料が符合しているのが分かる。これらは幕末の段階に同時焼成された資料としての評価ができる。

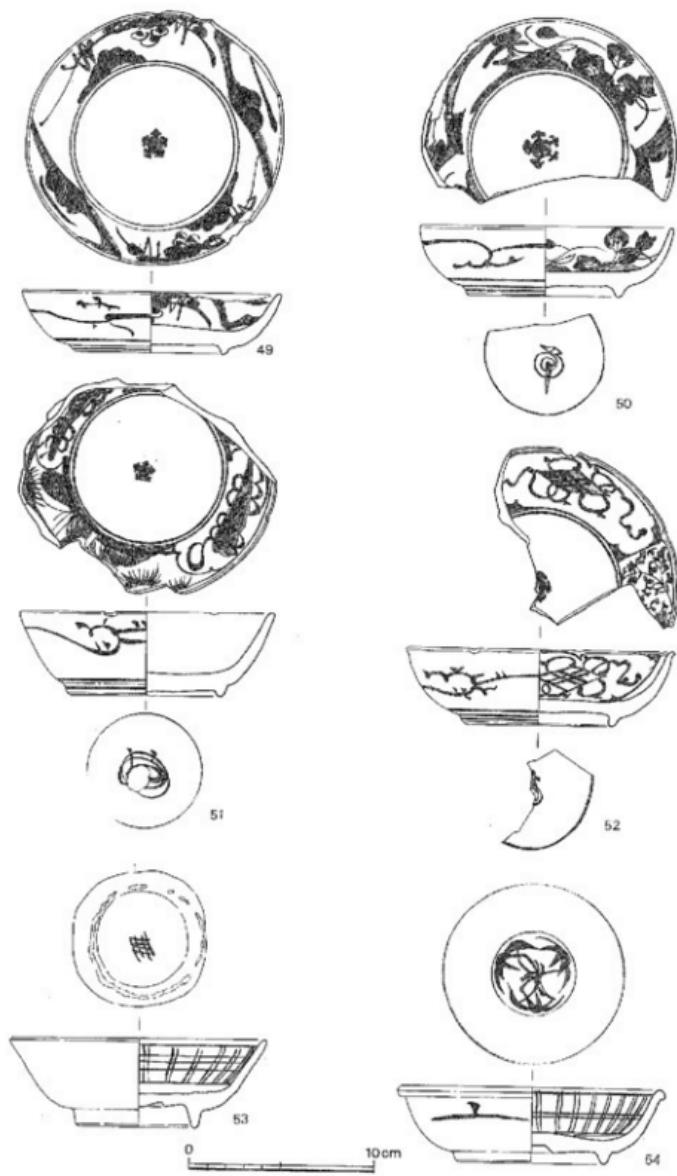
② その他の陶磁器（第75～77図）

38は体部に鳳凰を描く大碗で、39は牡丹に宝珠・蝶を描く折縁の鉢である。上手物の染付製品で17世紀後半に包括される。両者ともに物原出土品であるが、この他に露龍見込荒磯文大碗や牡丹唐草文鉢の破片が物原などから出土している。40～45・47は染付の中碗である。40は梅樹文、41はコンニャク判丸文、42は手描き丸文を染付する丸碗で、18～19世紀前半にかけての製品である。43～45は端反碗で、44・45は洋具須染付である。43は幕末（19世紀前半）、44・45は明治期（19世紀後半）の製品である。47は洋具須の型紙掲の丸碗で、いわゆる印判手の明治期（19世紀後半）の製品である。46は洋具須で蘭と思われる文様を描く小碗で、明治期（19世紀後半）の製品である。48は外側から内側上端に鉄鍍釉が掛かる端反碗で、見込みを蛇ノ目釉刺ぎし白土を塗っている。明治期（19世紀後半）の製品である。40・42・43は物原採集品。41はAトレント落ち込み出土。44・46・47・48はC2トレント2層出土。45はDトレント東側採集。

49～54は染付の小皿である。49・50は見込みにコンニャク判五弁花を染付ける丸形の皿で、内側面に49は葡萄文、50は草花文、体部に龍唐草文を描く。49は物原採集、50はAトレント2層出土。51・52は輪花の深皿である。体部に龍唐草文、底裏に渦巻の草書文様、見込みにコン



第75図 水尾本登窯跡出土陶磁器⑤ (1 / 3)



第76図 永尾本登窯跡出土陶磁器⑥ (1/3)

ニヤク判五弁花を染付し、内側面に51は宝文と笹、52は宝文と唐草文を描く。51はAトレンチ落ち込み出土。52はC2トレンチ5層出土。49～52のやや上手の皿は、18世紀中頃～後半代の製品であろう。53・54は内側面に格子文を描く蛇ノ目凹形高台皿である。53は、見込みを蛇ノ目釉刻ぎし中央に菱格子文を染付する。54は、口唇が玉縁で、体部に宝文の簡略化された文様？、見込みの圓線内に笹文を染付する。両者ともに物原探集品。幕末の19世紀前半期の製品であろう。

55・56はコンプラ瓶で、55は肩上端に「CHZA」と描かれている。両者ともに物原探集品である。

③ 窯道具 (第78・79)

ここではEトレンチ出土の窯道具をとりあげる。

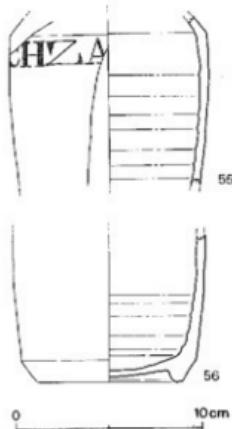
1～12はII層出土品である。1は陶質のトチンである。胴部に暗赤褐色の鉄釉が掛かる。2～5は陶質のシノである。3・4は無釉の素焼きで、2は胴部にぶい赤褐色の鉄釉が掛かり、5は胴部の上半に暗赤褐色の鉄釉が掛かる。6～12はハマである。11が磁質の他は陶質である。6は円板形ハマ、7～10は逆台形ハマ、11は足付ハマ、12はタコハマである。10の底部には糸切り離し痕が残り、12の上面と下面の平坦面を除いて布目痕が付く。

13～23はIII層出土品である。13は陶質のトチンで、胴部に暗赤褐色の鉄釉が掛かる。14は陶質のシノである。胴部に褐色の鉄釉が掛かる。15～22はハマである。19と22が磁質の他は陶質である。15は円板形ハマ、16～21は逆台形ハマ、22は足付ハマである。21の底部には糸切り離し痕が付いている。III層から磁質ハマは2点しか出土していない。23は陶質のチャツで、1点だけの出土である。口唇部に白土を塗りつけている。

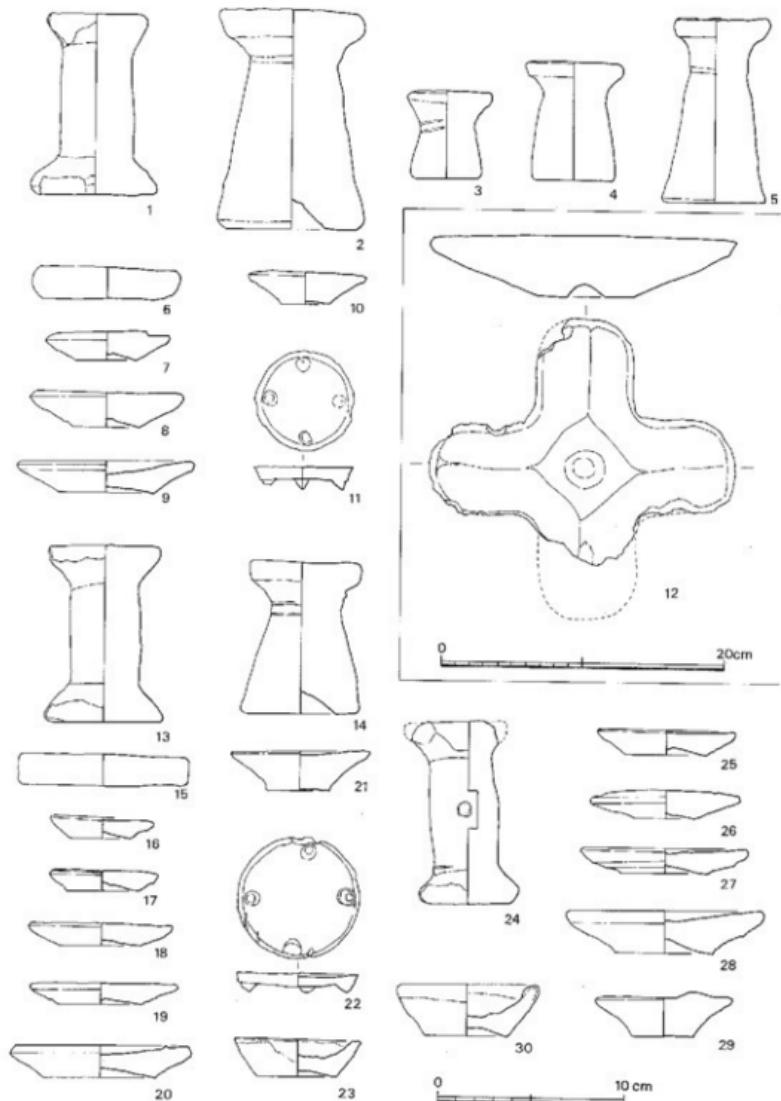
24～29はIV層出土品である。24は陶質のトチンである。胴部に暗赤褐色の鉄釉が掛かり、円形の刻印がみられる。25～29は陶質の逆台形ハマである。29の底部には糸切り離し痕が付いている。磁質ハマはIV層から1点出土したにすぎない。30は陶質のチャツである。口唇部に白土を塗りつけている。IV層から3点しか出土しておらず、数が少ない。

31～37はV層出土品である。31は陶質のトチンで、胴部に暗赤褐色の鉄釉が掛かる。32は陶質のシノである。胴部に暗赤褐色の鉄釉が掛かる。33～37はハマである。33～36は逆台形ハマである。33・34は底部の糸切り離し痕を消しているようである。35の体部には暗赤褐色釉が掛かる。37はタコハマで、上面と下面の平坦面を除いて布目痕が付き、暗赤褐色釉が掛かる。

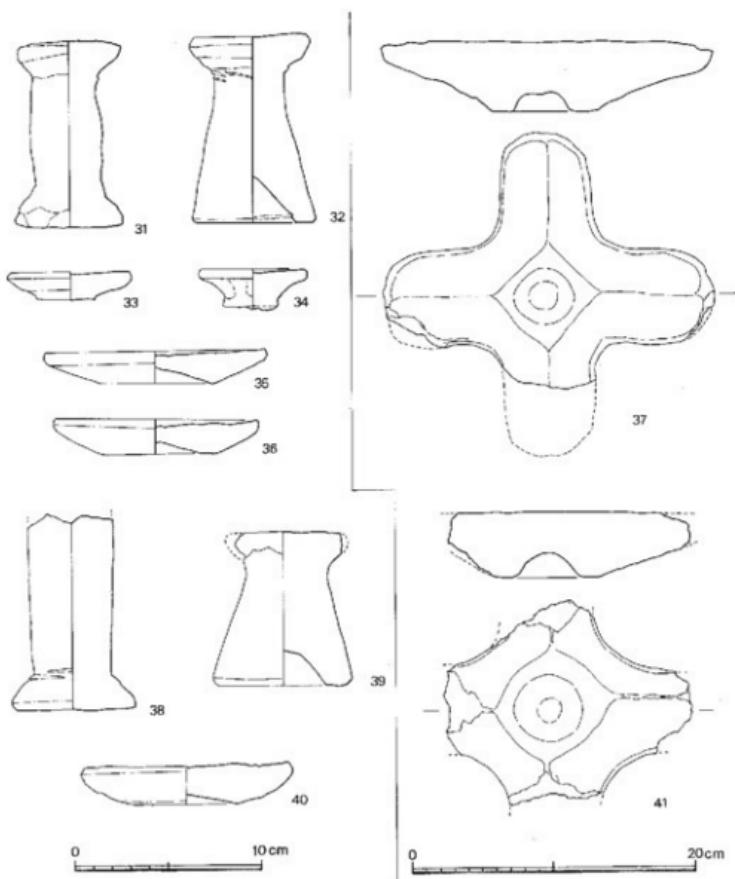
38～41はVI層出土品である。38は陶質のトチンで、胴部にぶい赤褐色の鉄釉が掛かる。39



第77図 永尾本登跡出土
陶磁器① (1/3)



第78図 永尾本登窯跡出土窯道具① (1/3 + 1/4)



第79図 永尾本登窯跡出土家道具② (1/3・1/4)

は陶質のシノで、胸部にぶい赤褐色の鉄袖が掛かる。40は陶質の逆台形ハマである。体部に極暗赤褐色の鉄袖が掛かる。41はタコハマで、上面と下面の平坦面を除いて布目痕が付き、洞部に暗赤褐色袖が掛かる。

以上の窯道具は、他の地点では磁質のハマが数多く出土しているのにかかわらず、Eトレングチでは足付ハマを除いて陶質ハマが大半を占めるのが特徴の一つとして指摘できる。これらの

窯道具は、大橋康二氏編年の第6グループ（18世紀後半～19世紀）の構成をもち、出土陶磁器の年代観とも一致する。足付ハマが田層から現れるのも時期的に興味深い。

(3) まとめ

本窯跡については、『大村記』、『皿山旧記』、『郷村記』の古文書に記録がみられる。元禄5年（1693）頃に編纂された『大村記』には、釜数（窯室数）13軒あって1箇年に9度焼き3978俵の製品を生産したことが記載してある。正徳6年（1716）頃に書かれたと思われる『皿山旧記』には、寛文6年（1666）に開窯されたことが記してある。天保15年（1844）に編纂された『郷村記』には、寛文6年（1666）に開窯されたこと、釜数（窯室数）29軒あって1箇年に6620俵の製品を生産したことが記述してある。

出土陶磁器は、碗と皿の日用食器類の染付磁器を中心に焼成され、17世紀後半～20世紀前半期にかけての製品がみられる。17世紀後半代の資料は、雲龍見込荒磯文碗、鳳凰文碗、牡丹唐草文鉢などの染付製品があり、1660年代には生産が行われていたことが分かる。したがって、『皿山旧記』と『郷村記』にある寛文6年（1666）開窯の記事は、遺物の内容から妥当な年代と推定される。また、陶磁器の年代的な構成では、大橋氏編年のIV期（1690～1780年代）の前半（1690～1740）段階の製品が減少しているようである。当期には生産が一定期間休止していた可能性が高い。最終的な廃窯は、聞き取りによって昭和25年（1950）頃といわれている。物原は、窯体の東側の約150m、5m～10mほどの比高をもつ谷に夥しい数の遺物が落ち込んだ状況がみられ、かなりの大量に生産していたことがうかがえる。

地形測量の結果、第1焼成室と推測される窯室が確認されたBトレンチから窯尻がとらえられたDトレンチの窯室端まで水平全長155mほどを測ることが明らかになった。『郷村記』には29軒（室）の釜（窯）数があったと記述しており、33軒の窯室があり160m以上長さをもつ中尾上登窯跡に次ぐ規模であることが確認された。併せて今回の調査によって『郷村記』の記載がかなり信頼性の高い内容であることが明確になり、幕末段階における窯場の実態を記録した重要な文献資料としての評価ができるようになった。

（宮崎崎）

註1 大橋康二「肥前陶磁の変遷と出土分布」『国内出土の肥前陶磁』 九州陶磁文化館 1982 他
大橋氏文献による。

2 『大村記』 波佐見町教育委員会 1986

3 太田新三郎『波佐見地方陶磁の探求』 波佐見町教育委員会 1962 所収

4 藤野保編『大村郷村記』 第3巻 国書刊行会 1982

9. 三股新登窯跡

(1) 調査概要

本窯跡は、町南東部の三股郷に所在する。三股集落から南東に分岐して木場山方面へ向かう小道の東側山麓に立地し、現況は段々畠と杉の植林地として利用されている。畠の石垣には11箇所の窯壁が残っている。

今回の調査では、窯跡周辺の地形測量を行って窯体の規模を確認するのが主要な目的であったが、併せて窯の製品の内容を調べるために物原からサンプルとしてコンテナ4箱分の遺物を表面採集した。

地形測量の結果、窯体は山麓線を西から東へ向かって(N-73°-E)のびていて。窯尻付近は窯を造成するために削られ、6mほど垂直に立ち上がりがっている。焚口と考えられる部分は道路によって削られているようだが、江戸時代後期～幕末の最盛期には水平全長100mほどの規模をもっていたことが推測される。また、窯体の傾斜は、現況の畠地から類推すると、比高約30m、勾配13°を測る。

物原は、窯体の南側に広がっており、西側からA地点、B地点、C地点と区別して遺物採取をおこなった。A地点は新釜川に向かって落ち込んだ崖になっている。コンプラ瓶などの幕末～明治期の遺物が多くみられる。B地点は中ほどの位置にあり、小高く盛り上がった状況がみられる。明治・大正期の「波佐見徳利」が目立った。C地点は幅狭の平坦地があり18世紀～19世紀代の染付碗や皿が多くみられた。

(2) 遺 物

今回調査において、陶磁器250点、窯道具18点、他2点の計270点の遺物を採取したが、ここでは陶磁器の代表的な製品をとりあげて説明を行いたい。

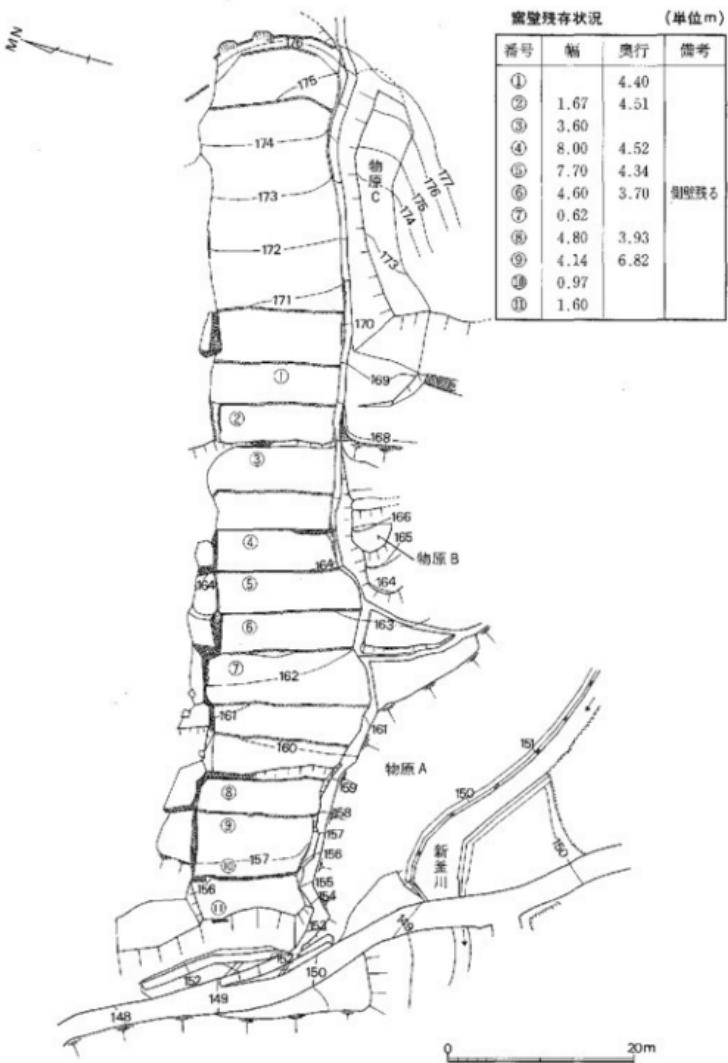
① 陶磁器 (第81～85図)

採取された資料は染付を主体とし、白磁が若干みられる。

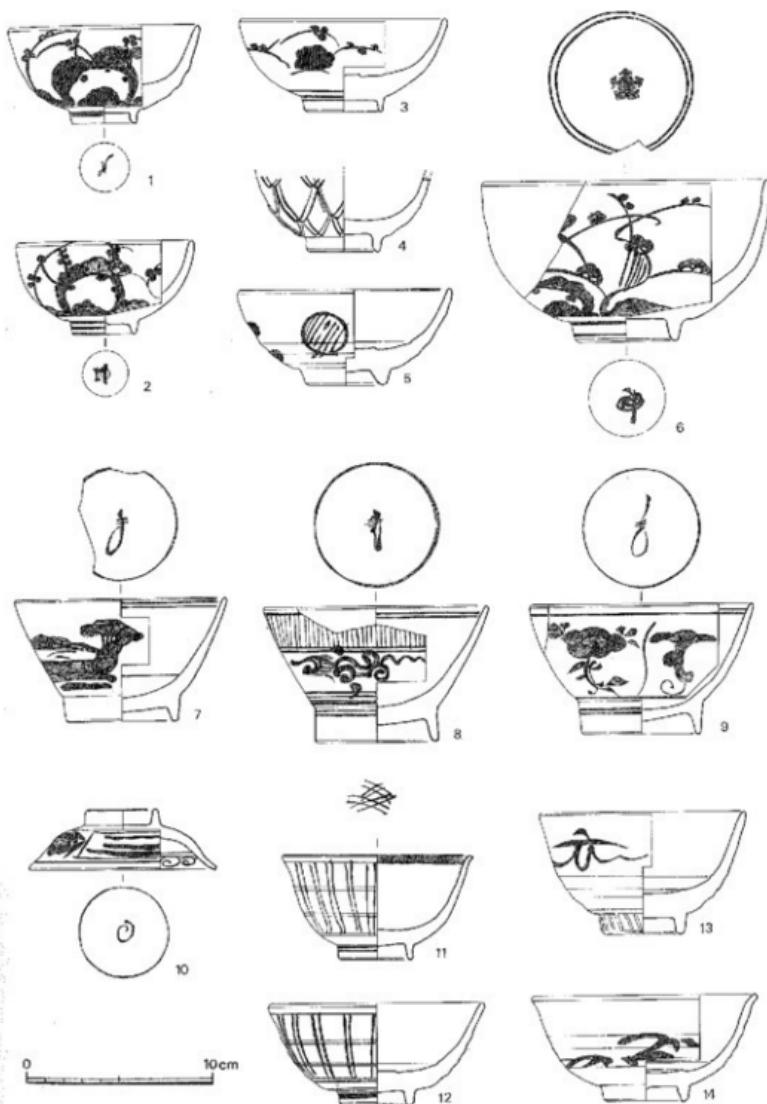
染付碗・蓋 (1～23)

1～5は丸形の中碗である。1～3は簡略な梅樹文を描くくらわんか茶碗で、3は見込みを蛇ノ目釉刺ぎしている。1・2は高台内に字文様を染付している。体部に4は二重網目文、5は手描き丸文を描くが、5はさらに見込みを蛇ノ目釉刺ぎしている。永尾本登窯跡の資料によれば、江戸後期～幕末(1750年～1860年代)に包括される。6は簡略な梅樹文を描く丸形の大碗である。見込み圍線内にコンニャク判五弁花と底裏に渦状の不明文字を染付する。18世紀後半代の製品であろう。1～3、6は物原C地点、4・5は物原A地点採集品。

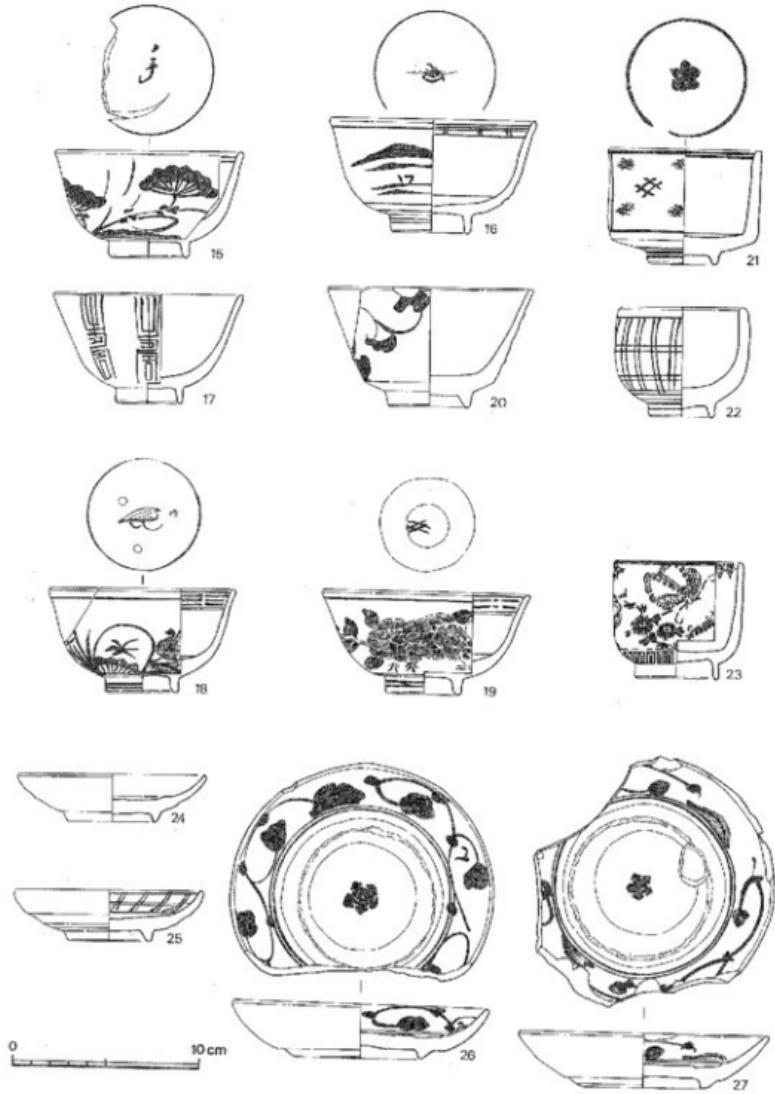
7～9は高高台の広東碗である。体部に7が山水文、8が簡略な龍文と縞文、9が立涌草花文を描き、見込み圍線内に「寿」と思われる草書文字を染付している。1780年～1860年代の製



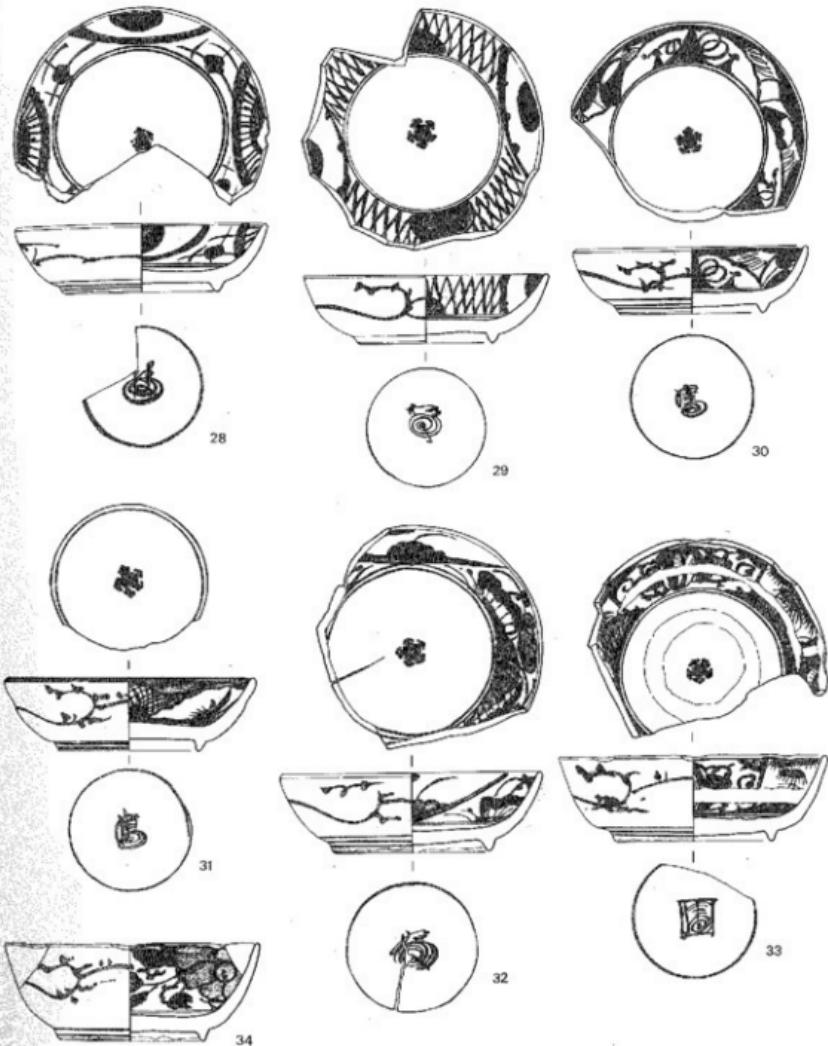
第80図 三段新蓋窓跡地形測量図 (1/600)



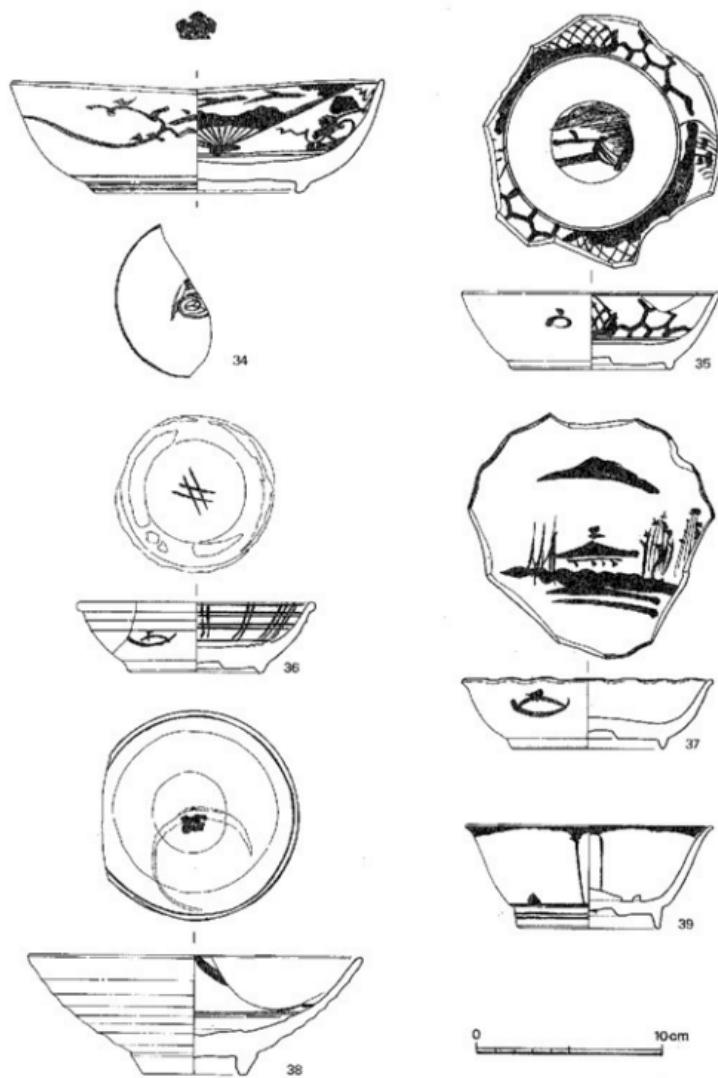
第81図 三股新登窯跡出土陶磁器① (1/3)



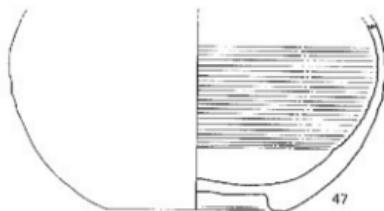
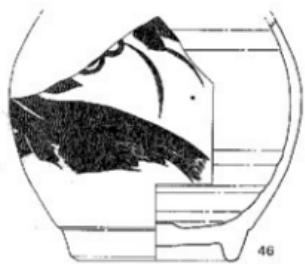
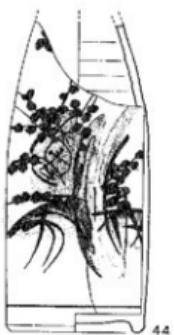
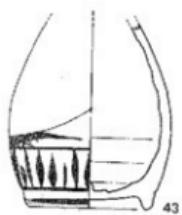
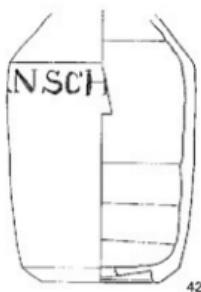
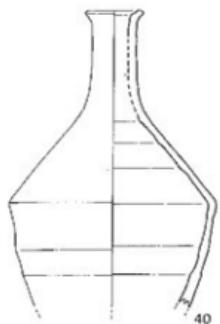
第82図 三段新窯跡出土陶磁器② (1 / 3)



第83図 三股新窯跡出土陶磁器③ (1 / 3)



第84図 三股新登黒跡出土陶磁器④ (1/3)



0 10cm

第85図 三股新登窯跡出土陶磁器⑤ (1 / 3)

品である。7・8が物原A地点、9が物原C地点の採集。

10は蓋付碗の蓋である。体部に折枝草花文と台形枠内に山水文？、内側に渦文帯、天井部圓線内に「」字状の文様を染付する。物原C地点の採集。

11～19は端反形の中碗である。11・12は体部に格子、さらに11は見込みに菱格子文を描き、12は見込みを蛇ノ目釉剥ぎしている。13・14は体部にかなり略された宝文（13）、筈文（14）を描き、見込みを蛇ノ目釉剥ぎしている。13の高台には削り痕が残る。体部に15は松樹文、16は山水文を描き、見込み圓線内に「寿」と思われる草書文字を染付している。17は福寿文を体部に染付する。これらの端反碗は、1820年～1860年代の製品である。13・15は物原A地点、11・12・14・16・17は物原C地点の採集品。18は体部に洋具須で草花文、見込み圓線内に宝文？を描き、三足ハマとおもわれる痕が付く。19は洋具須で花文を型紙摺りし、蛇ノ目釉剥ぎした見込み中央に井干文を描く。18・19は明治期の製品で、物原A地点採集品。

20は反り形の中碗である。花唐草に蝶の文様を体部に描く。江戸後期～幕末（1750年～1860年代）の資料であろう。物原B地点採集。

21～23は湯呑み茶碗に使用された小形碗である。21は井干と菱格子文を体部に描き、見込み圓線内にコンニャク判五弁花を染付する筒形碗である。22は内の深い丸形碗で、体部に格子文を描く。23は洋具須で花と蝶を型紙摺りする内の深い丸形碗である。21は18世紀後半～1810年代、22は1820年～1860年代、23は明治期の製品である。21と23は物原A地点、22は物原C地点の採集品。

白磁皿（24）

24は丸形の小形皿である。見込みを蛇ノ目釉剥ぎしている。幕末の製品であろうか。物原C地点の採集品。

染付皿（25～37）

25は見込みを蛇ノ目釉剥ぎする丸形の小形皿である。内側面に格子文を描く。24とは同形態で、幕末（1820年～1860年代）の製品であろう。物原C地点採集。

26・27は見込みを蛇ノ目釉剥ぎする丸形の小形皿で、内側面に花唐草文、見込み中央にコンニャク判五弁花を施す。高台は低く、27は基部底状をなす。江戸後期～幕末の資料である。26は物原C地点、27は物原B地点採集。

28～33は比較的丁寧な作りの丸形の小皿で、32～34は器高4cm以上の深皿のタイプである。体部に龍唐草文、内側面に菊文・網目文・網干文・宝文・雪持ち筈文・牡丹唐草文、見込み中央にコンニャク判五弁花、底裏に渦福の草書文字を34を除いて染付している。31は口唇に鉄錆を施し、33・34は口唇が輪花状をなす。なお、33は内側面と見込みが熔着して釉が剥げ落ちている。これらは18世紀後半に主に焼成された製品であろう。すべて物原C地点の採集品である。

34は深皿タイプの中皿で、体部には龍唐草文、内側面に扇文・唐草文、見込み中央にコンニャ

ク判五弁花、底裏に満幅の草書文字を染付する。18世紀後半代の製品であろう。物原C地点出土。

35～37は蛇ノ目凹形高台の中鉢である。35は内側面に龜甲文と草花文、見込み囲線内に山水文？を描く。36は口唇が玉縁状をなし、内側面に格子文、見込みは蛇ノ目釉剥ぎし中央に格子文を染付する。37は口縁が輪花状をなし、口唇に鉄錆を塗る。見込みには山水東屋文を描いている。三者ともに体部には宝文と思われる文様を染付する。18世紀後半代の製品であろう。すべて物原A地点採集。

染付鉢（38・39）

38は見込みを蛇ノ目釉剥ぎする浅い丸形の中鉢である。内側面に太目の筆による染付と見込み中央にコンニャク判五弁花を施す。39は蛇ノ目凹形高台で端反口縁の小鉢である。枯梗文を染付している。38は江戸後期（18世紀後半代）、39は幕末（19世紀前半代）の製品であろう。両者ともに物原C地点採集。

白磁瓶（40）

40は肩部で強く屈曲する鶴頸の瓶で、形態的にコンプラ瓶に似るが、胴部がすぼまる形状をもつ。幕末～明治期の製品であろう。物原A地点採集。

染付瓶（41～46）

41・42はコンプラ瓶である。41は「S H Z A K Y」、42は「N S C H」と描いている。幕末の製品である。43は辯蓮形の小瓶で区画線内にかなり略された蓮弁文と植物文？を染付している。44～46は洋具風の染付製品である。44は梅樹文を描く燐徳利、45・46は太い筆致で植物文を力強く描くいわゆる波佐見徳利である。44～46は明治～大正期の製品である。41～43は物原A地点、44～46は物原B地点採集。

白磁壺（47）

47は全形が残っていないが、球形の胴部で無頭壺になるものであろうか。内面は露胎で、細かいロクロ目が付く。物原B地点採集。明治～大正期の製品であろう。

（3）まとめ

本窯跡については、『郷村記』のなかに元和年中（1615～1623）に本島（東島）久兵衛によつて開窯され、釜数（窯室数）が21軒あったことが記載されている。

本窯の創興については、今回採集された資料には17世紀前半に遡るものはみられず、18世紀以降の製品ばかりであり、開窯年代については検討を要すると思われる。

測量の結果、窯体は最盛期には100mほどの規模をもっていたことが明らかになった。また窯の石垣には、11箇所の窯壁が残存しており、窯壁や石垣の間隔をみると、『郷村記』における釜数21軒は妥当な数値と考えられる。窯尻付近の物原A地点では江戸後期から幕末の製品がほとんどで、窯中ほどの物原B地点には明治・大正期の製品が主体となるところから、明治3年

(1870) の皿山役所が廃止され藩の後ろ盾が無くなった後には、窯が中ほどまで縮小して操業されていたことが推測される。なお本窯は、近隣の方にお聞きしたところによると大正期まで操業していたことのことである。

(宮崎)

註1 藤野保編『大村郷村記』第3巻 国書刊行会 1982

なおこの文献では、新登並敷拾壹軒としてあり、貳拾壹軒の貳が抜けている。波佐見町教育委員会保管の『郷村記 上波佐見村』天保15年調製の古文書には貳拾壹軒と記されている。

2 太田新三郎氏は寺過去帳を調べ、三段に日蓮宗で元禄4年(1691)没の東島久兵衛がいること、本窯の付近に東島姓が居住して製陶を続けていたことをあげ、本島でなく東島としている。

太田新三郎『波佐見地方陶祖の探求』 波佐見町教育委員会 1962

3 『皿山旧記』には、東島久兵衛が寛文7年(1667)に木場山窯を開窯したとあり、出土遺物に17世紀前半に遡る資料が無いことや1691年の没年から鑑みて、元和年中は天和年中(1681~1683)の誤記の可能性が高い。下記の文献では天和2年(1682)と記している。今後物原の発掘調査を実施する機会があれば結論がでると思われる。

中島浩・永竹威『肥前陶磁史』 名著出版 1984

4 太田新三郎氏は、前掲の文献のなかで明治末まで使用してきたとされている。

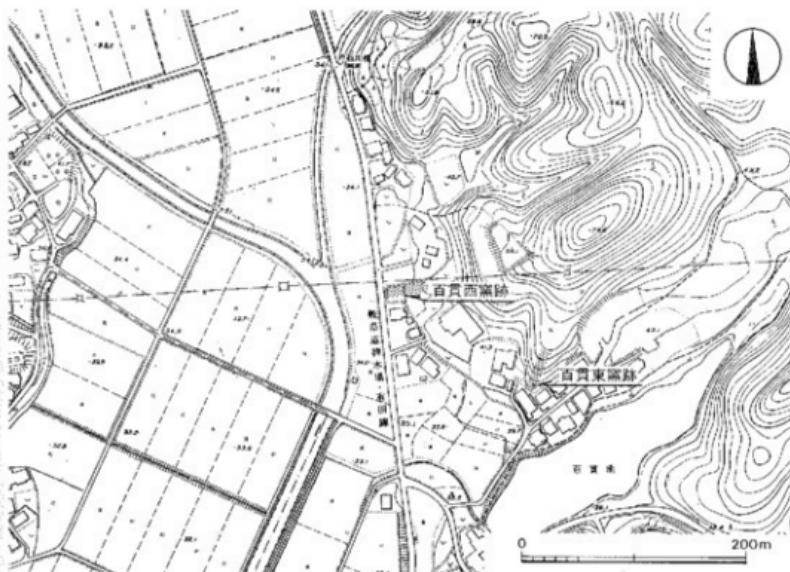
10. 百貫西窯跡

(1) 調査概要

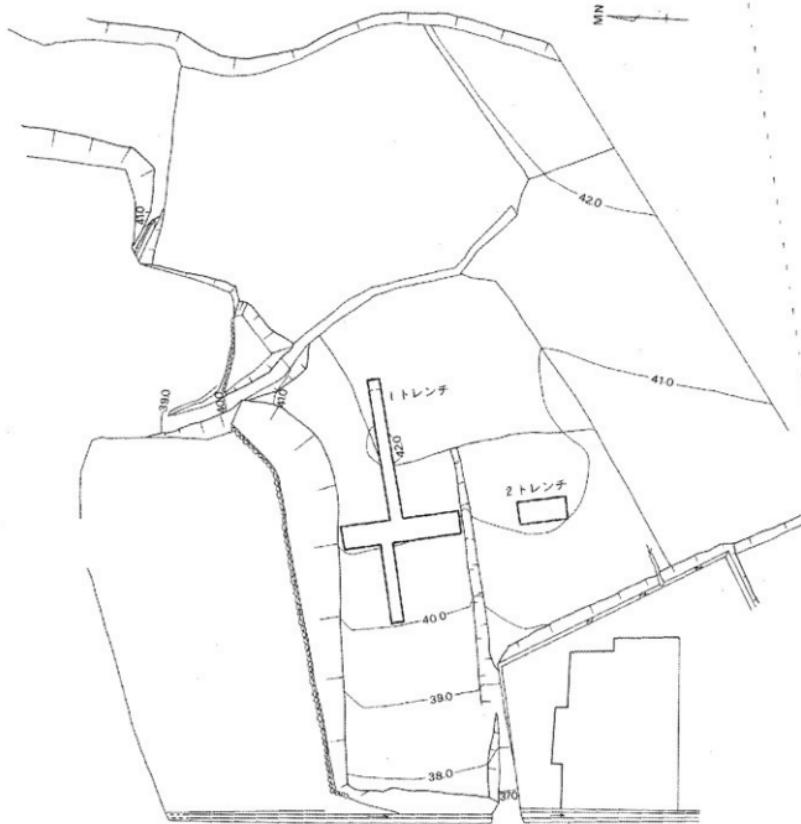
町の西側を南北に流れる村木川に沿って狭長な平野が形成されるが、この平野に向かって東方より緩やかに傾斜する丘陵と水田の交わる地点に窯跡は存在する。現存する窯跡の西端は県道柳木場・有田線で切斷されており、断面に窯室の床面が露出している。昭和50年に農業基盤整備事業の土取り場の対象となり試掘が行われ、その後窯跡と物原は町有地となった。

調査区は、窯跡に $2\text{m} \times 10\text{m}$ (第1トレンチ中央部) を、物原に $2\text{m} \times 5\text{m}$ (第2トレンチ) を設定したが、窯室の検出状況により第1トレンチの東側に $1\text{m} \times 12\text{m}$ 、西側に $1\text{m} \times 7\text{m}$ の拡張区を設定して発掘を行った。

まず第1トレンチ中央部では10cm程の厚さの表土を剥いだ段階で窯室の床面が検出され素焼きの皿等が残っていたが、この床面の西側は後世の搅乱を受けており、その部分を掘り下げてその下に残存する恐らく始原期の窯室の床面と思われる面を確認した。さらに第1トレンチ東側拡張区では4面の床面が確認され、少なくとも4回は窯が築造されたことが判明した。第88図の東側拡張区の断面をみると分かるように、3番目と4番目の床面は、ほぼ同レベルである

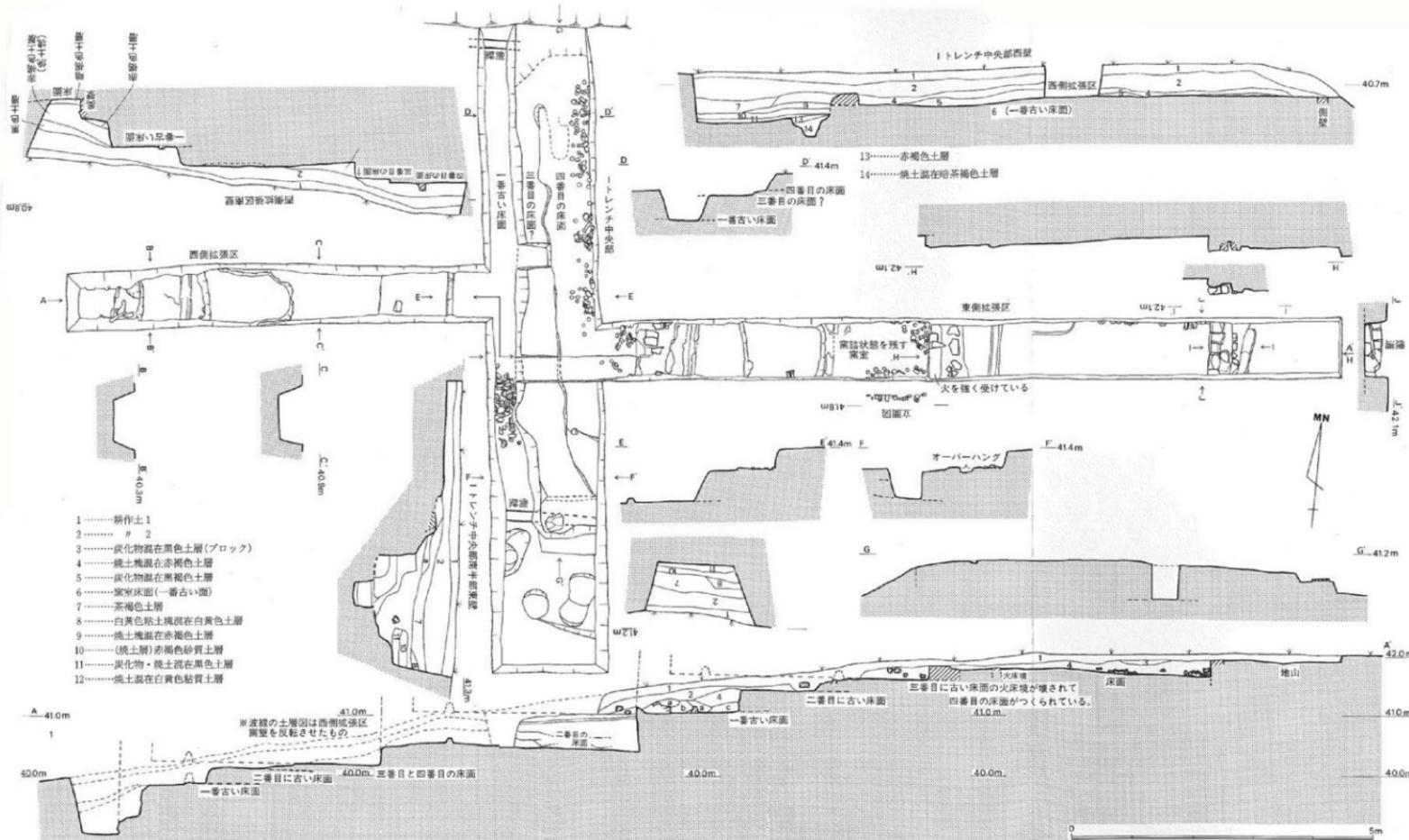


第86図 百貫西窯跡周辺図 (1/5000)



一般道路木場・有田線

第87図 西東西霧地形測量図 (1/400)

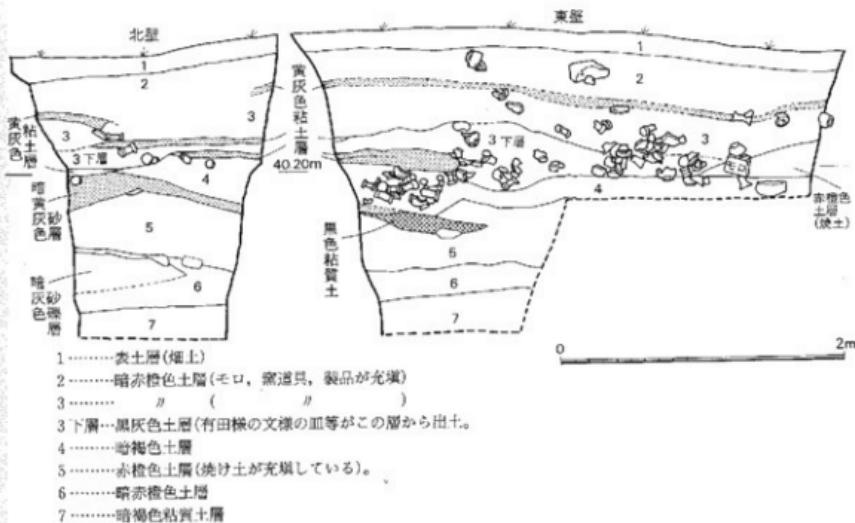


第88図 第1トレンチ実測図 (1/40)

が、3番目の床面の火床壇が壊されて4番目の床面の火床壇が造られていることから、時期差を確認した。

窯室の規模は、第1トレンチの最下面の始原期の窯室で幅が7.63m、奥行きが4.34mである。また、窯尻は町有地よりも8.5mほど東にのびていることが判った。

第2トレンチでは、物原の良好な包含状況が確認され、土壤の色調や黄灰色の粘質土や木材の炭化物、窯を築き直した時に出た窯壁等の廃棄物によって7層に分けることができる。なお3層を3層と3層下層に分層しているので文化層としては8層に分けられる。2層～3層では陶胎染付碗、3層下層では有田の椋呂谷窯跡と同じ染付の皿、5層では唐草文の磁器碗、6層～7層では陶胎染付碗などが出土した。2層～3層にまたがる陶胎染付碗も層毎に文様等に明らかな変化が看取され、6層～7層においても同様であった。つまり、層毎に遺物の型式変化をとらえるという好条件をもっており、今回の3年にわたって行った9箇所の窯跡の発掘調査においても、物原の土層の堆積状況等、一番良い状態を残している窯跡と言える。なお、陶胎染付については、江永窯跡などの三川内系統の影響が強いと考えられ、波佐見古窯跡群のなかでは個性をもった窯と言えよう。



第89図 第2トレンチ土層図 (1/40)

(2) 遺物

今回の調査における出土遺物の総数は、14,578点にのぼる(表2)。その中で第2トレンチでの層毎の出土点数の傾向をみて気づくのは、1層から4層までの出土点数の多さであろう。その中でも、3層下層の3,009点が一番多い。なお、5層から7層については、出土点数が減ったこともあり、1層から4層の半分の面積しか発掘していないが、単純に5層から7層の層毎の出土点数を2倍してもその傾向は首肯されるところであろう。

以下に東側拡張区及び第2トレンチの2層から7層の製品の特徴をみていただきたいが、先に調査概要のところでも述べたように、層毎に型式変化がとらえられ、例えば、第2トレンチの2層から4層の陶胎染付の碗は家屋を中心としていた松等の風景を描いていて、4層ではしっかり描いていた家(第93図47)が、3層(第90図12)、2層(第90図3)と上層にいくに従い簡略化されていくという傾向が読み取られるので、下層からみていった方がわかり易い面はあるが、今回は便宜上上層から下層へと進めていただきたい。

① 第1トレンチ東側拡張区出土陶磁器(第90図)

1・2は、東側拡張区の床面にハマにのせたままの窯詰めの状態で残っていたものである。この窯における最終末の製品といえよう。口縁の口径が、肩部の最大径よりも若干すばまる器形をしている。口径96mmを測る。口縁の外側に花弁をあしらっている。

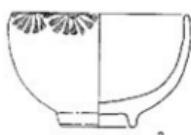
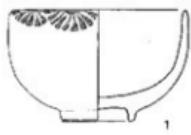
② 第2トレンチ2層出土陶磁器(第90図)

3~7は陶胎染付の碗である。8は無文様の碗。9は製品の焼成状況をみるために穿孔を施した所謂「あげてみ」と呼ばれる碗である。10は外側に竹籠を描き、裏底に「大明年製」の銘をもつ碗である。11は仏花瓶である。胴下半に鉄軸を施し、上半部は灰色釉をかける。

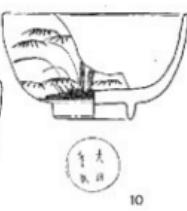
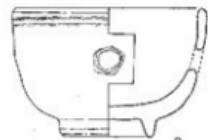
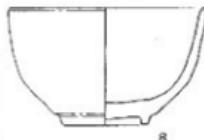
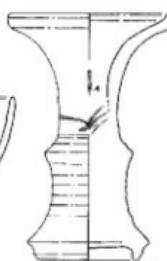
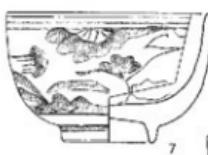
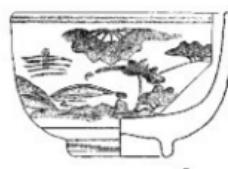
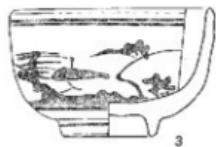
表2 百貫西窯跡出土遺物内訳

出土地区・層位	陶磁器	窯道具	その他	計
1トレンチ1層	564	132	素焼47	742
2層	192	58	3	253
物原	499	173	18次2瓦3	701
東拡	187	206	1	394
床七	76	70	164	310
床下	59	11		70
溝	1			1
床埋黄褐色	10			10
下層床面	84	27		111
物原下	135	37	素焼8	180
2トレンチ1層	2,320	27	24石4瓦1	2,416
2層	1,940	196	139石1	2,226
3層	1,485	151	174	1,809
3層下層	2,728	207	73木炭3	3,009
4層	1,453	151	16	1,565
5層	276	7	21	303
6層	39	95	4	138
7層	137	18	14	169
物原表面採集	110	3	1	114
表面採集	1			1
合計	12,296	1,515	素焼707(767)	14,578

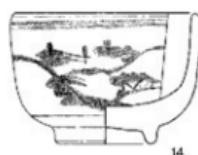
1 トレンチ東側拡張区(窯跡状態のもの、本窯跡最終末の製品)



2 トレンチ2層



2 トレンチ3層



第90図 百貫西窯跡出土陶磁器① (1 / 3)



2トレンチ3層

2トレンチ3層下層

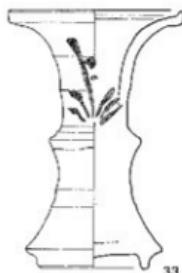
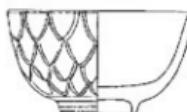


第91図 百貫西窯跡出土陶磁器② (1 / 3)

2 トレンチ 3層下層



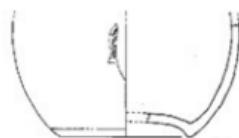
28



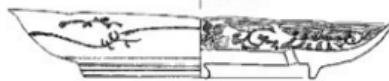
33



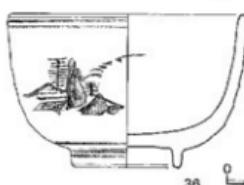
34



35

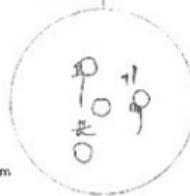


37



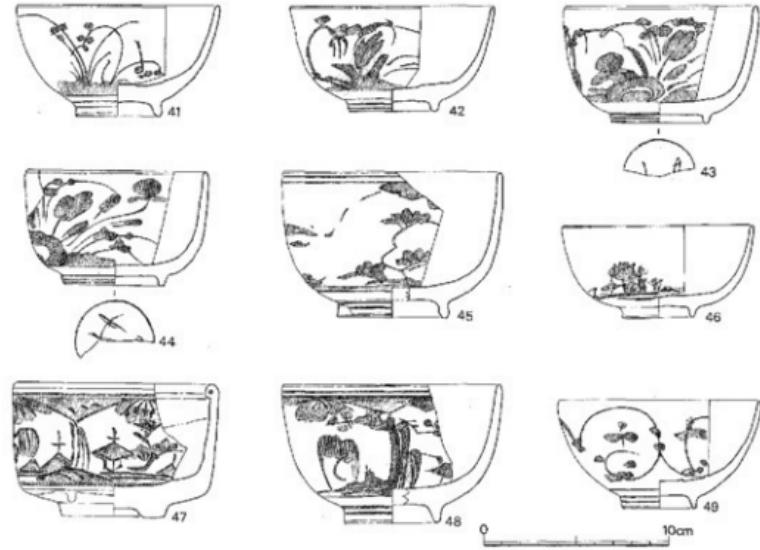
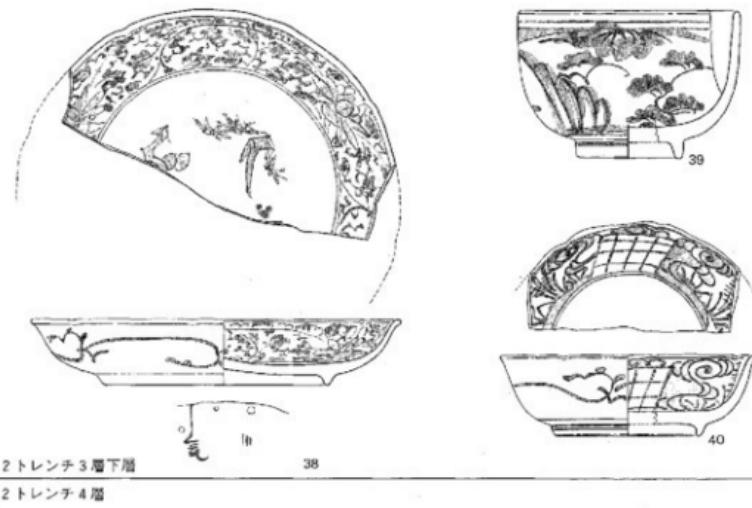
36

0

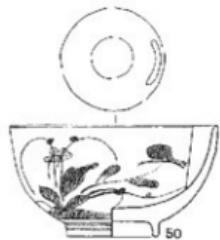


10cm

第92図 百戸西窯跡出土陶磁器③ (1/3)

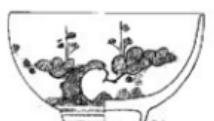
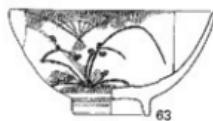
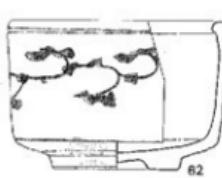
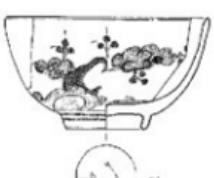
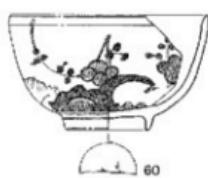
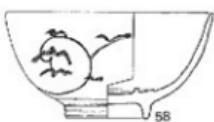
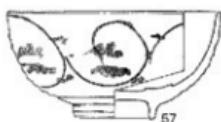
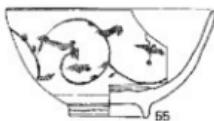


第93図 百越西窯跡出土陶磁器④ (1/3)



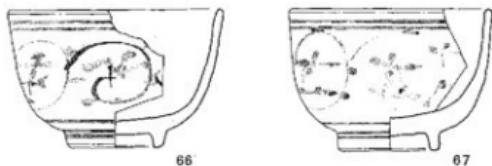
2トレンチ4層
2トレンチ5層

0 10cm

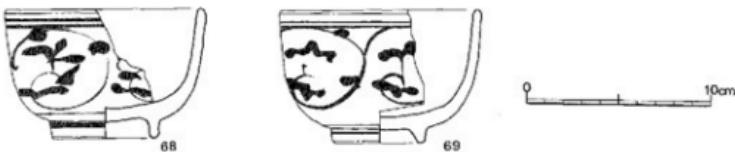


第94図 百貫西窯跡出土陶磁器⑤ (1/3)

2トレンチ6層



2トレンチ7層



第95図 百貫西窯跡出土陶磁器⑥(1/3)

③ 第2トレンチ3層出土陶磁器（第90・91図）

12～14、17は陶胎染付である。外面に描いてある屋根では屋根から下の部分が簡略化されかけている。15・16は草花文を描く碗である。26・27の草花文を描くものと大きさ等同じであるが、文様をみると、26・27の草花文では草の葉が描いてある花の左上で弧を描きながらつながっているが、3層のものでは完全に離れている。以上の4点は、見込みに蛇目釉剥ぎを施す皿である。20は2層出土のものとほぼ同じ仏花瓶である。21は口径102mmの中碗で、用途的には煎茶碗であろうか。外面に青磁釉を施し、内面の口縁端に模様繩文を染付している。見込みには五弁花を描く。22は外面に鉄釉を施している。23は復原口径21cm程の中皿である。裏底に「大明成化年製」の銘があり、ハリ支えの跡が残っている。

④ 第2トレンチ3層下層出土陶磁器（第91・92図）

24は3層出土のものと同じ復原口径108mmの中碗である。25は口径77mmの小碗である。草花文と蝶を描いている。28は復原口径20.5cm程の中皿である。裏底にハリ支えの跡が残っている。29・30はそば猪口である。草花文と竹筆を描いている。裏底に簡略化された「大明年製」の銘がある。31は竹筆と蝶を描いた碗である。裏底に「大明年製」の銘がある。32は二重網目文の碗で、裏底に渦巻の銘あり。33は仏花瓶で、2層・3層出土のものと同じものであるが、各層によって器形のプロポーションに変化がある。34は小杯で、用途としては酒杯であろう。竹筆を描く。35は底部が上底で、外面に茶色の釉をかけている。36は風景を描く陶胎染付である。37は口径21cm程の中皿である。焼成時に割れが生じ廃棄されたものであろう。裏底に簡略化された「大明年製」の銘があり、4個のハリ支えの跡が残っている。38は復原口径20cmの中皿で

ある。牡丹唐草文を描いており、見込みには松竹梅を描く。39は陶胎染付である。40は復原口径15cm程の五寸皿である。

⑤ 第2トレンチ4層出土出土陶磁器（第93・94図）

41は草花文を描く碗である。見込みは蛇ノ目釉剥ぎを施す。文様的には、3層下層の26・27、3層の15・16等との関連も考えられる。42～44、51・53は4層出土の草花文碗の特徴的なもので、躍動的に草花文を描くが、やや繁雑な感じも受けるものである。45～48は陶胎染付の碗と火入れである。47は陶胎染付の火入れで風景を描くが、中心には一見してそれとわかるしっかりととした構図で家を描いている。49は外面に唐草文を描く碗である。見込みに蛇ノ目釉剥ぎを施す。52は小杯である。

⑥ 第2トレンチ5層出土出土陶磁器（第94図）

54は口径7cmの小杯である。竹笪を描いている。55～58は唐草文を描く碗である。この5層の下層である6・7層の陶胎染付に施していた唐草文の文様のみを磁器の碗にあしらったものだろうか。59～61、64は普輪花、そして梅花を描く碗で、先の磁器碗に唐草文を施すものとこの5層を代表するものである。62、65は陶胎染付の火入れである。唐草文を描いている。63は、扁、草花文を描く碗である。見込みに蛇ノ目釉剥ぎを施している。

⑦ 第2トレンチ6層出土出土陶磁器（第95図）

66、67は連続唐草文を描く陶胎染付の碗である。器体の色調は白味を帯びた灰色で、具須の色も淡い暗緑色である。器形も口縁部が若干開きぎみとなる。口径は、66が118mm、67が111mm、高さは同じく75mmと77mmである。

⑧ 第2トレンチ7層出土出土陶磁器（第95図）

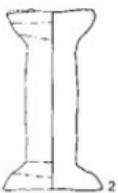
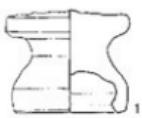
68・69は6層のものと同じ連続唐草文を描く陶胎染付の碗であるが、明らかに高さが低く、器体の色調も灰色で、具須の色も黒緑色で濃い。6層出土のものが全体的に弱々しい感じを受けるのに対して、7層のものは力強く、文様もはっきりしている。器形も口縁の開きが直立に近くなる。大きさは68の口径が110mm、69が110mm、高さが同じく70mmと72mmである。

⑨ 窯道具（第96・97図）

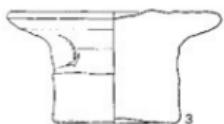
第1トレンチ東側拡張区及び第2トレンチの2層、3層下層、4層、6層、7層のものを図示している。

1・2は第1トレンチ東側拡張区のもので、1はシノ、2はトチンである。その他は第2トレンチ出土のものである。2層のものとして3のシノを図示している。3層下層では4～6の円板形ハマ、7～10は逆台形ハマ、11・12はシノ、13はトチンである。4層では14・15・18がシノで、16が逆台形ハマ、17・19・20がトチンである。6層では21～23が円板形ハマ、24～29がシノ、30・31がトチンである。最下層の7層のものでは32～34が円板形ハマ、37がシノ、35・36もシノであろうか。38はトチンである。以上の38点は、いずれも陶質である。

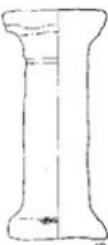
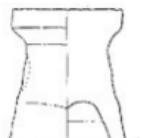
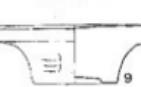
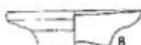
1 トレンチ東側坑張区



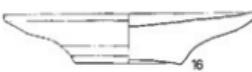
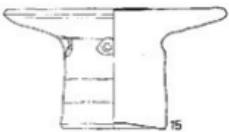
2 トレンチ 2 層



2 トレンチ 3 層下層



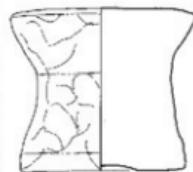
2 トレンチ 4 層



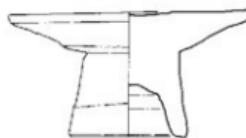
0 10cm

第96図 百貫西窯跡出土窯道具① (1 / 3)

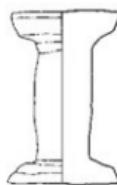
2トレンチ4層



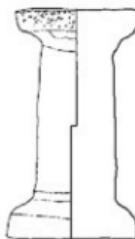
17



18



19



20

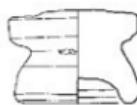
2トレンチ6層



21



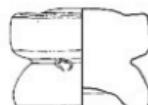
22



24



25



26



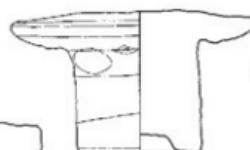
23



27



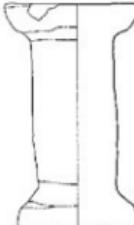
28



29



30



31

2トレンチ7層



32



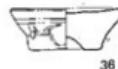
33



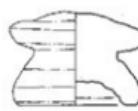
34



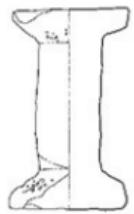
35



36



37



38

第97図 百貫西窯跡出土窯道具② (1 / 3)

(3) まとめ

今回の百貫西窯の調査では、第1トレンチ（東西の拡張区も含む）で、少なくとも始原期の窯室の床面を含めて4面の床面を確認できたりし、物原に設定した第2トレンチでは4枚の間層（黄灰色の粘土層や窯壁等）も確認できた。厳密に考えれば、窯が廃絶した時にこれらの間層が形成されたものであれば3枚の間層しか形成されないはずなので、もしかすると第1トレンチの床面がもう1枚あることも考えられるし、窯の床面は4枚であって、たまたま物原の間層が1枚多く形成されたのかもしれない。しかし、いずれにしてもこの窯室の床面の焼き直しと物原の間層の形成状況とは関連が深いように思える。

さて、この窯の開始と廃窯についてであるが、大橋康二氏の御教示によれば、7層出土の陶胎染付の碗は17世紀の末から18世紀の初めの頃のものということで、『皿山日記』による元禄10年（1697）の開窯の記録とほぼ合致すると思われる。またその廃窯時期については、3層下層で出土した皿が、村上仲之氏の御教示では有田の椋呂谷窯跡のものと同じもので1740年代のものであろうとのことであり、1780年代から出現するといわれる高高台碗が全くみられないことと、V期（1780年～）の窯跡の特徴である棚板や四枚羽根の窯道具が認められないこと等から、少なくとも1780年以前には廃窯していたものと思われる。^{（註1）}

また、この窯の特徴として、佐世保市の江永古窯との関連も認められる。当窯跡6層の連続唐草文の陶胎染付等は江永のA窯のものと同じであるし、窯道具等も同じような特徴的なものが認められる。

（村川）

註1 一番古い床面の下に窯道具が入り込んでいたので、始原期の床面としている面の下にもう1枚の床面があったのかもしれない。

2 大橋康二「肥前陶磁の変遷と出土分布」「国内出土の肥前陶磁」 佐賀県立九州陶磁文化館
1984

3 久村貞男「江永古窯」 江永古窯発掘調査報告書 佐世保市教育委員会 1975

11. おわりに——3箇年の調査のまとめにかえて——

平成2年から平成4年の3箇年に7箇所の窯跡の発掘調査と2箇所の測量調査を実施し、多くの成果をあげることができたが、これまで行ってきた調査は規模的にも小さく波佐見古窯群全体から見るとまだほんの一部を垣間見たに過ぎないと考えられる。ここでは調査成果についてのまとめを行うが、残された課題については今後の調査に期待したいと思う。

(1) 波佐見古窯跡の変遷について

今回調査の成果の一つとして、発掘によって大づかみではあるが波佐見陶磁の推移が概観できるようになったことがあげられる。今後の調査では、物原の分層発掘資料、窯室床面の一括資料、熔着資料等の検討を通じてより詳細な編年が組み立てられ、窯の性格・内容が明らかになっていくと考えられる。

表3は、大橋康二氏の肥前陶磁の編年に基づいて、今回の調査結果や『波佐見古陶磁文様集』^(註2)などの資料を参考にして作成した波佐見窯跡の変遷案である。まだ荒削りで不明な点が多く今後調査によって修正・補足していかねばならない試案である。

I期は、陶器の胎土目積みの段階である。太田新三郎氏の採集資料を一瀬信雄氏が昭和49年に整理を行い、その写真台帳に下稗木場窯跡出土品としてまぎれもない胎上目の陶器皿が撮影されているのを平成4年の調査の際に発見した。写真には砂目の陶器皿、鉄袖の陶器碗や擂鉢などもあるが、まだ資料は実見していない。次回の報告書には実測図を掲載したいと考えている。今のところでは波佐見地域では最も古い窯である。1580年～1600年代に位置付けられる。

II期は、砂目積みの陶器と磁器の試作段階のII-1期(1600年～1630年代)と磁器の本格的な生産が開始されるII-2期(1630年～1650年代)に分けられる。

II-1期には、下稗木場窯跡、烟ノ原窯跡、古皿屋窯跡、山似田窯跡、鳥越(鶴ノ川)窯跡があげられる。村木古窯群は下稗木場窯から系統的にたどれるが、鳥越(鶴ノ川)窯は別グループとして区別される。太田新三郎氏は、下稗木場窯と富永治助、鳥越(鶴ノ川)窯と内海市左衛門との地元に縁地をもつ有力者とのつながりを指摘している。

II-2期として現在把握される窯は、三股古窯跡、三股青磁窯跡、広川原窯跡、中尾上登窯跡があげられる。三股古窯と三股青磁窯では、上手の青磁を主体として初期の染付磁器も焼成している。『波佐見古陶磁文様集』によれば、三股古窯では染付菊花散らし文丸皿、三股青磁窯では染付半菊唐草文碗が出土しており、1620年～1630年代に比定することができる資料であり、II-2期の時期を1620年代に遡らせることも考えねばならない。『皿山旧記』には、三股皿山は慶長10年(1605)頃に開始されたとあるところから、文献上ではII-1期に遡る窯が存在する可能性を示唆している。元は三股と永尾に地区が分かれておらず、「当山元建慶長四亥年」刻銘の山神社玉垣石柱が永尾に存在するところから、永尾高麗窯跡をその段階の窯とする太田新三

郎氏の意見もある。おそらく三股陶石の発見が慶長10年前後になされ、本格的に磁器を焼成するため木村から三股への工人集団の移動があったことを推測させる。

中尾皿山は、『皿山仙記』と『郷村記』に正保元年（1644）に開始されたとあり、中尾上登窯では1650年頃の青磁と染付「日」字鳳凰文皿が出土しており、広川原窯でも同段階の青磁碗が採集されている。また、松浦藩三川内の『今村家文書』には、寛永14年（1637）に今村三之丞が「大村領字中尾川内皿山に陶土を発見し、此の地に窯業を開きしも疊色にして大白ならず……」とあるが、この中尾川内窯が井石郷中尾川内のどの場所に存在するのかは明確でない。

III期（1650年～1690年代）は、今回の調査でもっとも成果がみられた時期である。当期の特徴的な製品として染付雲龍見込荒磯文碗があり、辺後ノ谷窯跡、向平窯跡、中尾上登窯跡、中尾下登窯跡、永尾本登窯跡、木場山窯跡、咽口窯跡から出土している。この他、染付牡丹文鉢（辺後ノ谷窯、永尾本登窯、咽口窯）、染付「寿」字鳳凰文皿（辺後ノ谷窯）、青磁刻花文皿・鉢（木場山窯）など海外輸出向けの上手の製品をこの段階に焼成している。しかし、辺後ノ谷窯を除いた当期の窯では、併せて見込みを蛇ノ目釉剥ぎする染付や青磁の製品を焼成しており、中尾上登窯ではむしろ後者が主体を占める。したがって重ね焼きによる量産化の端緒がこの段階にすでにみられることになる。辺後ノ谷窯は、『大村記』の寛文5年（1665）、『皿山旧記』の寛文3年（1663）と創始年代が若干ずれるが、この段階に小形で瀟洒な上手の製品を焼成した波佐見地域のなかではやや異質の窯であるが、大橋氏は有田地域との関係が深いことを指摘された。文献記録では、寛文年間の1660年代に開窯されるものが多く、大村藩が寛文5年（1665）に皿山役所を三股に設置し指導・管理体制が整ったことと機を一にしていると考えられ、藩による本格的な窯業への取り組みが開始されたことが分かる。

IV期（1690年～1780年代）は、いわゆるくらわんか茶碗・皿が国内市場向けに焼成され大量に供給された段階である。百貫西窯・長田山窯・高尾窯・皿山本登窯では、三川内の江永窯等の影響を強く受けた陶胎染付が焼成されている。窯道具まで類似するところから、職人間の交流があったことを物語っているようである。木場山窯と長田山窯では青磁が主体的に焼成されるが、前半期のIV-1期（1690年～1740年代）で青磁の主力製品としての生産は終了するようである。

『皿山旧記』によれば、波佐見焼の売り出しが始まったのは宝永2年（1705）で、海外市場から国内市場への転換と「藩財政の増収をはかるため、寛保3年（1743）から、陶磁器の専売制を実施して、大坂に蔵屋敷を設けて焼物を販売させ、遠く江戸方面まで販路を拓げていった」といわれている。大橋氏によれば、『安永（1772～80）版の『難波丸綱目』には「今利焼問屋」と並んで「大村なみ問屋」の名が見え、「大村藩で焼いた日用品を扱う問屋をいうのであろう」と指摘されている。

また、III期に隆盛した中尾上登窯や中尾下登窯は、後半期のIV-2期（1740年～1780年代）に一時廃絶した可能性が高く、永尾本登窯もIV-1期の製品が減少し一定期間休止状態にあつ

表3 波佐見古窯跡変遷表
(陶磁器の出土量: ○多い ○出土 △少ない ×無し)

地区	窯跡名	時期	I	II	III	IV	V	VI
皿山	辺後ノ谷窯跡				◎○			
	向平窯跡				○			
	高尾窯跡				○○○○○○			
	皿山本登窯跡							
稗木場	下稗木場窯跡	○○						
村木	畠古ノ原窯跡	○○○						
	皿山似田窯跡					○○		
	百百貫窯跡							
	百貫窯跡							
湯牟田	鳥越(鶴ノ川)窯跡	○						
井石	中尾川内窯跡				○			
中尾	長田山窯跡							
	広川原窯跡	△						
	白岳窯跡	△	◎○	△×	○○○○○○			
	中尾上登窯跡			○○○○○○				
永尾	中尾下登窯跡							
	大新窯跡							
	永尾高麗窯跡							
	永尾木本山場窯跡							
三股	三股古窯跡	○○			○○○○○○			
	三股青磁窯跡							
	咽口窯跡							
	三股上登窯跡							
三股	三股本登窯跡							
	三股新登窯跡							
	三股鳥居窯跡							
	三股窯跡							

表4 文献からみた開窯年代と創始者

○ 文献に記載はあるが開窯年代や創始者について書かれていない

窯名・文献	『大村記』(1693年頃)	『皿山田記』(1716年頃)	『西村記』(1844年頃)
二段山 上登窯 下登窯 新登窯	○	慶長10年(1605)頃	慶長年中(1596~1614) 萬屋藤九郎 ○ ○ 元和年中(1615~1623) 本島(東島)久兵衛
永尾山	○	寛文6年(1666)	寛文6年(1666)
中尾山 上登窯 下登窯 大新登窯	○	正保元年(1644) 福田代助 寛文5年(1665) 貞亨2年(1685) 松尾儀左衛門	正保元年(1644) ○ 寛文元年(1661) 貞亨年中(1684~1687) 松尾儀右衛門
木場山	○	寛文7年(1667) 本島(東島)久兵衛	
永田山			中野郡兵衛
百貫山		元禄10年(1697) 葵永吉平	
稗木場山 同新釜 古亨5年(1688) 藤五左衛門		寛文3年(1663)	寛文7年(1667)
水与山		正徳2年(1712) 太郎兵衛	寛文7年(1667) 清井角左衛門 他

たことが推測される。亨保19年(1734)には亨保の大飢饉があり、「亨保十九年寅年飢饉、領中所々に皿山之有り瀬戸物焼出し候へ共、近年皿山衰微」と大村家古文書『見聞録第59卷』^(註10)にあり、窯の経営がかならずしも間断なく連続と継続していたのでなく、社会的要因や自然現象によってかなりの影響を受けたことが、出土した陶磁器等の様相からも看取できるようになってきた。

V期(1780年～1860年代)は、広東碗とそれより遅れて現れる端反碗に代表される段階である。便宜的に端反碗が出現以前の段階をV-1期(1780年～1820年代)として、出現後の段階をV-2期(1820年～1860年)として分けた。後半期には、手書きで文字を施したコンプラ瓶が焼成されている。『郷村記』に記録された巨大窯群はV-2期に相当する。『波佐見史』によれば、天保元年～4年(1830～33)の大凶作で皿山も影響を受けて、なかでも稗木場皿山は不景気が数年続いて事業中止もやむを得ない窮状であったとのことである。

IV期(明治期)は、合成された釉下顔料(洋具須)で型紙摺や手書き染付する磁器碗や外面に鉄錆釉を掛ける磁器碗に代表される。プリント文字のコンプラ瓶も焼成されている。明治3年の皿山役所の廃止後に藩の後ろ盾がなくなり、民間主体で巨大窯は分断して使用され縮小をよぎなくされた。『波佐見史』によれば、明治8年(1871)ごろ「形うち」が始められ、明治16年(1883)ごろから「形うち」のうえに手書きが加筆する手法がとられ、明治24年ごろから銅版転写も行われたとしている。また、明治17年の『東彼杵郡村記』によれば、上波佐見村では170戸が窯業に従事し、徳利101,376本、壺瓶58,500本、茶碗83,300本の生産がなされ、徳利と壺瓶を主力製品として焼造していたことが分かる。

(2) 「郷村記」における幕末期の窯場の状況

今回の調査によって、中尾上登窯跡が160m以上(窯室数33軒)、永尾本登窯跡約155m(29軒)、中尾下登窯跡が約120m(26軒)、三股新登窯跡が約100m(21軒)を測り、窯体が最大規模に発達するのが幕末の段階であり、『郷村記』に記載された内容が測量結果と照応することが明らかになってきた。現在調査されたなかでは中尾上登窯が世界最大規模をもち、釜数39軒の大新窯はさらに巨大な窯であったことが推察されることになった。

『郷村記』には20軒を超える8箇所の窯が記してあり、波佐見地方が江戸後期～幕末において日本各地へ磁器を大量に供給する一大センターの役割を果たしていたことを物語っている。幕末段階における民衆の購買力の高まり、藩の施策などの社会的背景があったことはもちろんであるが、工人たちの創意工夫の努力と技術的な裏付けが巨大窯の成立を可能にしたのであろう。波佐見地方では、すでに17世紀中頃に見込み蛇ノ目釉刷ぎの皿を開始し量産化の方向性がうかがわれ、18世紀には「くらわんか碗・皿」の量産に拍車をかけてより安価な日常食器を国内市場に供給するようになった。大橋氏は、波佐見が「磁器を庶民の間まで普及させるのに大きな役割を果たした」と特定階層に使用の限られていた磁器の大衆化と食文化に多大な貢献があつた。

表5 文献にみる廬場の状況

(1)戸数 (2)釜数(廬室数) (3)1年間の出来高 (4)1廬室での出来高

廬場・文献	『大村記』元禄5	『郷村記』天保15	『大村藩史』※明治4
三股山	①	① 108軒(釜司26人)	① 99軒
	② 28軒	② 68軒(3廬)	② 43軒
	③ 9,828俵	③ 13,230俵(3廬)	③ 凡9,000俵
永尾山	①	① 44軒(釜司10人)	① 50軒
	② 13軒	② 29軒(1廬)	② 24軒
	③ 3,978俵	③ 6,620俵(1廬)	③ 凡5,000俵
木場山	①		
	② 5軒		
	③ 2,740俵		
中尾山	①	① 150軒(釜司26人)	① 145軒
	② 39軒	② 98軒(3廬)	② 48軒
	③ 18,603俵	③ 21,966俵(3廬)	③ 凡9,700俵
稗木場山	① 22軒	① 66軒(釜司12人)	① 65軒
	② 13軒	② 20軒	② 12軒
	③ 2,350俵	③ 6,630俵	③ 3,050俵
計	② 98軒	② 215軒	② 127軒
	③ 37,499俵	③ 48,446俵	③ 26,750俵
	④ 382.6俵	④ 225.3俵	④ 210.6俵

※『波佐見史上巻』 1976 所収

表6 『郷村記』における廬の規模

	釜数	本釜	安光釜	灰安光釜
三股山	68軒			
上登釜	23軒	17軒	2軒	4軒
下登釜	24軒	17軒	4軒	3軒
新登釜	21軒	12軒	6軒	3軒
永尾山	29軒	23軒	4軒	2軒
中尾山	98軒			
上登釜	33軒	25軒	4軒	4軒
下登釜	26軒	20軒	4軒	2軒
大新登釜	39軒	32軒	4軒	3軒
稗木場山	20軒	14軒	3軒	3軒

^(註16)たことを評価されたように、波佐見地域の巨大窯跡群は、日常食器を中心として限られた器種・文様の製品を大量生産する、重点的な生産品種の量産化体制を、幕末段階において極限にまで押し進めた歴史的なモニメントであったと位置づけることができよう。

今後は、波佐見町内の生産地の状況を調査するのはもちろんであるが、視角を広げて消費地での波佐見焼の流通の実態も究明していくのも課題の一つと考えられる。^(註17)

最後になりましたが、懇意なる指導によって導びいていただいた大橋康二氏、また調査と整理にかかわられた多くの方々の協力をいただいて今回の報告書をまとめるることができました。心から感謝申しあげます。特に立山分室の方々の力強い応援がなければ本書は形をなすことが困難であったと思われます。今後、本書が波佐見古窯研究の布石になれば幸いと考えます。

(宮崎)

註1 大橋康二「肥前陶磁の変遷と出土分布」『国内出土の肥前陶磁』 佐賀県立九州陶磁文化館 1984

大橋康二「波佐見焼の変遷」『長崎の陶磁』 佐賀県立九州陶磁文化館 1982 他

2 長崎県窯業試験場編『波佐見古陶磁文様集』 肥前波佐見焼振興会 1982

3 太田新三郎『波佐見地方陶祖の探求』 波佐見町教育委員会 1962

昭和13年に上梓された本書は、大書ではないが厳密な史料操作に基づいた文献史における波佐見焼研究の名著である。この他に地元の研究として馬場淳氏の著作がある。

馬場淳『波佐見陶史』 波佐見町 1969

4 註3文献所収。

5 藤野保編『大村郷村記』第3巻 国書刊行会 1982

6 註3文献所収。

7 『大村記』 波佐見町教育委員会 1986

8 『波佐見史上巻』 波佐見町役場・波佐見町教育委員会 1976

9 大橋康二・西田宏子『古伊万里』 別冊太陽 平凡社 1988

10 大橋氏が整理指導の際に、中尾上登窯跡の資料について欠落を指摘され、ここでの記述は大橋氏の視点を拡大して他の窯の陶磁器を検証したにすぎない。

11 註8文献。

12 註8文献。

13 『波佐見史下巻』 波佐見町役場・波佐見町教育委員会 1981

14 註13文献。

15 このうち現在の遺跡名でいうと、三段下登窯跡は三段本登窯跡、柳木場皿山は皿山本登窯跡のことである。

16 註9文献。

17 森村健一「堺環濠都市遺跡出土の近世陶磁器」考古学ジャーナルNO. 297 ニューサイエンス社 1988 のなかで森村氏は、伊万里と波佐見の出土比率をとりあげ、堺で出土する陶磁

器の推移は、青磁—青花—唐津・志野—伊万里—波佐見になるとしている。

- ・ S K T14, S F001出土遺物（1626～1647年）
染付は伊万里としているもの他に波佐見が半々の割合で搬入
- ・ S K T218「享保」「瓦飾」の共伴遺物（1716～1735年）
波佐見と伊万里は4：1の比率
- ・ 大阪府阪南町金剛寺遺跡B地区包含層（17世紀後半～18世紀前半）
波佐見と伊万里の比率は11：1
- ・ 元禄2年堺大絵図の外堀（18世紀以降）
波佐見と伊万里の比率は25：1

図 版

図版 1



0



2

山似田窯跡 1 遠景 2 近景

図版 2



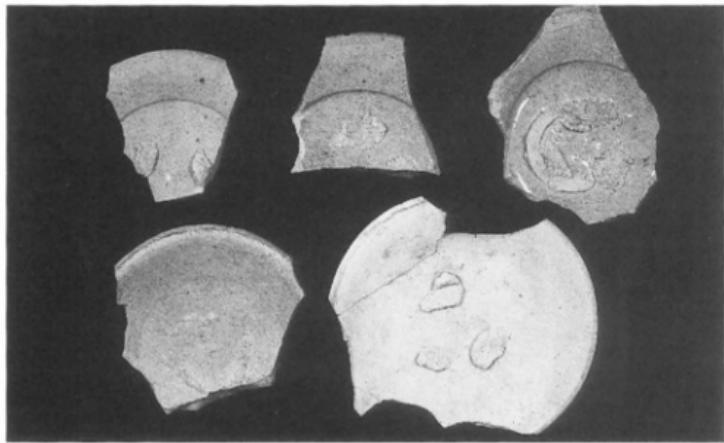
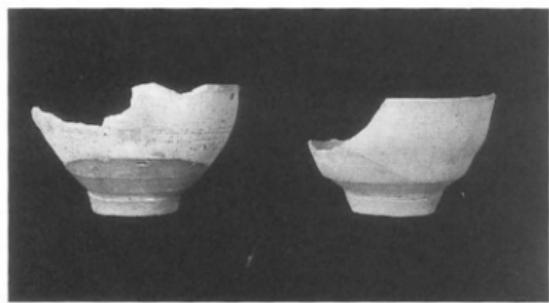
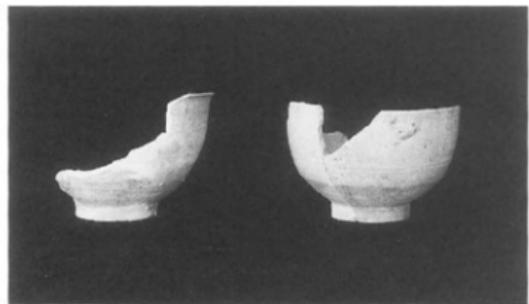
山似田窯跡 1 調査風景 2 第4トレンチ検出状況

図版 3



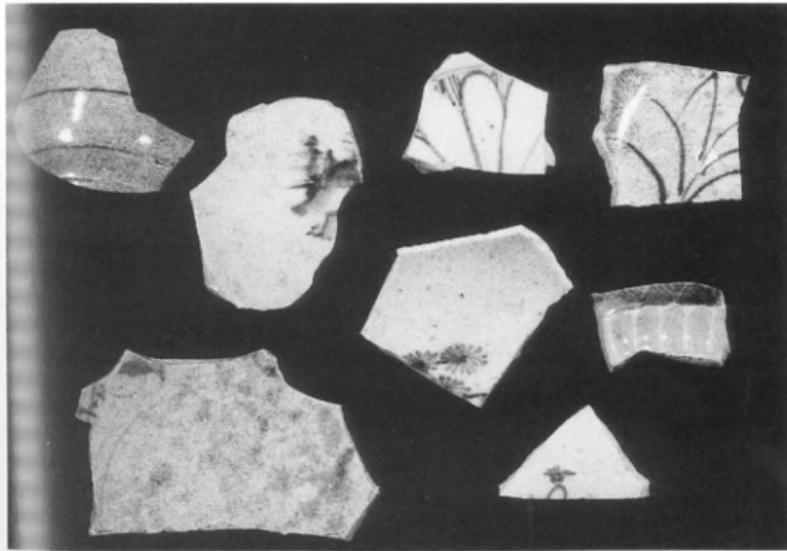
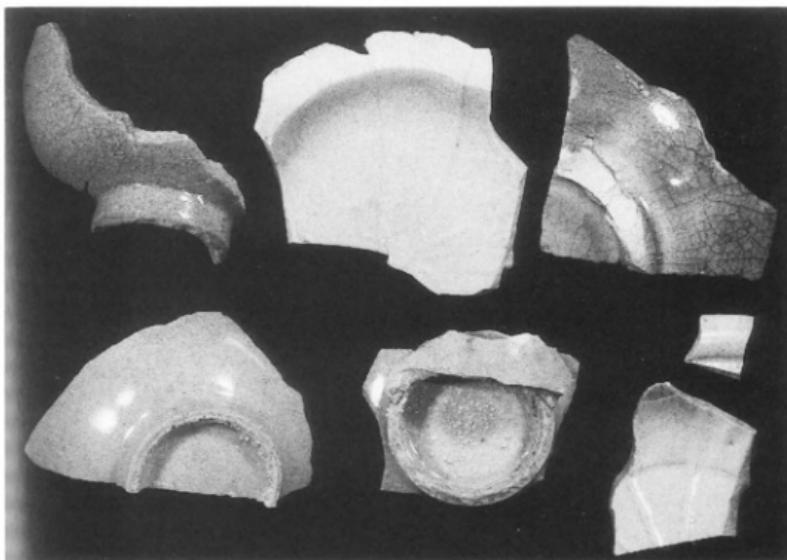
山似田窯跡 1 第Ⅰ室検出状況（南から） 2 同（東から）

図版 4



山似田窯跡出土陶器 (1 / 3)

図版 5



山似田窯跡出土白磁・青磁・染付 (1/2)

图版 6



木場山廬跡 1 遠景 2 近景

図版 7



窯室検出状況（B ブランチ）



奥壁の状況（B ブランチ）



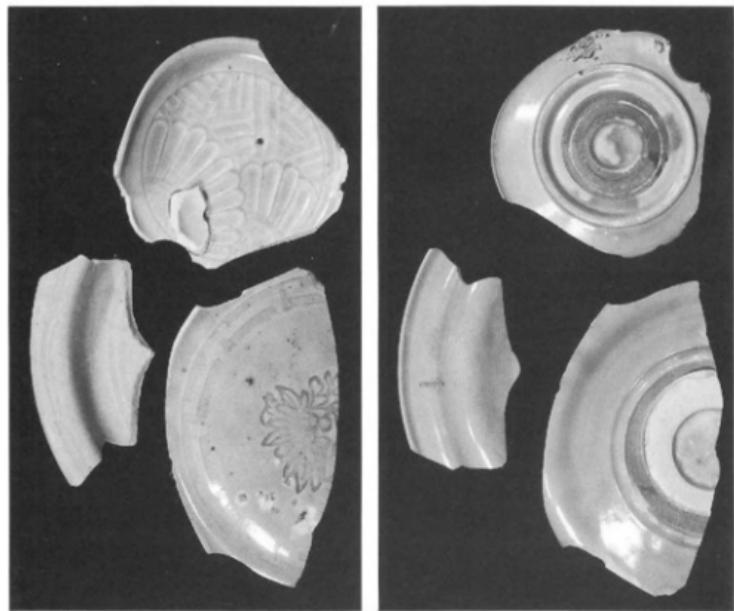
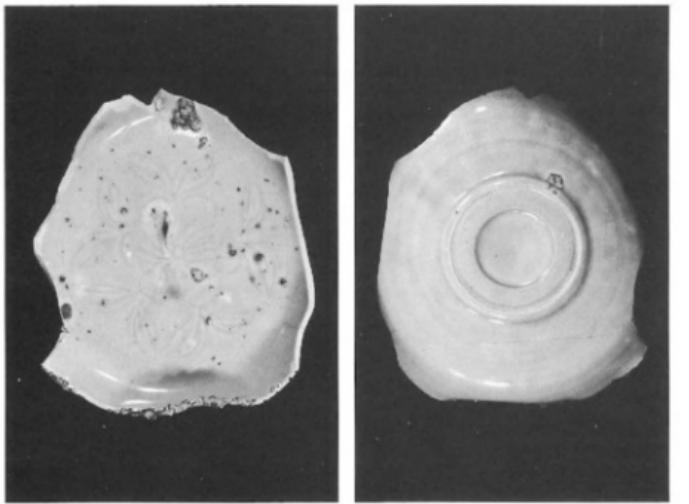
調査風景



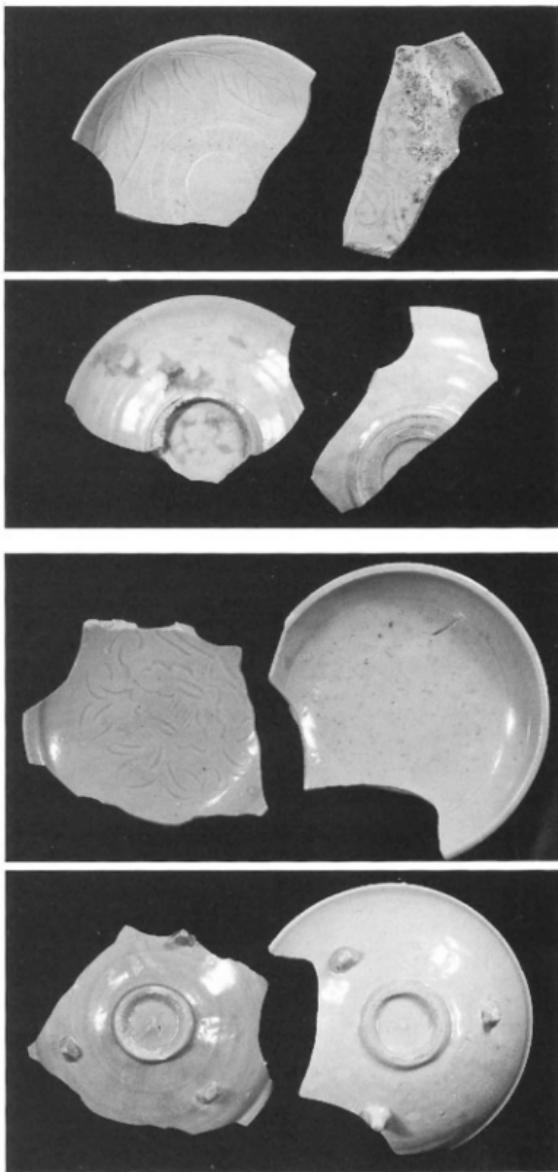
物原出土状況（A ブランチ）

木場山跡

図版 8

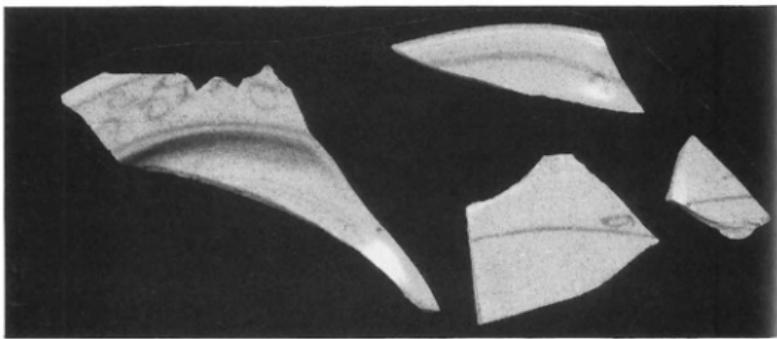
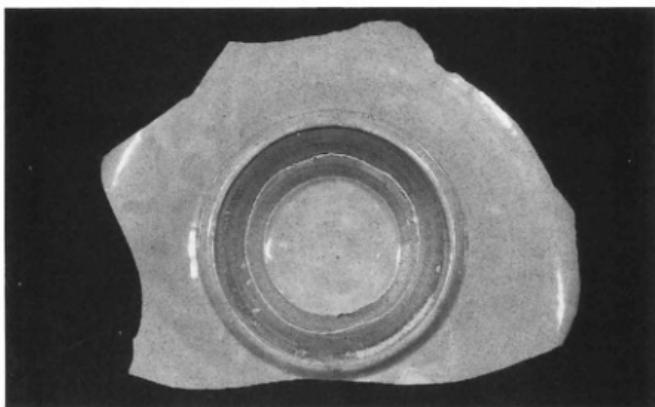
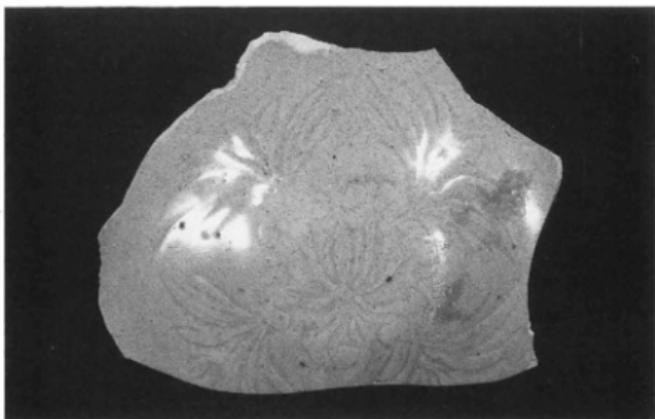


長崎三種窯 + 紅葉 (-\v)



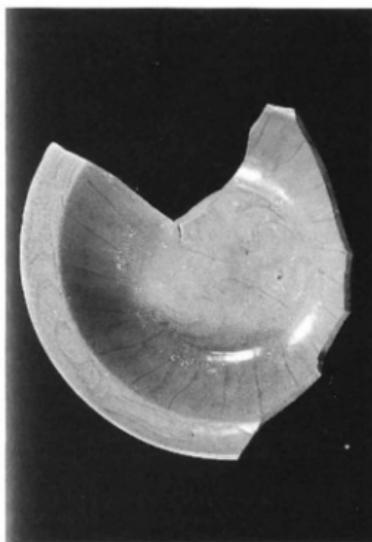
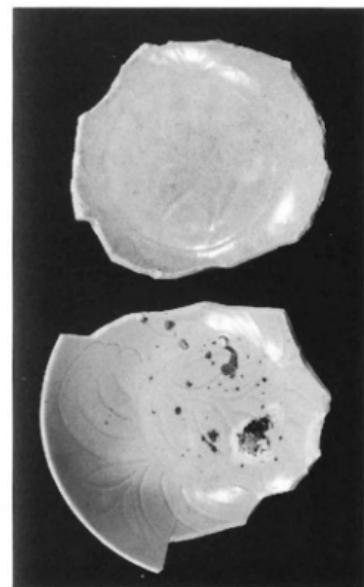
木場山窯跡出土青磁 (1/4)

图版10

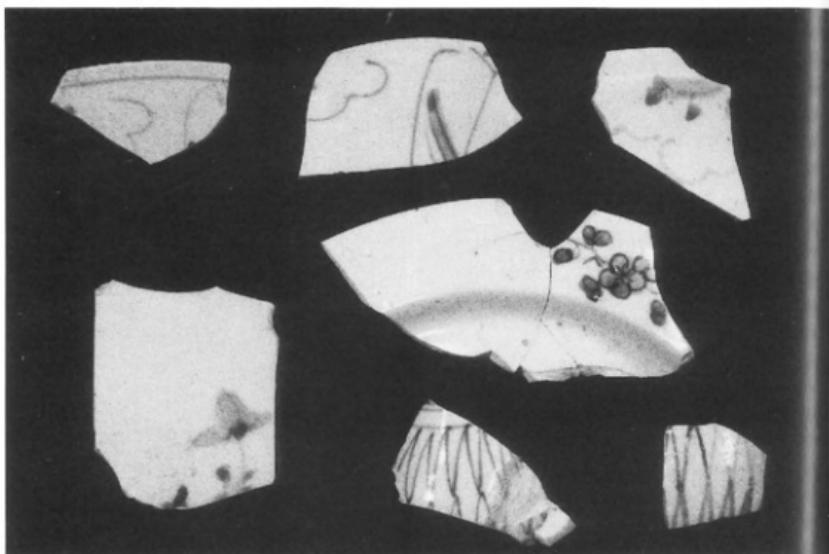
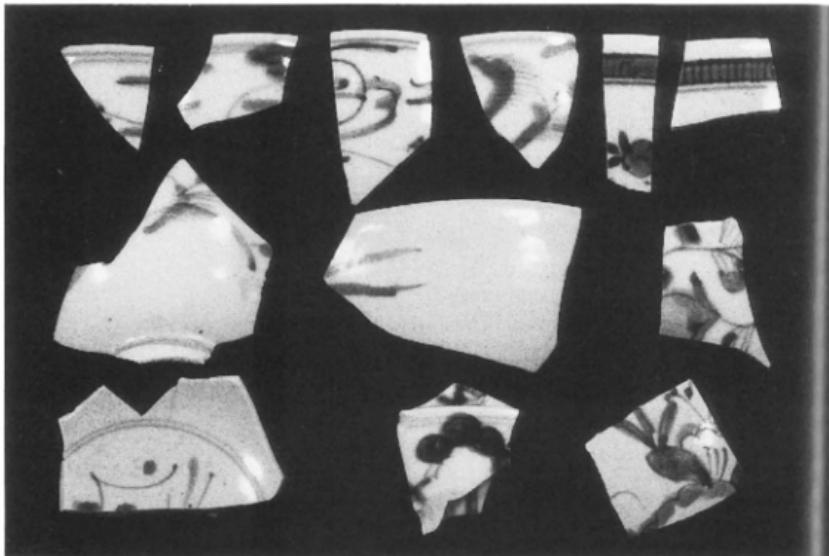


木場山窯跡出土青磁 (1/4), 青磁染付 (1/2)

図版11

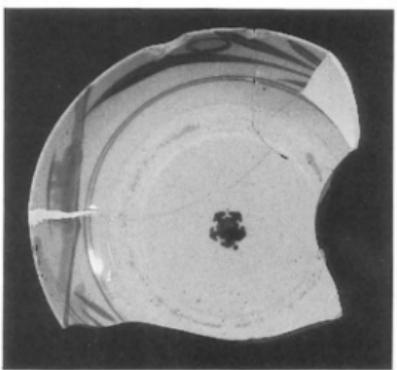
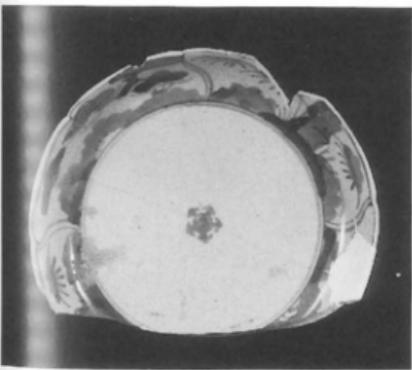
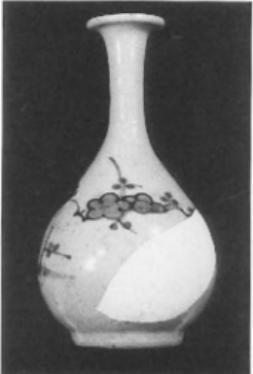
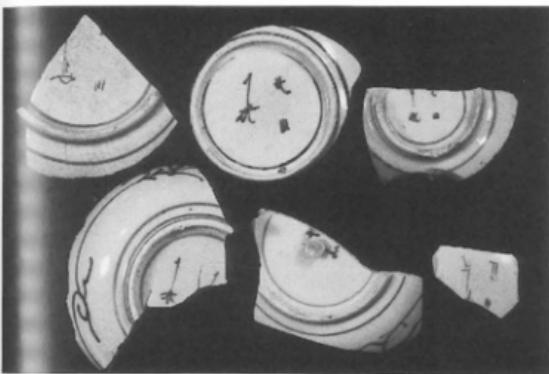
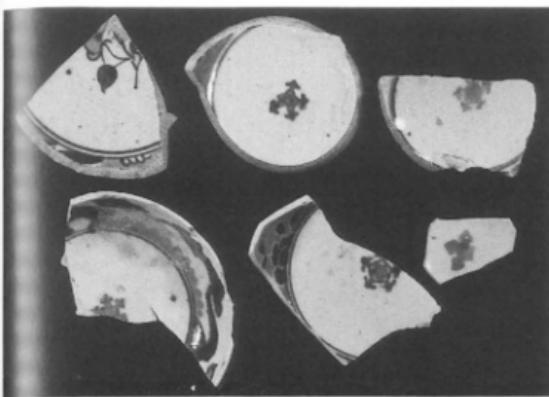


図版12



木場山窯跡出土染付 (1/2)

図版13



木場山窯跡出土染付 (1/3)

図版14



近景（東から）



近景（西から）



奥壁状況(第3室)

咽口窓跡



イ.トレンチ検出状況



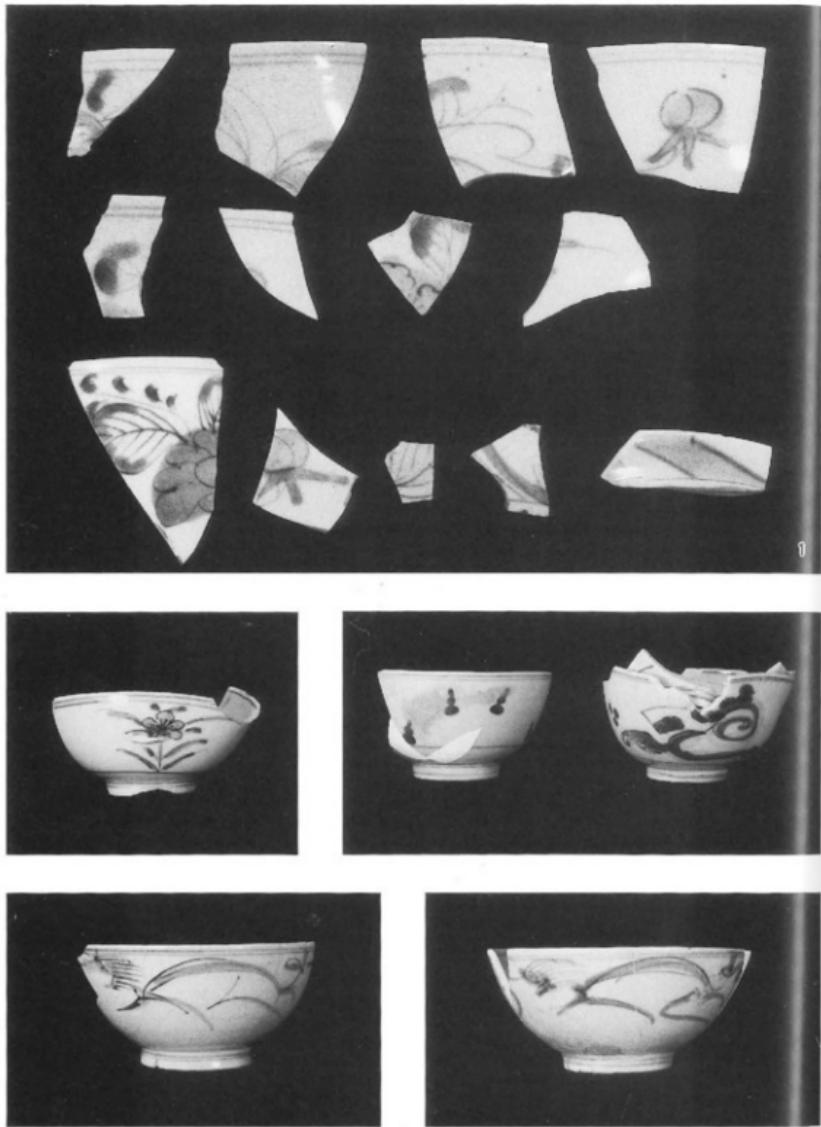
ロ.トレンチ北壁



喉口新窯跡近景

喉口窯跡

図版16

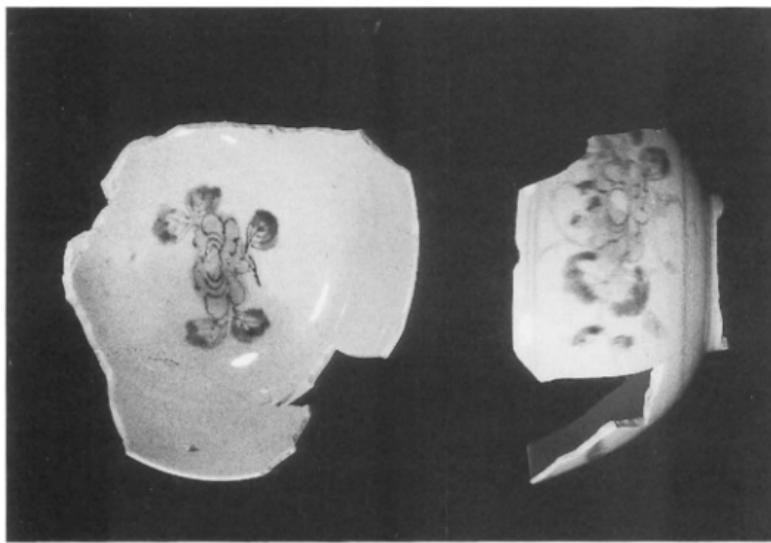


咽口窯跡出土染付（左はロ、トレンチ3～4層出土1/2、他は1/3）

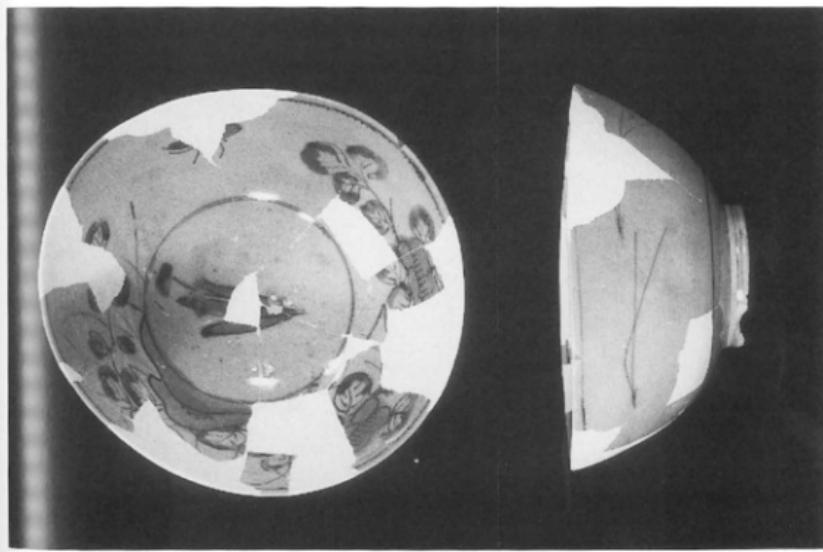
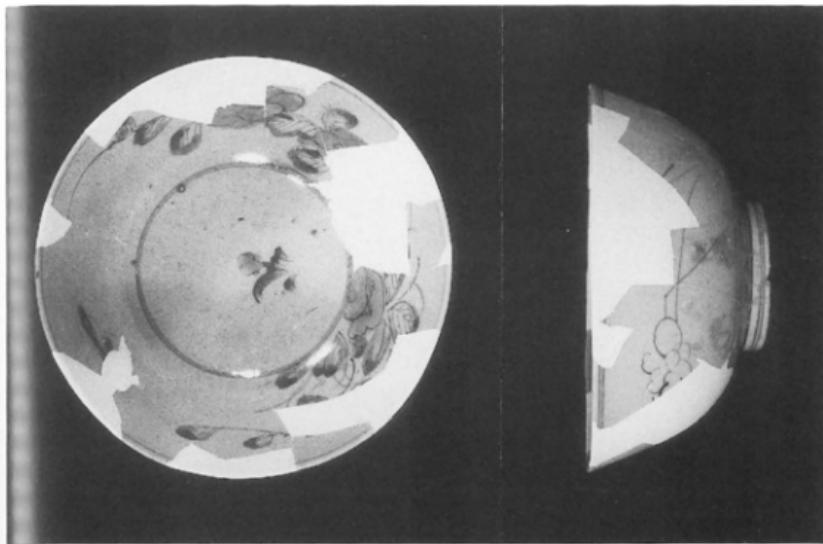


唱口窯跡出土染付 (1/3)

図版18

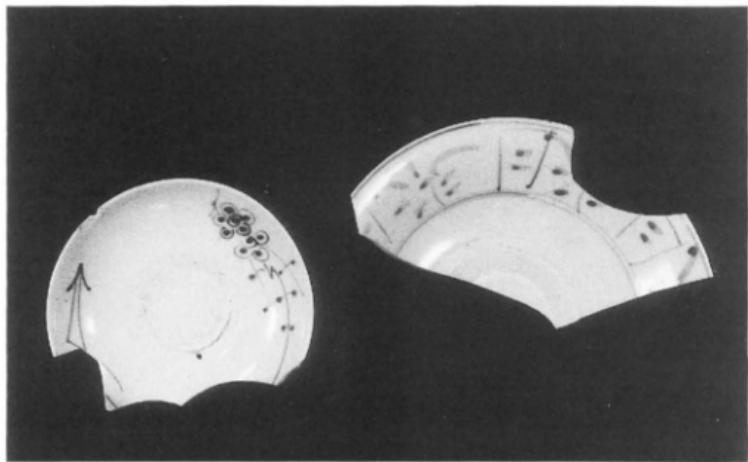
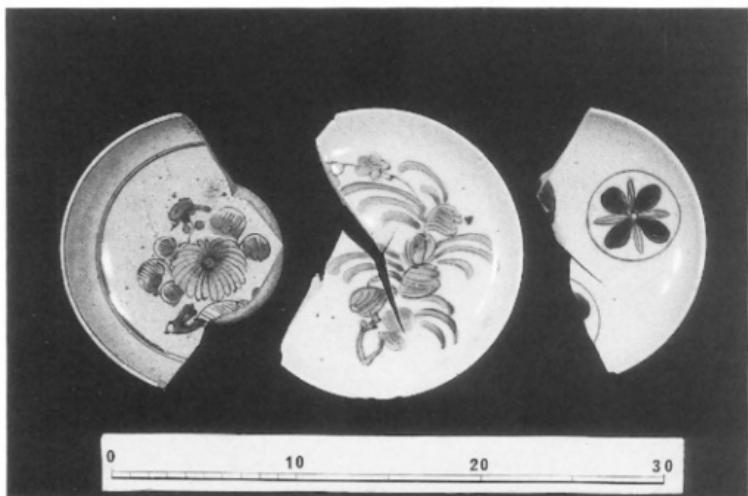


図版18
器口断面(左)と底面(右)



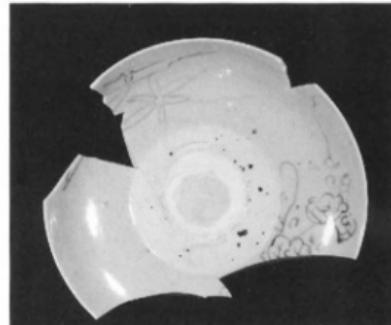
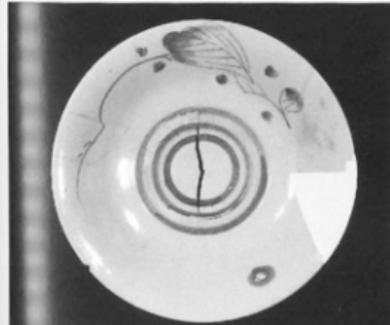
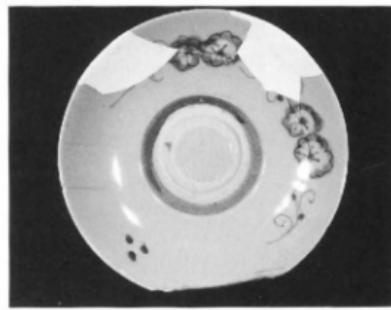
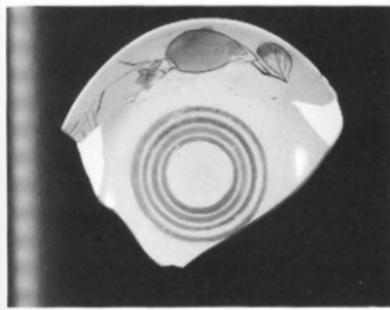
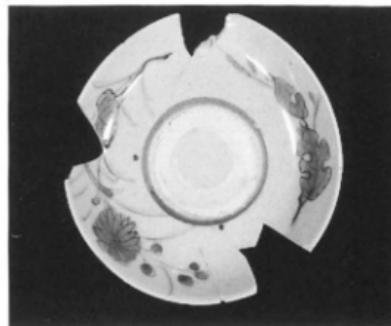
図版19
四口画花田井紫村（一八〇〇）

図版20



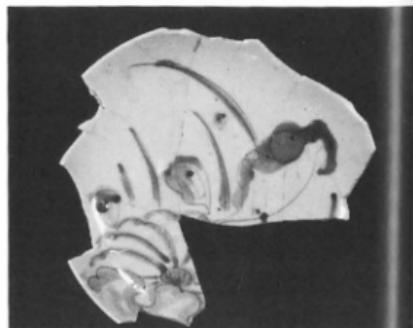
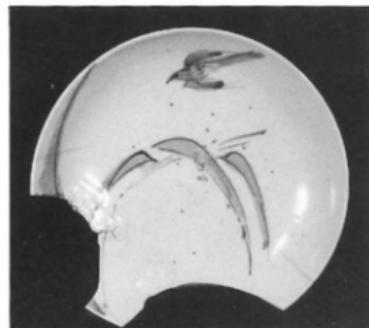
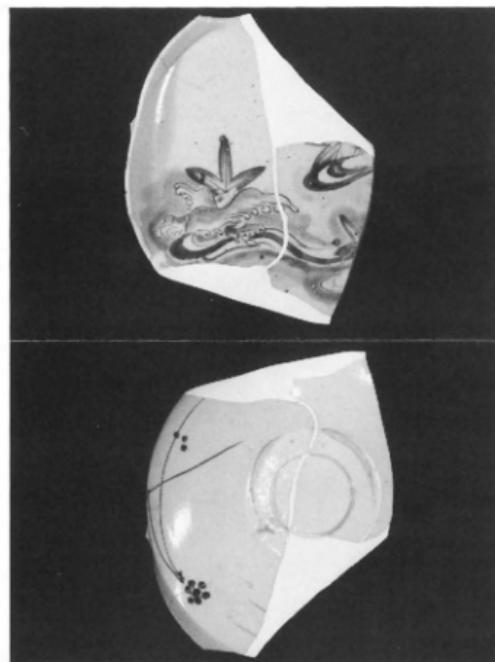
咽口窓跡出土染付 (1/3)

図版21

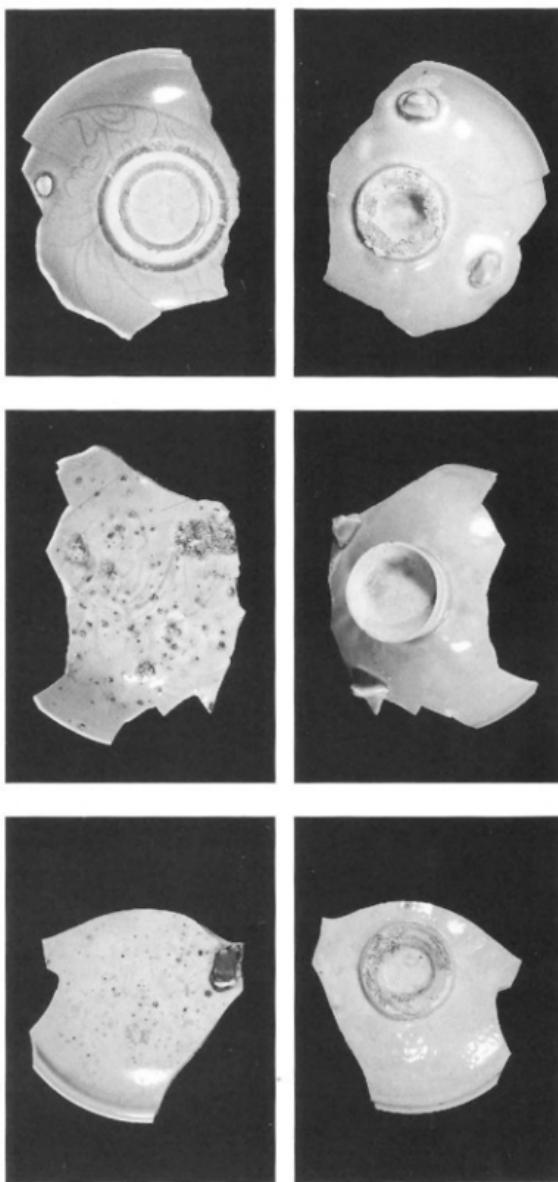


図版21
図版21
図版21
図版21
図版21
図版21

図版22

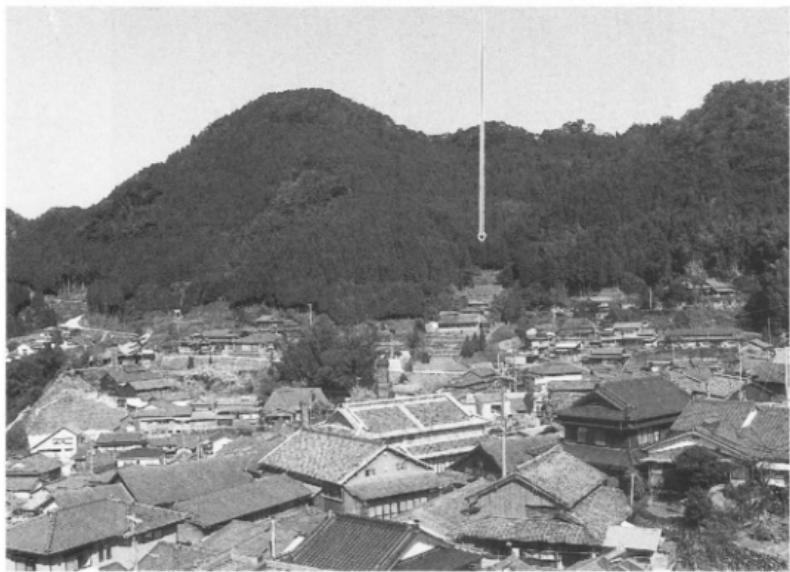


咽口窯跡出土染付 (1 / 4)



图版23
带口模施红绿彩（一\四）

図版24



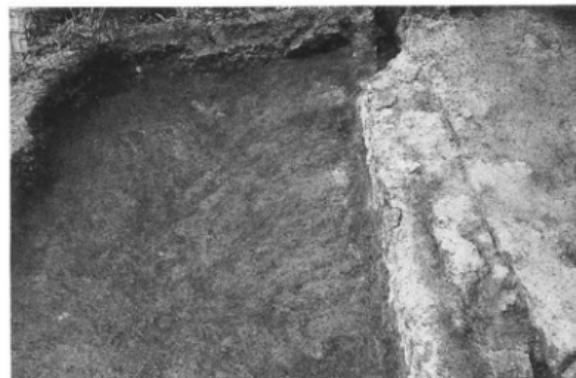
中尾上登塚跡 1 遠景（西から） 2 塚壁



A トレンチ検出状況
(西から)



C トレンチ検出状況
(西から)



C トレンチ検出状況
(南から)

中尾上登窯跡

図版26



E トレンチ検出状況（東から）

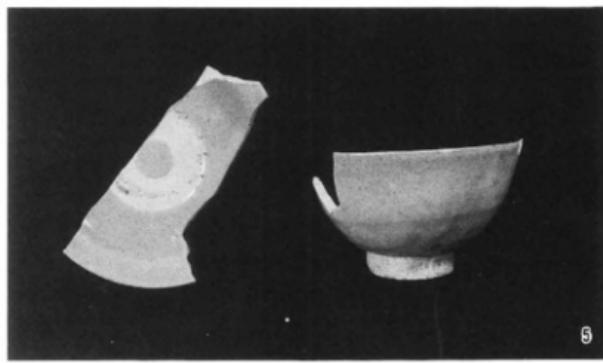
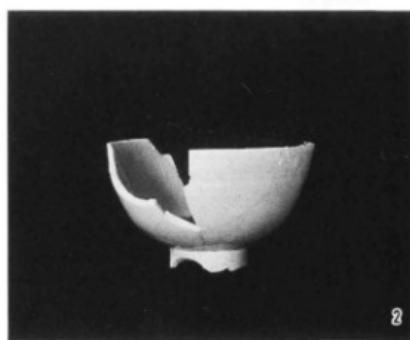
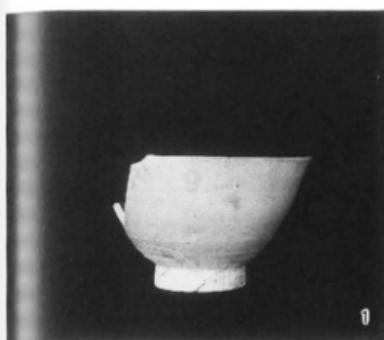
E トレンチ検出状況（北から）



中尾上登窯跡



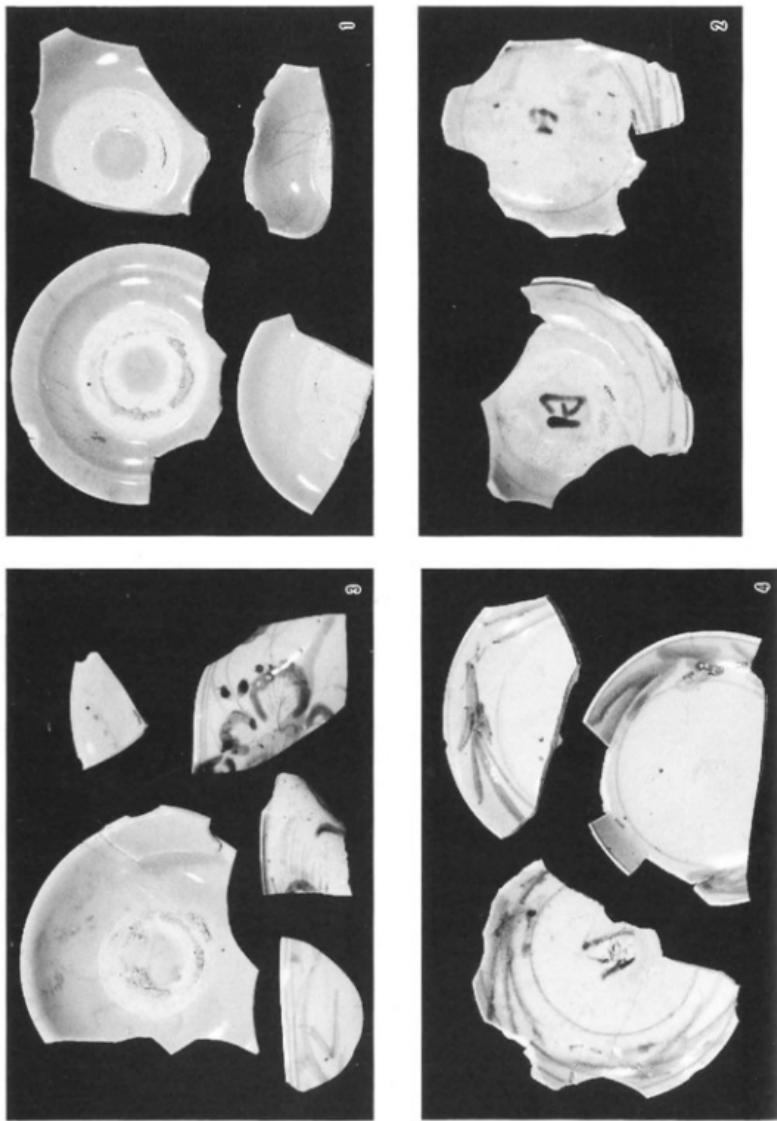
調査風景



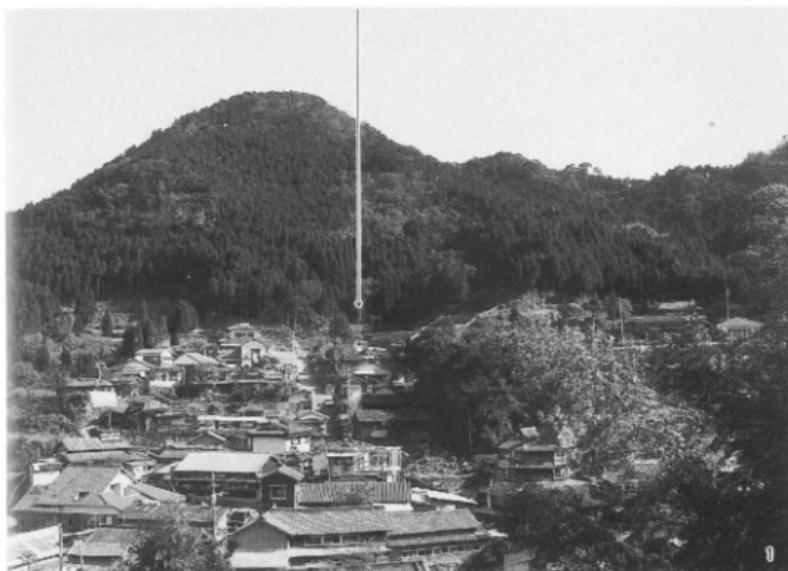
中尾上登窯出土陶磁器 (1 / 3)

1 物原A 7層 2 物原A 5層 3・4 物原A 4層
5 Eトレンチ 9層

図版28

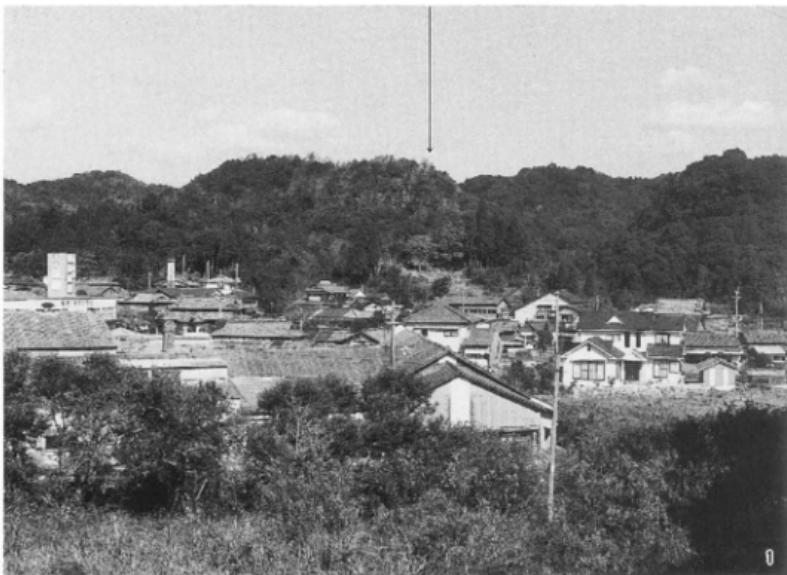


中尾上竜游出土陶磁器(一/3) 1・2 物原A7層 3 物原A5層 4 Eトレンチ9層



中尾下益窯跡 1 遠景（西から） 2 近景（東から）

図版30



辺後ノ谷窯跡 1 遠景（南から） 2 近景（南から）



辺後ノ谷底跡 第1トレンチ検出状況 1 西から 2 南から

図版32

第1 トレンチ側溝
の状況(北から)



第2 トレンチ土層
(東から)



第3 トレンチ検出
状況(東から)



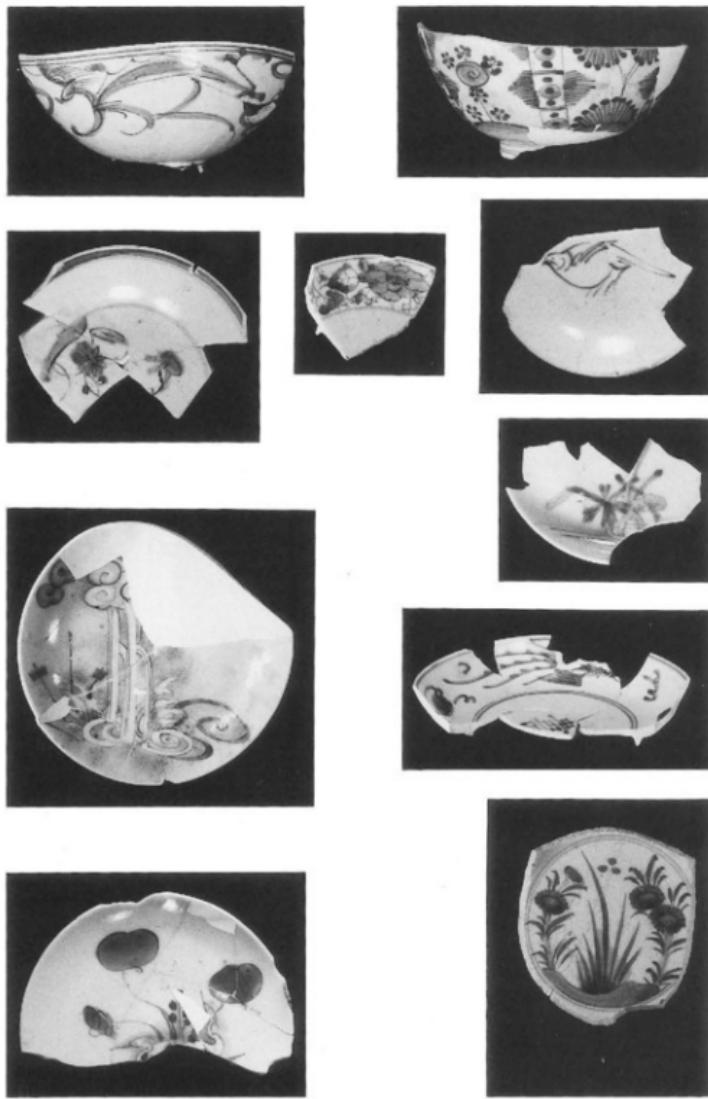
辺後ノ谷窯跡

図版33



近後ノ谷窯跡出土陶磁器① (1/3)

図版34



近後ノ谷窯跡出土陶磁器② (1/3)



永尾本登窯跡 1 遠景（南から） 2 近景（南から）

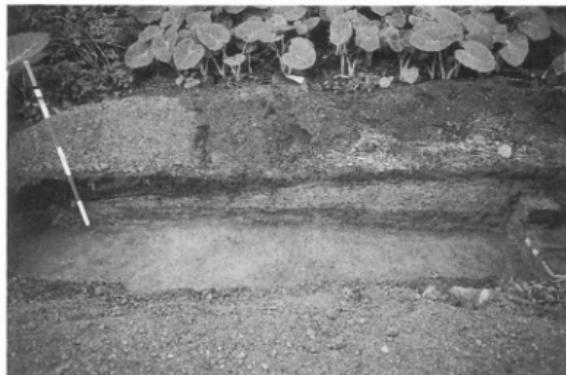
図版36



永尾本登窯跡 1 A レンチ検出状況（南から） 2 B レンチ検出状況（東から）



調査風景



C 1 トレンチ検出状況
(東から)



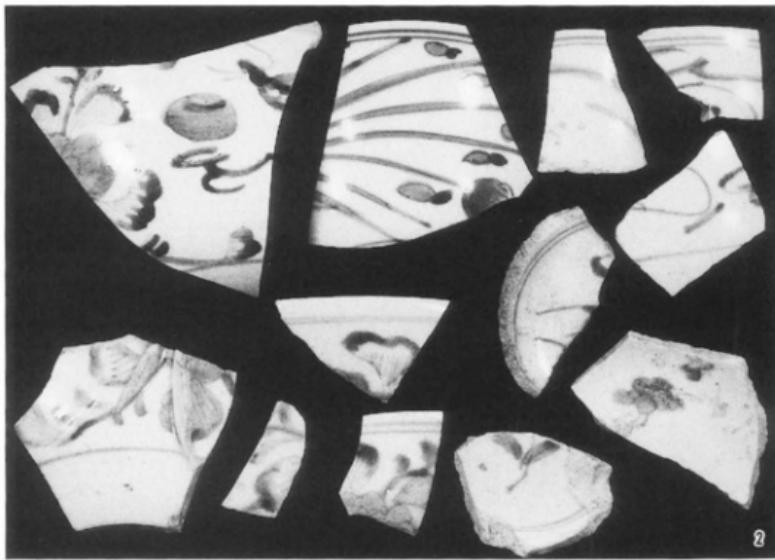
C 3 トレンチ検出状況
(東から)

永尾本登窯跡

図版38



永尾本塁跡 1 Dトレンチ検出状況（南から） 2 同（北から）



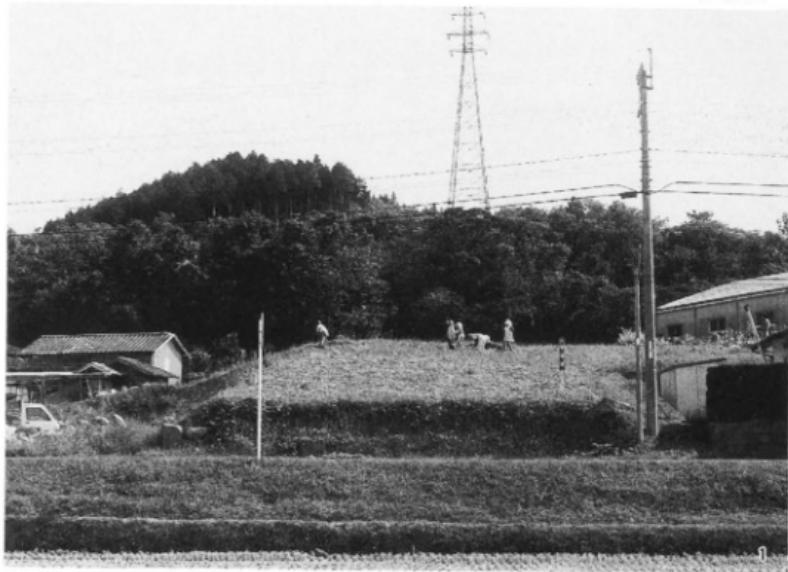
永尾本登窯跡 1 窯壁 2 物原採集陶磁器

図版40



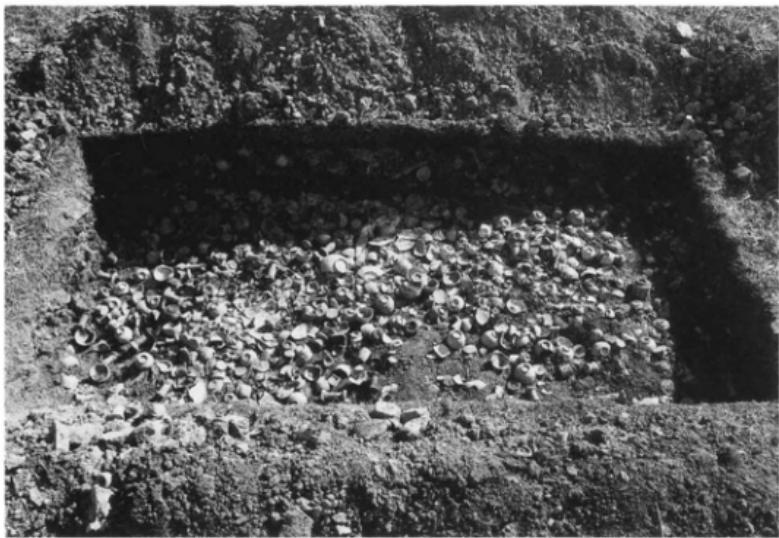
三段新登窯跡 1 遠景（南から） 2 近景（西から）

図版41



百貫西貫窯跡 1 近景（西から） 2 第1トレンチ全景（西から）

図版42



第2トレンチ物原出土状況



第2トレンチ土層壁面

百貫西窓跡



1 トレンチ中央部窯室床面（北半部）



百貫西室跡 2 トレンチ中央部窯室床面（南半部）と物原

図版44



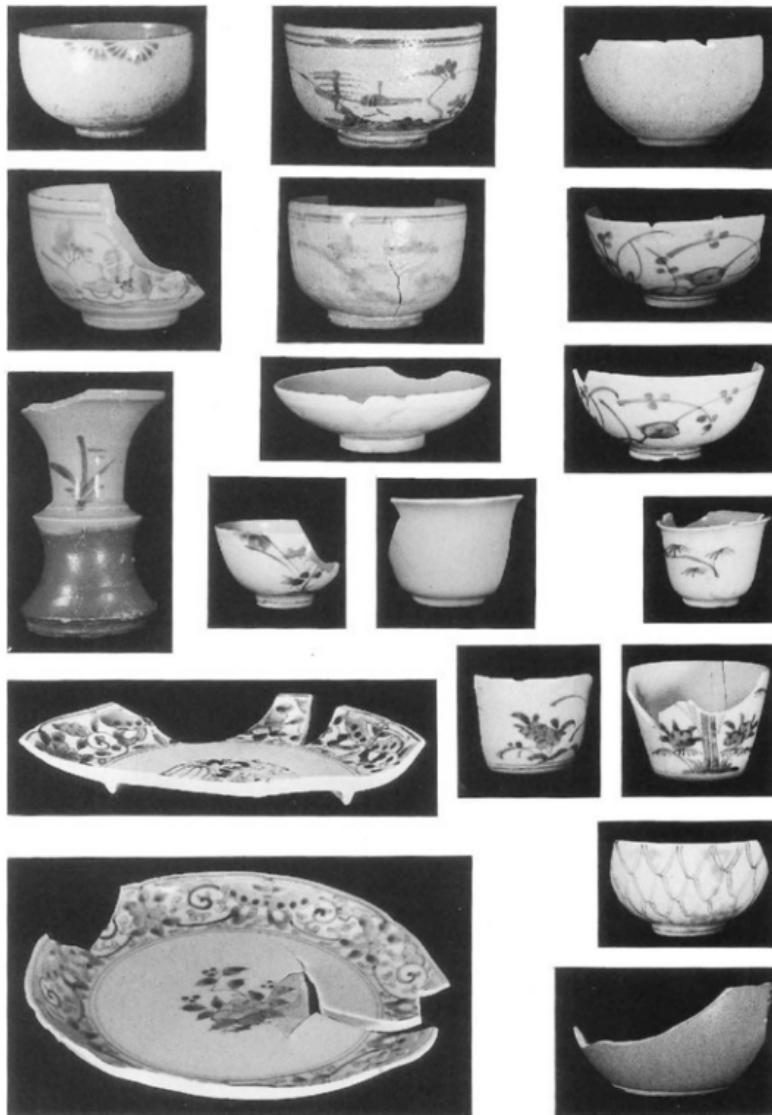
Ⅰ トレンチを西側から撮影



Ⅰ トレンチ窓層



Ⅰ トレンチ物原下部の柱穴
百貫西窓跡



百貨西窯跡出土陶磁器① (1/3)

図版46



百貫西塗跡出土陶磁器② (1 / 3)

波佐見町文化財調査報告書第4集

波佐見町内古窯跡群調査報告書

平成5年（1993）3月31日発行

発行所 波佐見町教育委員会

〒859-37 東彼杵郡波佐見町宿郷660番地

電話 0956（85）2111

印刷所 昭和堂印刷
